
今日から私？！

リリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日から私?!

【Nコード】

N3957A

【作者名】

リリィ

【あらすじ】

平凡な高校生の春崎一は健康的な男の子!…だった…ある夜に寝ていると、突然変な雲が現れて、その雲の正体は実は神様で…そして、一はその神様に女の子に変えられてしまうことに…そんな一が、女の子として(?)生活をおくることになってしまったわけで…もうオタクやらハイテンション神様やら…そんな人たちが繰り広げるお話です。

プロローグ

僕の名前は春崎一15歳。

お父さんが金田一少年の事件簿にハマってしまっただけだった。この名前……頭がよくなるようにだっただけ……ははは……

……まあそんなことはどうでもいい。

僕は生活バランスがいい方なので、11時までには寝て、7時には起きる。……まあこれもどうでもいい。

今日、僕は宿題をすませたあとにすることがなかった。10時には寝たはずなんだ……なのに僕は起きている……今は2時42分……ちよつとまで！今は草木も眠る丑末時！なんで僕はこんな時間に起きている！？まだ高校生の僕の体は健康的だし、眠りも浅くないはず！……たぶん原因は、僕の目の前に浮かぶ小さな灰色の雲………なに？この雲？雨雲？雷雲？どちらにしても僕の人生では初体験の出来事だ。

ふわふわ……ふわふわ……

しかもその雲らしき物体は僕の周りをクルクルと回っている………触ってみても触れられない。息を吹きかけてもピクリともしない。

そのときはとても気になったけど、睡魔に負けて僕は眠ってしまった……

第一章：神様の実験（前書き）

始まりましたー！『今日から私？！』なんかノリでスラスラと書いてやいました！変なところとかあるかもしれませんが、笑って流してあげてください。

楽しんで最後まで読んで頂ければ光栄です。

第一章：神様の実験

ピピピッピピピッピピピッ…カチッ…

「ん…：…ねむい…」

僕はいつも通りにセットされている目覚まし時計をきった。
そして、襲いかかってくる睡魔を振り払い、モソモソと布団から抜け出す。

シャー！！

カーテンを開けると眩しい光が差し込んでくる。
今日は晴れだ！僕はルンルン気分で着替を始めた。

「あれ？」

そのとき、昨夜見た小さな雲が僕の周りをふわふわと浮かんでいるのに気が付いた。

「なんだろう？ やっぱり夢とかじゃなかったのか？」

僕は雲に触ってみた…
モニユ！

「えっ！ 触れた！？」

なぜか昨夜触れなかったはずの雲に触れることができた…
モニユ！モニユ！

「ああ…やわつけえ…」

僕が雲の感触を楽しんでいると

「おや、お目覚めかな？ はじめちゃん。」

小さな雲から僕の名前を呼ぶ声…

「えっ!?!」

僕は驚いて雲から手を離れた。

「おいおい…そんなにビビらないでくれよ。ちょっとショックだなあ…」

なんかナンパをしてそうな口調の若い男の声…

「誰ですか？」

「よくぞ聞いてくれた！ オレは神様の息子！ 名前はシュバーレ・ウェザー・ゴッドだ！ よろしくー！」

シュ…シュバーレ？ 外国人なのかな？ なんかかっこええ!!

「そ、その神様の息子さんが僕になにか用でも？」

そう聞くと、シュバーレさんは目を輝かせながら言った

「そのとおり！ オレは君を実験体として選んだ！ 実験の準備は

昨夜やらせてもらったから、あとはオレが術を発動するだけで…」

「ちょ！ ちょっとまって！ 実験ってなんですか！？ 僕になにする気ですか！？ 準備って僕の体になにをしたんですか！？」

準備って僕の体にいったいなにを…？

「あれ？ 気付かなかったの？ 君がいきなり起きたから、オレは雲だけ残して帰ったってのに…」

雲だけ残して…？ …ああ！ だから触れなかったんだ！ シュバーレさんが入ってないとただの雲なんだ…いやっ！ そんなこと考えてる場合じゃない！ シュバーレさんが僕になにをしたかだ！

「僕になにしたんですか？」

「……………」

シュバーレさんは困った顔をして黙っている…ような気がする。実際僕から見たらシュバーレさんは喋る小さな雲でしかない。

「あの…シュバーレさん？」

「…ん？」

「いったい僕になにしたんですか？」

「……………」

また黙りこんでしまったシュバーレさん。

……ああ…僕はこれからどうなるんだろ…？ とりあえず、学校に遅刻したらいけないから、着替を終わらせようかな……

「いや…着替はやめたほうが…」

「えっ!？」

「いや…やっぱなんでもないわ…」

「もう…いったいなんなんですか？ 着替えるなっていってみたいり着替えろっていつてみたいり…本当のことをいつてくさいよ! どうせもう準備は出来ちゃってるんでしょ? ていうか、なんで着替をしようとしてるのわかつたんですか!？」

そういうと、シュバーレさんは少し間をあけていった。

「オレ、息子といえど神じゃん? なんとか…なんでもできるわけよ! …心読んだりとか…」

「えっ…最悪! 心読んだんですか? プライバシーの侵害ですよ! 神様といえどプライバシーは守らなきゃ! 人として!！」

「ゴメーヌ!!！」

な…んか感情が込もってないような…

「それより僕になにしたんですか? 教えてくださいよ! 勝手に僕の心読んだんですから! あと、姿見せてください! さっきから雲と話してると思うと変な気分です!」

すると、雲がなんというか…もわもわ…と、大きく膨らみ…そして破れた…

パン…!!

「これがオレの真の姿だー!!」

破れた雲の中から現れた一人の男性…背が高く、顔もかなりかっこいい系で整っている。髪はサラサラしてる長髪で、歳は僕よりちょっと上くらいかな?

「わぁー…かっこいいんですね! オーラが出てますよ! 『俺はかっこいいぜ!』みたいな!」

「ははは! あたりまえだろう? なんてってオレだぜ? かっこよくないわけないだろうー!!」

うわっ…この人ナルシストだ! 初めて見た…でも確にかっこいい人だから、自分でかっこいいと思っててもいいのかな?

「…それより僕になにしたか教えてくださいよ!」

「えー…しょうがないなあ…いえばいいんだろ…君の身長を縮めたの! んでもって今からオレは、君を女にしまっす!」

はあ? 今なんて? 意味不明な言葉が聞こえましたが…?

「え? 僕になにするんですか?」

「だから君を女にするって! 大丈夫! はじめちゃんはもともと

童顔だし、女顔だし、さらにオレの力が加わるから完璧なほどに可愛くなるって！　ていうか、今でも下手な女より可愛い方だよ！
絶対可愛いってー！！」

思考停止…

「はじめちゃん！」

「は、はい！」

「なにぼーっとしてんのー！　男の体にさよならいわなきゃー！
オレあっち向いてるから！　さあ今のうちにさよならを！　息子たち
にさよならをー！」

「しません！！　なにいつてるんですか！　それよりなんで僕を
女にする必要があるんですか！？　意味が分かりません！」

僕を女にする…なにゆえ？　まずなんで僕？　ていうか、なんで女
に？　ああー！　わけわからん！

「はじめちゃんはオレが選んだ実験体っていったっしょ！？　その
まんま、実験体だよ！」

「僕はいったいなんの実験体ですか！？」

「オレの力を試してみるための実験体だー！」

力ですか…力試しねえ…でも女はないでしょ！

「じゃあなんで女にするんですか！　僕は嫌ですよ！！　女になる意味が分かりませんもん！」

「ふっ…なぜ女にするかだと？　…オレの趣味だー！！　一度、男を女にしてみたかったんだよねー！」

趣味…ですか…いったいどんな趣味なんですか！？　シュバーレさんは！！

「じゃあなんで僕なんですか！！」

「それもまたオレの趣味だ！　はじめちゃんのしゃべり方なら、まだ女になってもイケるぜ！　むしろオレは好きだ！」

…好きだって…いや…ちょっとお…意味分かりませんし…

「僕、嫌ですよ！　女になるなんて！　悪いですけどほかをあたってください！」

「……はいはい…わかったよ…そこまで嫌がるならしかたない……」

えっ？　素直だ！　シュバーレさん素直だ！　やっぱりいい人なんだねー！　神様だもんね！　あたりまえだよね！

「…と、見せかけて！　……せい！！」

その瞬間部屋の中が光った！　…気がした。

「ええっ！？　『せい！』って！　『せい！』ってなんですか！？

意味が分かりませんよ！ しかも今の光なんですか！？ 危ないじゃないですか！ 僕の目が！！」

「はっはっは！ これでもうはじめちゃんだー！ オレの理想のはじめちゃんだー！！！」

え？ 理想のってことは……僕、女の子になっちゃったの？ でもなんにも変わらないし……

「シュバーレさん！ さっき光で僕になにしたんですか！？ 理想ってなんですかー！！！」

「ふっ……まだ男だよ！ はじめちゃん！ なにもそんなに怯えることはないさ！」

本当だ……男だ……僕、男だよ！ まだ男だよ！ ……まだ？

「ちよつとシュバーレさん！ 『まだ』ってなんですか！？ 『まだ』ってー！」

「そのまんまの意味だな……まだってこと！ まだ男！ あとちよつとだけ男！ そしてあとちよつとで、はじめちゃんは可愛い可愛い女の子おー♪」

ああ……やられた……もういや……なんでこんなことするの……？

「実験だっ……！」

「また心読んだんですか！？ やめてくださいよ！ それより戻れるんですよね？！」

「ははー！　ゴメーヌー！　戻れるかどうかはわかんない♪」

「あー！　ムカツクー！　…シュバーレさん！　あとちょっとつていったいどれくらいなんですか！？」

「ん…30秒くらい」

「短！　短すぎますよ！　なんもできないじゃないですかあ…ああ…ああ…泣きたいよ…」

「30秒後にオレの胸で泣きたいだけ泣いていいよー！」

「…嫌です！　僕は男ですよ？　なにが悲しくて男の胸で泣かなきゃいけないんですか！！　…はあ…」

僕が溜め息をつくとき…

「さーん！　にーい！　いーち！　…ゼロー！！」

いきなりシュバーレさんがカウントダウンを始めた…ていうか…終わった！？　その瞬間に、僕を優しく暖かい光が包んだ…

「な！　なんですか！？　この光はー！　…しかも出られないー！　出してー！　出してくださいー！　女はやだー！！」

シャアシャアシャア…！
シャアシャアシャア…！

奇妙な音が聴こえる…ああ…もうだめ…

思考停止…

「はじめちゃん！ はじめちゃん！」

「ん…んん…」

あれ？ 誰の声？

「うわお！ はじめちゃんが起きた！ しかも、さっきのはじめちゃんの声色っぽい！ 顔見せて！ 早く顔見せてー！」

え？ 僕の声が？ なんで？

「なんですか？」

「うわお！ …こいつあやばいぜ…今のはじめちゃんは…オレからすると、170キロのジャイロボールがど真ん中にストライクだ！ しかもまったく手が出せないほどキレがあり、そして半端じゃないほどノビがある！ はっきりいって、神だ！ 食べちゃいたいよー！」

…僕の顔が？

「…食べないでくださいよ？ アンパンマンじゃないんですから！ …ていうか、今何時ですか？ え！？ これ、僕の声ですか？！ まるで女の子みたい…」

「いや！ はじめちゃんは今女の子だから！ 可愛い可愛い女の子ですから！ しかも予想以上にスタイルよくなったなー！ Bの予定だったのに、Cはあるよ！ やったね！ オレ、食べちゃいたいよ！」

「女の子… なっちゃったの？ やっぱり…」

僕は自分の体を見下ろした。するとそこには、今までなかった脂肪の固まりが僕の胸に2つ着いている…えっ！？ なんかでかくない？ 気のせい？ …そしてすらりとのびた綺麗な足。

太くなく、それでいて細すぎない腕。綺麗なラインを描いているウエストのくびれ…なんで？ すっごいことなってるよ！ 僕の体…

「ねえはじめちゃん！」

「…なんですか？」

「食べていい？」

「ダメです！ 論外です！ 戻してください！」

「ん？ 無理！」

「なんですか！？ 実験は成功したじゃないですか！ 戻してくださいよ！」

「実はオレ、戻せないんだよね…ごめん！ マジでごめん！ 女の子として生きて！」

「ああ……」

その場に崩れる僕……そりゃないよ神様あ……

「大丈夫！ オレがはじめちゃんに会ったことある人の頭の中に、
変わっちゃったことを記憶させるから！ だから、学校とかは大丈
夫！ 全然違和感ないと思うから！」

そうだ！ 学校！ いったい今何時！？

「8時26分……」

8時26分……？ 学校始まるのは確か50分だから……

「ヤバイ！ 遅刻する！ 僕遅刻するの嫌いなのに！」

「よし！ とりあえずみんなに記憶させたよ！ さあ！ いって
らっしゃい！」

と、とりあえず着替を！

「ああ！ 制服ならちゃんとスカートにしといたぜ！ 早く着替え
て！」

「……………」

ええい！ 迷っている暇はない！ スカートなんて……スカートなん
て……履いてしまえー！！

「おお！ 似合う似合う！ 可愛いよ！ はじめちゃんとても可

「愛いよ！」

「ごめんなさい！ 全然嬉しくありません！ …あ！」

「なにになに？ どうしたの！？」

下着ってやっぱり女性物？ 嫌だなあ…恥ずかしいよ…なんか男として大切な物を失いそうだよ…

「ああ！ そのことなら大丈夫！ いちおうはじめちゃんの服は、全部女の子用に変えちゃったから！ もちろん下着も！ 着るよね？」

「ああー！ もう！ また心読んだんですか！？ お願いですからやめてくださいよ！…！ …て、全部ですか！？ 服も下着も全部ですか？」

「嫌だなあ！ もちろん全部だよ！ あとかわいい服ちょっと増やしてみたりしたんだけど！」

「ああ……もういいですよ！ ブラジャーでもなんでもしてやりますよ！ なんかシュバーレさんのことだから、その内洗脳とかさせてでも着させそうですから！！！」

「うん！ しそう！ はじめちゃんがあまりに可愛いから！」

「可愛いっていわないでくださいよ！ なんだかとても虚しくなりますから」

「だってはじめ可愛いんだもんよ！ しょうがないんだもんよ！」

「誰の真似ですか!? ふざけないでくださいよ!」

ああ! もう35分!? 間に合わないよー!

「…ええい! このまま着てやる! どうせ今日は3限までの短縮授業だ! どってことないさ!」

そうさ! どってことないさ! 僕、まだ部活とか入ってないし!

もう、みんな今の僕の姿のを知ってるんだ!

べつになんか言われたって構わない! ああ! 構わないさ!

学校まで走って行ってやるさ!

「でも、素晴らしいフォームで走るとパンツ見えるよ! スカートだから! まあ、オレはそれでもいいと思うけど! はじめちゃんのパンツ見たいし!」

なにを言ってるんだこの人は! ちょっと変態すぎませんか! ?
僕のパンツ見たいって…ああ…なんかとってもいやな気分…僕は男なのに…

「ていうかまた心読んだでしょ!!」

「うん!」

「ああー! もういいですよ! どうせ今も読んでるんですよ!
読めばいいじゃないですか! 僕はもう知りません!」

「ごめんなさい! もうしません! 許して!」

ああ…謝られると許したくなっちゃうのはなぜ？ 僕、優しすぎなの？

「わ、わかりましたよ……もうしないでくださいね…」

「はい！ もうしません」

素直ー！ シュバーレさん素直！

なんかとってもイイコじゃないですか！ ……ヤバ！ それより学校行かなきゃ！

「ああ！ もう40分！ ぼ、僕行きますね！」

「いってらっしゃーい！ オレも後から行くよ！」

なんか聞こえたけど無視！ そして僕は急いで学校へ向かった。

第一章：神様の実験（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

いちおう、まだまだ（？）続く予定なんで、これからどうか読んでやって下さい。

第二章：僕とオタクな変態と（前書き）

すみません！またノリで書いてしまいました！またまたおかしいかも
しれませんが、笑って流してやってください。

第二章：僕とオタクな変態と

「あら、はじめどうしたの？　まだ学校行ってなかったの？　遅刻するわよ？」

「えっ？　お、お母さん？　…うん。行ってきます！」

僕が全力で階段を下りて玄関へ着くと、お母さん（名前は春崎恭子）が僕に話しかけてきた。

僕、今女の子なのに…全然普通に接してくるなあ…これがシュバーレさんが言ってたみんな知ってるってことなのかな？
確かに違和感ないや！　…でもなんか悲しいなあ…

「行ってらっしゃい。はじめ、オオカミには気を付けてね！」

「うん。…いや！　お母さん、オオカミってなに！！？」

「はじめは今は女の子なんだから、男はみんなオオカミよ？　気を付けてね！」

「……うん。じゃあいちおう気をつけるよ…」

…男はみんなオオカミってちょっとなに？　お母さんがおかしいよ！
ああ…意味分かんないよ…僕は男だったんだよ？　僕もオオカミってこと？

「行ってきます。」

「行ってらっしゃい。オオカミには気をつけるのよー！」

「もうオオカミはいいから！」

僕は玄関を飛び出した。

大袈裟かもしれないけど、本当にこれくらいしないと間に合わないと思う。

いつも僕が通う通学路は歩いて学校まで20分はかかる…だけど、今は45分…学校は50分からだから、あと5分しかない…だから走るなんてもんじゃない！

風になるつもりで行くしかないんだ！！

たとえこの足が千切れようと、僕は全力を尽して走りきる！ 足には自信があるんだ！

「おはよう」

「おはようございます」

僕は挨拶をしてきたお爺さんに、笑顔で挨拶を返し

「おはよう」

「おはようございます」

そして挨拶をしてきたお婆さんに、笑顔で挨拶を返し

「お、お前は…はじめか？ おい！ はじめなのか！？ 待て！ 待てくれ！ はじめらしき人！！！」

「……………」

僕は、僕の名前を呼ぶお母さんいわくオオカミを無視して走り続ける…

「待て！ …くそっ！ こうなったら捕まえるぞ！」

そしてそのオオカミは僕を捕まえるために走り出した…

「俺のほうが足は速いんだぞ！ お前は女だから俺のほうが体力はあるんだぞ！ 追い付いちゃうぞ！」

ああ…なんなんだよ…なんで僕はこんなに不幸なの？ よりによってなんで、あんなやつに会っちゃうの…

…タタタタタタタ！

ヤバい！ 追い付かれる！ そんな…僕があんなやつに…あんなやつに捕まるなんて…こうなったら！

「よし！ 追い付いたぞ！ はじめ！ はじめなんだろう？ 返事してくれ！」

「僕に寄るな！ これでもっ！」

シュツ！ ビュン！

「くらえ！」

ビュン！ ビュン！

僕は手に持っている鞆を振り回した

「おっと！ …危ないだろ！ はじめ！」

「うるさい！ 僕に寄るな！」

「いいじゃないか！ いいじゃないか！」

この変なやつの名前は前田晃寛…はっきりいって、オタクで変態な救いようのない馬鹿……なんで僕はこんなやつと友だちなんだろう？

「やはりはじめか！ なぜ俺を無視するんだ！」

「うるさい！ 僕に寄るな！」

「ははは！ そうかそうか！ 寄って欲しいなら寄って欲しいと言えばいいじゃないか！」

「うわあああああ！」

僕は全力で逃げた…

普通逃げるでしょ？ こんな日本語が通じてない変態が詰め寄ってくるんですよ！ 耐えれない！ 絶っつつ対に耐えれない！

「あ！ 待て！ はじめ！ 待ってくれー！」

そのまま僕は、後ろから追い掛けてくるオオカミ……もとい前田から逃げるようにして学校まで走った。

第三章：転校生（前書き）

なんか無理矢理感ありまくですが、気にせず呼んでもらえたら嬉しいです。

第三章…転校生

ガラガラガラガラ…

「はあ…はあ…ま、待ってくださいー!」

僕は校門を閉めている生徒指導の広谷先生に向けて叫んだ。
僕の通う学校は

「遅刻した生徒は入れさせないぞ!」

といわんばかりに時間ピッタリに校門を閉める。

…ていうか、珍しいよね? 校門を閉めて遅刻した生徒を指導する
学校なんて!

「ん? 誰かと思えば…春崎か? いやあー! 変わったなお前は!
ずいぶんと可愛くなってー!」

ああ…誉められてるんだろうけど、全然嬉しくないのはなぜ? こ
の不快感はなぜ?

「はあ…はあ…はあ…そ、それより先生…」

「なんだ?」

「はあ…はあ…僕、遅刻ですかあ…?」

「…いや、ギリギリセーフってことにしてやろう。今日はいろいろ
あっただろうし、春崎だからな!」

「…僕だから…ですか? どこからその理由が出てくるんですか先

生え？」

「き、気にするな…それより早く教室に行け！　ホームルーム始まるぞ！」

「ああ！　それは大変だあ！　先生！　ありがとうございます！」

「もう遅れるなよー」

タタタタタタタ：

「うおおおお！」

「おっ！　前田か？　お前アウト！　遅刻！」

「なんで俺は遅刻に！？　はじめにはセーフって言ってただろ！？」

「はい、まずその言葉づかいから直せ。それに、お前には遅刻の理由がないだろ？」

「理由？　ありますよ！　俺だって！」

「なんだ？」

「睡眠不足」

「そうか、それはお前が悪いな。今後とも気をつけろ」

「なんてことだ…広谷先生ともあろうお方が、はじめがいくら可愛い女の子になったからって評価を上げようと遅刻をセーフにすると

は…はじめは元は男ですよ!？」

「おい前田!　なんてことを言うんだ!　春崎はもう女の子だぞ?　そんなこと気にするな!」

「おお!　…先生!　本当のところ俺もそう思ってます!　俺は、美少女になったはじめを、女として見ていくつもりですよ!　はじめは究極の美少女だ!　俺はそんな美少女と友達だということを誇りますよ!」

「そうだろ!　そうだろ!　春崎は俺から見ても素晴らしい美少女だ!　完璧だよ春崎は!　俺は自分の理性を保つのにイッパイイッパイだったんだ!　セーフにしたってバチはあたらんさ!」

「そうですよ先生!　はじめは完璧ですよ!」

「「はははははは!」」

「……なに言ってるんですか?」

僕は、僕のことについて熱く語りあっている二人の可哀想な男に向けて言った……

「は、春崎!!　…お、お前…どこまで聞いてた?」

「……一部始終聞いてました…なんか先生が、すごい大きな声で語ってましたんで…」

そう、僕は先生に

「教室に行け」

と言われて、教室に向かおうとしていたら先生と前田の異様な会話が聞こえたから校門まで戻ってきたんだ：

「おお！ はじめー！ 俺のために帰ってきてくれたんだな？ そうだろ！」

「僕は先生と前田の異様な会話が聞こえたから戻ってきたんだ：

「おお！ 先生の声が春崎の心に届いたんだな！？ 先生嬉しいぞ！」

「だから！ 先生と前田が異様な会話してるからでしょ！？ おかげで僕、遅刻しちゃったじゃないですか！！ どうしてくれるんですか！？」

「……すなかった…先生熱くなりすぎた…」

「えっ？ …いや…：わかってもらえたならいいんです…：あと、これからは熱くなるなら、もっとまともなことで熱くなってくださいよ？」

「なにをいうか！！ はじめの素晴らしさを語ってなにが悪い！？ 美少女の素晴らしさを男が語りあってなにが悪いと言うんだ！？ …いや！ 悪くない！ 男は語ってこそ、見い出せるものがあるのだから！ ……ひでぶー！！！」

はい。僕の正拳突きが、前田お腹にのクリーンヒット！ そして、奇妙な声をあげて倒れる前田…：殴った手が、かなり痛い…

「えっ？ えっ！？ うそっ！？ 前田？ ねえ？ 前田！？ 大

丈夫？ 大変だ！ 保険室に連れてかなきゃ！」

「…春崎。前田のことは、先生に任せて、お前は早く教室に行け」

「えっ？ いいんですか？ でも僕のせいですし…」

「行きなさい。ここは先生に任せなさい！」

「…じゃ、じゃあお言葉に甘えて…前田をお願いします。」

タタタタタタ！

前田を先生に任せて、僕は教室に向かった。

僕のクラスは1―3。

僕は高校1年生、1年生は6クラス編制だ。

その6分の1の確率で僕は3組になったわけだけど、運が悪いことに前田も1―3…ああ…これから僕の学園生活はどうなるの…？

そんなことを考えていると、教室に着いた。

廊下に人がいるから今は休憩時間かな？

ガラガラ…

「あら！ 春崎君！ 遅刻なら事前に先生に連絡しておいてよー！

私、欠席って書きちゃってるじゃない！」

「あ…はい。すみません…」

入るなり僕に注意してきた担任の佐藤真理子先生…女子には、真理ちゃんって呼ばれてるの聞いたことあるなあ…あ、どうでもいいか…ていうか全然普通に接してくるなあ…まあ、そっちのほうが嬉

しかったりするんだけど

「はい。みんな席に着いてー！ 授業始めますよー！」

ガタガタガタ：

一斉に席に着くみんな。

このクラスってイイコばかりなんだなあ：

「はーい！ 今日のロングホームルームはみなさんに嬉しいお知らせがあります。：なんと！ 転校生を紹介しまーす！ さあ、入っ
ていいわよ。」

ガラガラ：

「どうも！ あまきしん 天気神です！ よろしくね！」

教室に入ってきたテンション高めの転校生：なんかシュバーレさんに似てるような：

「はい。天気君は：えーっと：あそこ！ 春崎君の隣に座ってね！
席空いてるから！」

「分かりました！」

スタスタ：

「よろしくー！ はじめちゃん！」

はじめちゃん？ …てことは…この人シュバーレさん！？ …でも

髪の色とか違う、僕と会ったときは金色だったのに天気君は黒だし…名前も違うし…

「髪は染めたんだよ」

「……………」

うん。この人シュバーレさんだ。確実にシュバーレさんだ。またなぜ学校に？

「後から行くって言っただろ？」

「天気君？ 心読みすぎだよ？ 僕、怒るよ？」

「すみません」

「わかってくれたならいいよ。それよりなんで偽名なの？」

シュバーレ・ウェザー・ゴッドって名前じゃなかったっけ…？

「失礼な！ 天気神はオレの日本の名前だ！ 偽名じゃないぞ！

天気はウェザーで、神はゴッドだ！ だから天気神なの！ わかった？」

「シュバーレはどこいったの？」

「ははは…気にしない気にしない」

うう…すごい気になる…

「はい。みんな注目ー！ 驚くことなかれ、転校生は一人じゃないわよー！ どうぞー」

今日は先生テンション高いなあ…しかも転校生がもう一人！？

ガラガラ…

「はじめまして。宇佐美麗香と申します。どうかよろしくお願いしますわ」

うーん…なんかこの人キャラ濃いぞ…お嬢様？

「はい。宇佐美さんも春崎君の隣に座ってね！」

……また僕の隣ですか…

「わかりましたわ」

スタスタ…

「どうも。春崎さん。よろしく願いします。仲良くしましょうね！」

「うん。よろしくね。あっ！ はじめでいいよ」

「そうでございますか？ それでは、私のことは麗香と呼んでくださってもかまいませんわ」

「うん。わかったよ麗香さん」

「それよりはじめさん。なんではじめさんは、先生に春崎君って呼ばれてますの？　女性なのに不自然じゃなくって？」

「あ、ああ……それはね……」

ロングホームルームは麗香さんと話をしていたら終わってしまった。

第四章：体育の授業（前書き）

できました！第四章！

…笑えるかな？とりあえず楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。

第四章：体育の授業

今僕は2限目の国語を終えて、3限目の体育の準備をしている。

「はぁ…」

ため息が出る…

僕の体は女の子だけど、心は男の子…いったいどっちの体育に出れば？

僕的には男子のほうがいいかな…でも、この体じゃあ男子にはかなわないし…

「はぁ…」

「あら？ はじめさんどうしましたの？ 早く行かないと遅れますわよ？」

麗香さんが心配そうに声をかけてきた。

麗香さんとは1限目のロングホームルームのときに僕の話をしているうちに仲良くなってしまったんだけど…

「あ、うん。ごめんね。…ねえ麗香さん。いったい僕はどっちの体育に出ればいいのかね？」

僕は麗香さんに聞いてみた。

「そうですねえ…元は男だったとしても、今は女なわけですし…この際女子の体育に出てみてはいかがですか？」

ああー…そっちきたかあ

「…でも僕は男だったわけだし…みんな着替とか嫌じゃないのかな？
…かといって男子と着替もちよつとまずいし…」

「私は別になんとも思いませんわよ？ はじめさんは今は女なわけですし、悪い人でもないですから。…それに、これからは女として生きていくんでしょう？ 女子のほうで問題はないと思いますわ」

「……そ、そうだよね…でも…」

でも嫌だなあ…女子と着替とか恥ずかしいよ！ ああー…どうしよう…？

「…まだ悩んでますの？ もう男なら覚悟を決めて、女子のほうに出るしかありませんわ！ 女になってしまったのですもの！ 運命さだめですわ！ さあ早く準備をいたして！」

「は、はいい！」

麗香さんに一喝された僕は急いで準備をした。

「準備はよろしくて？」

「あ、うん。準備できたよ。…それより、女子ってどこで着替えるの？ 僕場所知らないよ？」

僕は男だったので、着替は教室だった、だから女子の着替える場所
は知らないんだけど…

「それなら問題ありませんわ！ さつき私が、先生に聞いておきましたもの！」

麗香さん準備いいなあ…

「そ、そうなんだ」

「はい。体育館に女子更衣室があるらしいですわ！ …はじめさん。体育館へ私を誘導してくださいませんか？ 私、転校してきたばかりなので、体育館の場所はわかりませんの」

「あ、そうだったね！ それじゃあ行こうか」

僕は麗香さんを引き連れて、体育館へ向かった。

体育館は教室のある本館と、音楽室や美術室などの選択教室でつかう教室がある別館との間にある。

「まあ…なかなかいい体育館ですわね」

麗香さんが体育館を見て驚いている。

この学校（あ！学校名は清流高校です。）の体育館は去年新しく建てられたものらしい。

だから、清流高校には体育館は2つある。

2つあるといういろいろ便利だね！ 部活とかに！

…まあ僕は部活には入ってないんだけどね…

「あっ！ 宇佐美さんにはじめちゃんじゃない！ 早く着替えないとヤバいんじゃない？ 私はもう着替えたけどねー！」

僕達に話しかけてきた一人の女子生徒。たしか名前は…

「えーと、ごめんなさい。まだ私、顔と名前が一致しませんの…お名前を聞いてもよろしくて？」

「あ、ごめーん！ まだ自己紹介してなかったね！ 私の名前は高橋紗香よ！ よろしくねー！」

そう、高橋紗香…僕、全然話したことないから分からなかったよ…

「はい。高橋さん。よろしくお願いしますわ」

「ああ！！ それより早く着替えないと！ 高橋さん！ 更衣室ってどこですか！？ 麗香さんに教えてあげてください。…って言うか、僕はどこで着替えてたらいいんだろう…？」

「え？ 更衣室ならそこよ。あと、はじめちゃんならいいんじゃないかな？ 一緒に着替えても！ 私は別にいいと思うよ！ みんないいって言うと思うしー！ それより早く着替えてきたら？」

なんか適当だなあ…ていうかなんか、軽く

「着替えれば？」

っていうけどさ…僕は男だし…なんか…ね？ …抵抗が…

「どうしたの？ はじめちゃん早く着替えないと、授業遅れるよ？」

「う、うん…そうだね…着替えてくるね…」

僕は少しためらいながら更衣室のドアを開けた。ガチャ…

「わあー…広いんだなあ更衣室って！ …でもって、ここが男子禁

制の部屋なんだよね…」

ああー…自分で言ってる悲しくなってきたよ…ここは喜ぶところなのかな？ 僕、いちおう男の子なわけだし…

「…はじめさん！」

「なに？」

「もう時間がありませんわ！ 急いで着替えないと遅刻になりますわよ！」

僕は更衣室にあった時計を見た…今は11時3分…授業は5分からだから…ああ！！ あと2分しかない！ ヤバイ！ ヤバイよ！！ 早く着替えないと！

「ああー！！ なんてことだ…体操服が大きい…長い！ 長いよ！ 体操服が！！」

僕が今着ている体操服…なぜか、僕にサイズがあわない…。なぜ？ 男のときはちょうどいいサイズだったのに…女の子だからかな？ それもあるだろうけど、他にも別のなにかが…
……………ああー！！！！

「れ、麗香さん？ いきなり聞くのもなんだけどさ…身長何センチ？」

「身長ですか？ 私、身長は165センチありますわよ。でも、いきなりなんですか？」

「いや…別に…」

ああ…そういうことね…麗香さんが165センチね…僕も165センチあったはずんだけどなあ…今は麗香さんが僕より高いよ！…てことは、僕の身長は165センチ以下ってこと？

ああー…やつとあそこまで伸びたのにー……これはシュバーレさん…もとい天気君のせいだね。

…ああー最悪ー！！

「あつ！　でもハーフパンツはちょうどいいサイズなんだね…」

天気君がしたいことがわからない…ハーフパンツはサイズをあわせてあるのに、なぜ体操服はサイズをあわせてくれなかったの？　謎だよ…

キーンコーンカーンコーン…キーンコーンカーンコーン…

「うわ！　授業始まっちゃうよ！！　くっ…しかたない！　もう、これでいいや！！　行こう！　麗香さん！」

「わかりましたわ！」

僕達は急いで更衣室から体育館へ向かった。
って、いっても更衣室は体育館にあるからすぐなんだけどね！

「あつ！　はじめちゃん！　麗香ちゃん！　ギリギリセーフだねー
！」

体育館に入ると、天気君が声をかけてきた。

「あ、天気君！　ちよつと聞きたいことがあるんですけど！　いいですか？」

「ん？　なに？　はじめちゃん……もしかして愛の告白……？」

「うんっ。全く違う」

「もー！　照れちゃってー！　可愛いんだから！　はじめちゃんは☆」

照れてない……僕、全然照れてないんだけど……

「あのですね、まずなんで僕の体操服がこんなにおっきいんですか？　ハーフパンツはちょうどいいサイズなのに！」

「そのほうが可愛いじゃん♪　これって萌えてやつ？　今オレは、はじめちゃんに萌え萌えだねー！　萌え♪　萌え♪」

「意味わかりませんよ！　サイズあわせてくださいよ！　すっごいぶかぶかなんですよ！　……これ！　見てくださいよ！　絶対今の僕なら、この体操服に二人入れますよ！　風通し半端じゃないですよ？　袖から入ってくる風が……！」

「そんなことないよー！　はじめちゃん！　ほらっ！　男子のみなさんから大人気じゃないか……！」

いや……話通じたのかな……？

それに男子に大人気って……えっ？　ヤバいんじゃない？　ちよつとそれって危ないんじゃない？　なんか

「あれって春崎なんだよな？　……すげえ可愛い……」

とか

「うわ！ 見えそう！ 体操服でかいから見えそうじゃね！？」
とか…

「可愛いなあ…春崎って可愛いなあ…お兄ちゃんっていわれたいなあ…」

…とか…

「これは写真に納めるしかないな！ 保健室を抜け出して、カメラ買ってきといてよかった！」

とか…

「…えっ！？ 前田！？ なんでいるの？！」

「ははは！ はじめー！ 俺はお前の正拳付きをくらって目覚めたのだよ！ 自分の打たれ強さに！」

うん。やっぱり日本語通じないのかな？

「前田？ 僕はなぜ前田がここにいいのか聞いてるんだよ？ …打たれ強さとか聞いてないよね？」

「なぜここにいいのかだと？ ふっ…はじめを撮るために決まってるだろ…！」

すごい力強く僕の目を見て言ってきた前田。

…うーん…危ないね…110に電話しようかな…？
まあ、なによりも…

「そんなことせずに授業に集中しろ！！」

「…しかたがない。はじめがそう言うならやめる」

うん。絶対裏があるな！ でもさすがに前田でも授業中はないかな…

ピーー！

「はい集合ー！ 授業するぞー！！」

あ、広谷先生だ…（実は広谷先生は体育教師です。）…あれ？ 先生一人？ ふつう男子と女子で二人いるはずなのに…

「今日は女子担当の吉岡先生が出張なので、男子女子ともに俺が見ることになりました。というわけで、今日はバスケをしたいと思う！ 2点先取で負けたほうが交替なー！ チームは男女混合！ 六人で適当に作ってくれ！」

えっ？ 男女混合？ 女子不利じゃん！

…僕は誰としようかな？

「はじめちゃん！ 私とチーム組もー！」

「あ、高橋さん。いいよー！ 麗香さんも一緒にしようよ！」

「わかりましたわ！」

今三人か…あと三人…

「はじめちゃ〜ん！ 一緒にしようよー！ 高広と前田を連れてきたからさー！」

「えっ？ あ、うん。いいよね？ 高橋さん？ 麗香さん？」

「いいよー」

「よろしいですわ」

よし！ これで六人だ！

「おい。はじめ…」

「なに？ 高ちゃん？」

「その呼び方はやめろ！！！」

彼の名前は中山高広（高ちゃん）。

僕の幼馴染みで、小さいときはよく遊んだなあ…今は高ちゃんが野球部に入っちゃったから、遊ぶ機会がないけど…

「なんで？ 今までもこう呼んできたじゃん！」

「…その声で呼ばれるのは初めてだ！ もっとこう…なんか呼び方はないか？」

「ええ〜！ …わかったよ…じゃあ高広君でいいかなあ？」

「……やっぱ変えんでいいわ…」

なんか、高ちゃんの顔が赤かったような…気のせいかな？ ジー…

パシャ！ パシャ！

…後ろから妙な音がするのも気のせいかな…

クルッ…

「……………」

「……………」

僕が後ろを向くと、低姿勢でカメラを構えている前田と目があった…

「なにしてるの？」

僕が前田に聞いた

「バ、バードウォッチングをば…」

バレバレの嘘を言いながら僕から目をそらす前田…

「鳥…いないよね？ 体育館だから…」

「い、いるさ！ 羽がない天使たちが…！」

「……………天使って鳥じゃないよね？」

「くっ…ああ！ そうさ！ 俺ははじめを撮っていたさ！ なにが悪い！ 俺は自由だ！ 俺がなにをしようと俺の勝手……あべし！

「！」

僕は前田の横腹にローキックをした。
…大丈夫だね？ 前田だし

「打たれ強さに目覚めてしまった」

とか言ってたし…

「……今のは効いたぞはじめ…」

「うひゃあ!？」

び、ビックリしたあ……下を見ると僕の足を掴み起き上がろうとする前田…まるでゾンビだよ……もっかい蹴っところかな？

「えいっ！」

「トリノ!!！」

奇妙な叫びをあげて倒れた前田………トリノ？

「はじめちゃん！ オレたちの番だよー！」

「う、うん！ いこう！ みんな！」

「りょうかい！」

「はいですわ！」

「ああ」

「俺のスーパープレイを見て惚れろよはじめ！」

なんか一人だけ謎の返事をしたけど無視。

「おおー！ 春崎じゃん！ 悪いけど俺達には勝てんぜ！」

「えっ！？ 敵チームって亮平のチームなの！？」

僕に宣戦布告してきた彼の名前は、谷口亮平。

高校に入ってから初めてできた友達で、中学のときはバスケット部キャプテンらしく、今も現役バスケット部…はつきり言っただけじゃなく上手い！ ……僕達勝てるのかな…？

「おお！ はじめちゃんの友達？ オレ、天気神っていうんだ！ よろしくー！」

「ああーっ！ 今日きた転校生か！ よろしく！ 仲良くしようや！」

「「はははははは！」」

なんかこの二人仲良くなるの早くない？ なんか握手してるし…

「あの…ジャンプは誰がしますの？ 私はジャンプ力ありませんから、遠慮させていただきますわ」

「あ、オレするよ！ ジャンプには自信あっから！」

「天気さん。まかせましたわよ！」

「オッケ！ オッケ！」

天気君なら、ジャンプっていうより飛びそうだよ…

ていうか敵チーム男子ばかりだよ！

…勝てるかな？ でも勝ちたいな…。

よぉーし！ 頑張るぞー！！

第四章：体育の授業（後書き）

はい。中途半端な終りかたですが続きがあります。

次は試合です！

また読んでくださると嬉しいです。

第五章…バスケは得意?!

ダムダムダム!

体育館にボールの音が響く。

今は、天気君のジャンプのおかげで僕達のチームがボールを持っているわけで…

「オラオラオラ! 俺からボールが取れるか!?!」

しかもボール持ってるの前田なわけで…

「遅い! 遅いわぁ! それでも体育会系かぁぁ!」

こんなことを叫びながらスラスラと流れるように、人を抜いていく…前田は部活には入ってないし、土日祝日はたいてい家にいて、ゲームかパソコンなどをしているらしい…なのにこの運動神経のよさは何?!

また一人二人と抜いていく前田…

「おっと! これ以上は進ませねえぜ!」

おお! 亮平かっこいい! 敵だけど応援しちゃうよ!
前田を止めてー!!

「ふっ…青二才が…貴様は俺のボールに触れることは不可能!」

「じゃらくせえー!!」

ダムダムダム…キュッ！
…キュッキュッ！ タン！ シュッ…ポス……ダン！ ダンダン
ダン…

皆さん…今の効果音だけでわかりましたか？
ではわからなかったかたに説明しよう。

前田を迎え撃った亮平は、前田のボールを取ろうと、接近戦を仕掛けてます。

それを前田は素晴らしい動きで避け……シュートを決めました！
前田ガッツポーズ！ ……亮平ショックだろうなあ…

「前田！ まだ試合は終っちゃいねえ！ 勝負はまだまだこれからだ！」

「H A H A H A ……！ はじめの応援がある限り俺に負けはない！」

僕は前田を応援した覚えはないけどなあ…

「おい前田！ お前ばかりボール持ってたら、女子の皆さんもオレ達も退屈だろが！ オレ達にもボール回せ！」

なんかやる気満々の天気君…燃えてるねえ！ 運動で汗を流す…うん…青春だねえ！

しかも、言ってることは正論だ！ 僕も動きたいよ！

「わかった！ 任せろ！」

前田は迷うことなく了承した。

まあ、当然だよな！ 体育はみんなが運動するための授業なわけだから！

シュッ！ ダムダムダムダムダム…！

次は亮平達のチームがボールを持つてのスタート。

ダムダムダム…バン！

「何！？」

「遅いな！ もらった！」

前田がボールを取った…すごい…なんで前田バスケ部入らないんだろ？

「はじめー！」

シュッ！ パス…

前田が僕にパスしてきた…よし！ 僕もやるぞー！

「よし！」

ダムダムダムダムダム…

「もらった！」

シュ…

僕は前からきた一人を避けて

「行かせるか！」

シュ…

横からきた一人を避けて

ダムダムダムダムダム…

「麗香さん！」

シュツ！ パス…

「わかりましたわ！」

僕は麗香さんにパスをした。

ダムダムダム…シュツ！ …バン！

「ああ…外れてしまいましたわ…」

麗香さんのシュートは外れてしまった…

「ドンマイドンマイ！ 惜しかったよー！」

高橋さんが麗香さんを慰める。

ダムダムダムダムダム！

今は亮平のチームがボールを持っている。

「前田！ 勝負だ！」

「また俺が勝つ！」

また勝負が始まった：

ダムダムダムダムダムダム：シュ：クルツ！ ダムダムダムダムダムダム：

「よっしゃ！ 勝った！ このままいくぜ！」

前田VS亮平：第二回戦は亮平の勝利！
って、そんなこと言ってる場合じゃない！ 亮平を止めなきゃ！

「うおおおお！」

ダムダムダムダムダムダム！ …タン！ バス！！ …ダーン！
ダンダンダン：

「よっしゃー！」

うわ！ すごい！ 亮平 Dank シュートしちゃったよ！
でも、これで同点。

どちらかのチームが、あと1点入れたら勝ちだ！ ここまできたら
勝つしかない！

ダムダムダムダムダムダムダム：

「あと1点か：ここはオレが一発決めて：（ぶつぶつ）」

「ああ！ 天気君！ ボール取られるよ！」

シュ…

あ…避けた…天気君が何かを考えながらボールを取られないように避けている…

「よし！ 紗香ちゃんパス！」

シュツ…パシ！

「えっ！？ ちょ…わ、私ドリブルなんてできないよー！」

「なにい！！！？ …いいからドリブルっぽくボールついて歩いて！」

「わ、わかった！」

タンタンタン…

ジー…パシヤパシヤ！

……………？

なんか変な音がするような…

「はじめちゃん！ パスー！」

シュツ…パシ！

ジー…パシヤパシヤ！

やっぱり変な音が…まあいいや！

「…よし！ 行くよー！」

ダムダムダムダムダム！

僕がシュートを決めたら勝ちだ！ 絶対決めてやるー

「悪いな春崎！ ここから先には進ませねえぜ！」

亮平か…さすがに亮平は抜けないから、ここは前田にパスかな…

「前田！」

シュツ！ …バン！ …タンタンタンタン…

「ぐはっ！」

「ま、前田！？ 何してるの？！」

「ふっ…バードウォッチングをば…」

またですか…

「もらった！」

前田がこぼしたボールをすかさず亮平が取った…ああー…負けたかな…

ダムダムダムダムダムダムダム！

キュツ…タン！ …パス！ …ダン…タンタンタン…

うわー！ スリーポイントシュート！ やっぱり亮平は上手いなあ
……ははは…負けちゃった…

ピー！

「はい。交替ー！」

僕達は広谷先生の笛の音で交替を告げられる。

「惜しかったねー」

「そうですね。次は勝てますわ！」

「なぜ誰も俺にボールを回さなかった…」

「オレが本気を出せば余裕だったよー」

「ははは！ いいものが撮れたな！」

交替をしたあとにしている会話…なんかありがちなや異様なもの
までせいぞろい。

…あっ！ そういえば高ちゃんに誰もボール回さなかったなあ…

「えっと…高ちゃんっ！ ナイスディフェンス！」

「……ああ…」

ああー…どうしよう…高ちゃんテンション低すぎだよー…なんとか

しなきゃ！

「ねえ高ちゃん？」

「…何だ？」

「今日部活あるの？」

「いや…先生が会議らしいから、家で自主トレだ」

やった！

「じゃあ、みんなで遊ぼうよー」

「あ？ 何で？」

「いいからいいからー！ 久しぶりに遊ぼうよー！」

「わ、わかった！ わかったから！ 腕を掴むな！」

「やった！ じゃあ、またあとでー」

やった！ これでは、高ちゃんが得意なもので遊んで、高ちゃんのテンションを上げれば機嫌もよくなるはず！

「ほー！ なかなか楽しそうじゃん！」

「でしょ！？ …って、天気君！ 心読まないでよ！」

「悪い悪い！ …で、呼ぶのは前田と麗香ちゃんと紗香ちゃんと亮

平？」

「えっ？ あ、うん。いちおうみんなでなにかしようかと…」

「いいねー！ オレも行ってもいいよね？」

「うん。いいよ！」

ピーーーーー！！

「集合ー！」

あ、もう授業終わり？
なんか早かったなあ…

『ありがとうございますー！』

授業終わり！

やっと帰れるぞー！

何して遊ぼうかな？

まあ帰りながら考えればいいや！

第六章…マジですか?!

今は1時。

僕達は学校を終えて、家に帰っている最中…僕達?

「なんで天気君が僕の隣を歩いてるんですか!? …えっ?! 手
え握らないでくださいよ! ちよっとー! なんですかその笑顔は
あー!!!?」

僕の隣にはニッコニコした笑顔で僕の手を握って歩いている天気
君がいた…いったいいつからいたの?

僕は学校が終わってから、高橋さんと麗香さんに今日遊ぼうって言
ったんだけど

「まあ! それは楽しそうですわ! 是非御一緒させてください!」

と麗香さんが

「へえ〜! いいよー! 私もはじめちゃんと遊ぼうと思ってたし
ー!」

と高橋さんが言っていた。この二人いい人だなあ…

で、一緒に帰ろうと言われたから僕は麗香さん達と帰ってて…それ
で麗香さんと麗香さんの家の前で別れて、高橋さんも麗香さんの家
の近くの交差点で別れて…僕、一人だったはずなんだけどなあ…

「オレがなぜいるかって? そりゃあ理由はひとつしかないっしょ
ー!」

「なんですか？」

「家に帰ってるんだよ。学校終わったから」

すごい…小学生レベルのいいわけだ…

「…僕を馬鹿にしてるんですか？ そのくらい分かりますよ！ 天気君の家って…えっと…あれでしょ？ …天界にあるんじゃないんですか？」

天気君って、シュバーレ・ウェザー・ゴッドって名前で神様の息子だって言ってたし…

「うん。天界にあるね！ 広いよー！ あの家はー……なんと！ 3ヘクタールくらいの庭があるよ！ 他にはね……」

「広さは聞いてませんけどー！！」

「そう？ あっ！ オレさ！ ペット飼ってたぜ！ なんだと思う？ なんだと思う？」

なに？ このテンション…

天気君ってこんなテンションだったっ………なあ…

「はぁ…ペットの話もいいですから……ていうか手を離してください！ 恥ずかしいです！ 僕、男なのに複雑な気分です…あ！ 今は女だったぁ…………なんですか！？ なに笑ってるんですか………！！？」

僕がどうしようもない気持ちにとまどっていると、天気君が笑いだ

した…頭大丈夫かな…?

「あははは！ はじめちゃん可愛い！ 顔真っ赤だよ！？」

「えっ！？ ちょっと…ふざけないでくださいよ！」

「ゴメーヌ！」

「早く帰らせてください！」

「そう焦りさんなや。まだ何して遊ぶか決めてないんだろ？ 一緒に考えながら帰ろうや！」

「あっ！ そうだった…なにしよう…？」

高ちゃんが得意なもの…野球？ でも、それじゃあ人数たないし…

「天気君なにかいい案はありませんか？」

「ん？ 今は別に天気って呼ばなくてもよくね？ 普通にシュバレの方で…」

「じゃあシュバーレさん。なにかいい案はありますか？」

「はい！ あるよ！」

早っ！ でもなんか嫌な予感が……

「なんですか？」

「聞いて驚くなよ？」

「はいはい」

「みんなで天界に行こう！」

へえーみんなで天界にねえ……ええ！？

「マジですか？！！ シュ、シュバーレさん！！ なんか軽く言いますけどね！ みんなシュバーレさんのこと神様ってこと知らないんだよ？！ しかも天界ってどうやって行くんですか！？」

「いいんじゃない？ いずれバレるだろうしー！ はじめちゃんは天界に興味なしかい？」

「えっ？ いや、興味ないわけじゃないですかー！ だって天界ですよ？」

「よし！ 決まりだね！ 飯食ったら準備するから、はじめちゃん家にみんなを集めてね！」

「なぜに僕ん家で？」

「オレ、はじめちゃん家に居候しようかと思ひましてねー…いや！ あれですよ！ 楽しそうだなーって思ってたさー！」

またこの人は勝手に…

「……………」

「えっ！？ 嫌かい？ まあ嫌がっても、無理矢理居候するけどねー！ オレいちいち天界まで行ったり来たりするのめんどくさいからー！」

最悪だ…どうせ、お母さんとお父さんになにかして、居候させてもらえるようにするんだろうなあ…

「さあ！ そうと決まれば早く家に帰って飯食おう！ はじめちゃん！ なにか食べるものある？」

「はあ……」

駄目だこの人…
でも天界は楽しみだなあー！ 早く家に帰ろ！

第六章…マジですか?! (後書き)

なんか…ね? いきなり天界ってのもどうかと思いますけど、気にせずにもた読んでもらえたら嬉しいです。

第七章…居候?!

ガチャ…

「ただいま」

「おかえりなさいはじめー…まあ！ 今朝の子も一緒なのねー♪」

家に帰った僕達を出迎えたのはお母さんだった
なんだかすごく機嫌がいいのか、テンションが高い……

「はじめちゃんのお母さん。あの話どうでしたか？」

シュバーレさんがお母さんに話しかける…あの話？

「ああ！ あの話ね！ オツケーよ！ お父さんもオツケーしてく
れたからね♪」

「やった！ じゃあ今日、荷物持ってきて来ますんで！」

ああ！ 居候の話ね！ 居候の…ええええええええええ！！

「ちょっとお母さん！ シュバーレさん居候するの?! なに?!
聞いてないよ！」

「あら？ シュバーレ君言っていなかったの？」

「いや、オレは言ったよ！ さっき！」

ああ…あれもう頼んでたのね…はあ…

「まあ、そんなことは気にせずに！ いちおう部屋は、はじめと一緒にしうかと…」

「はあ?! ちょっと待ってよお母さん!! まだ部屋は余ってるよね?! なんて僕の部屋なのさ!?!」

僕の家は、お父さんとお母さんの寝室。
僕の部屋。

お父さんの書斎。
客間。

旧お姉ちゃんの部屋（お姉ちゃんこと、春崎奈緒美（19歳）は家を出て、一人暮らしをしている。）

物置がわりになっちゃってる空き部屋。
和室。

などの部屋があって、シュバーレさんの部屋にできるところはちゃんとある。

なんで僕の部屋に…

「あ！ それオレの提案ー！ はじめちゃんの寝顔が見たいのー！」

「はははー…却下！」

「そんなー…はじめちゃんのケチー！」

「いや…ケチ関係ないでしょ? …それより、早くご飯食べて麗香さん達呼んで来ない! シュバーレさんは準備があるんでしょ?」

「あっ！ そうだったな！ んじゃあ飯食おう！ お母さん。何か

ありますか？」

うわ…この人お母さんって呼んじゃってるし…

「じゃあ、焼そば作るから待っててね」

「はぁい！」

ああ…頭いたくなってきた…

第八章：全員集合（前書き）

できました！第八章！

頑張って書きましたので、最後まで読んでもらえたら嬉しいです。

第八章…全員集合

「あゝるっこゝあゝるっこゝ名前は源太ゝ」

うん。意味が分からない。今、僕はご飯を食べ終えて、麗香さん達を呼びに行く途中で…この歌を歌っているのはもちろんシュバーレさん…僕が

「シュバーレさん準備はしないんですか？」

って言ったら

「ははは！ もうできたよー心の準備！」

とか言っつてついてきました…

「ねえーはじめちゃんー麗香ちゃん家まだ？」

「ああ、もうちょっとだよ。高橋さんは麗香さんの家に来てもらうことになってるから、麗香さん家に着いたらシュバーレさんは麗香さん達を僕の家連れて行ってくださいね！僕は高ちゃん達を呼んできますから！」

「まかせとけ！」

ちょっと心配だなあ…

そのまま僕達は歩き続けた。

「シュバーレさん着きましたよ」

麗香さん家の前に着いた僕はシュバーレさんに言った。

「おお！ 本当だ宇佐美って書いてある！ 麗香ちゃん家ってけっこうでかいねー！ デザインもなかなかだなーいいね！ この家」

シュバーレさんが麗香さん家の評価をしていると

「あっ！ はじめちゃんじゃない！」

麗香さん家の前で高橋さんに遭遇

「あっ！ 高橋さん！ すごい！ タイミングバッチリだー！」

「でしょっ！ でしょっ！？ それより早く宇佐美さん呼んで遊びに行こうよー」

「そうだね！ ちょっと待ってて」

ピンポーン

『はいどちら様で…まあ！ はじめさんじゃないですか！ ちょっと待っててくださいね！ 今行きますから』

タタタタタ！

家のドアを開けて走ってくる麗香さん…ドアから門まで長！ 50mはあるよ！

「はあ：はあ：お待たせしましたわ：」

麗香さん息切れしてるし：

「いや、落ちついて麗香さん。呼吸整えて」

「はあ：はい。わかりましたわ」

けっこう回復早いなあ麗香さん：

「もう大丈夫ですわ！ どこへまいりますの？」

「えっ？ あ、まだ秘密！ 僕、高ちゃん達を呼んでくるから、
天気君に僕の家連れていってもらってー！」

「秘密ですの？ なんだかとても楽しみですわ！」

「よーし！ 紗香ちゃん！ 麗香ちゃん！ はじめちゃん家行こう
かー！」

「あれ？ 天気君って金髪だったっけ？」

「本当ですわ！ 金髪になってますわ！」

「あははー染めたんだよー！ 気にしない気にしないー！」

「「それならなっとく！」」

二人ともなんかイイコだなあ：

僕はそんな3人と別れて、高ちゃん家に向かった。

高ちゃん家は僕ん家から、100m位しか離れてなく、家から歩いて1分とかからないところにある。

えっ？ それならなんでみんなで行かないのかって？

高ちゃんにはみんなとは言ったけど、麗香さんや高橋さんと遊ぶことは言っていないからね！ それに、高ちゃん家に前田が来ることになってるから、麗香さんや高橋さんが危ないしね：

そんなことを考えながら走っていると、高ちゃん家に着いた。

この体になってから運動能力は落ちたけど、スタミナはまだあるみたい。

ガチャ

「高ちゃん！」

ダダダダダ！

すごい速さで階段から降りてきたやつ…まあ、前田ね……

「おお！ はじめー！ 待っていたぞ！」

「へえーアリガト。高ちゃんは？」

「おい！ 高広ー！ はじめが呼んでんぞー！」

タタタタタ

前田とは違い、普通に降りてきた高ちゃん。

うん！ これが普通の人だね！ なんかうれしいー

「何だ？」

僕に疑問形の高ちゃん。

「何だ？　じゃない！　遊ぶって言ったでしょ！？」

「ああ。そうだったな」

なんか無愛想だなあ…まあ前からこんなだけど

「それよりはじめ！　なぜまだ制服なんだ？」

「えっ？　ああ…まあ…いろいろとね…」

シュバーレさんが僕の服全部女ものに変えちゃったらしいからなあ…服見る気にもならないよ…

「まあ、俺はそれはそれでいいと思うぞ！　なんたって制服は萌える！」

「後で着替える！」

「それで、なにして遊ぶんだ？　3人ですることなんてたかがしれてるぞ？」

「大丈夫！　天気君もくるし、他にも人呼んであるからー！」

「そうか、で、どこで遊ぶんだ？　俺家は嫌だぞ」

ふふふっ！　天界に行けるなんて思ってもみなかっただろうな…まだ言わないけど…

「とりあえず僕ん家に行こうよ！」

「ああ、わかった。」

「うほっ！ はじめ家か…こりゃ天国だな！」

僕はとりあえず前田を一発殴ってから高ちゃん家を後にした。

第九章…全員集合2

高ちゃん家を出た僕達は、僕の家に向かった。ここら辺は住宅の塀などで、迷路のようになっている。僕達は慣れるけど、シュバーレさん達迷わないかな？

「はじめちゃ〜ん！」

僕の名前を呼ぶ声……シュバーレさん？

「あ、天気君？」

「ははは！ 残念ー！ 俺だよ！ 上手いだろ？ 俺の天気のものマネ」

「えっ！ 亮平？！ 何で？ 今日、部活があるって言ってなかった！？」

僕の名前を呼んだのは、シュバーレさんの声色を真似た亮平だった。僕は学校から帰る前に、麗香さん、高橋さん、前田、亮平に遊ぼうと言ったんだけど、亮平だけ部活があるから来れないって言ってたはずなんだけど…

「部活はあったんだけど、早く終わってよ！ んで、春崎ん家に来てみたんだけど、セーフみてえだな！」

「うん。あとは天気君が来れば、全員集合だね！」

あと、麗香さんに高橋さんもね！ …でも、ちょっと遅いなあ。

そろそろ来てもいいはずなんだけど…

「…はじめちゃん！」

あ！ 来た来た！

「おい、なんか様子がおかしくないか？ 何かから逃げてるみたいだぞ？」

走ってくるシュバーレさん達を見て、高ちゃんが言った。
：あ、そういわれてみれば確に：何で走ってるんだろ？

「蜂が…蜂があああ！」

高橋さんが叫びながら走って来た。

「駄目ですわ！ ここで混乱しましたら終わりですわよ！」

麗香さんが高橋さんを落ち着かせようとしている。

：シュバーレさん達はいったい蜂に何をしたの？

……ああ！！

シュバーレさん達がこっちに来る⇨蜂がこっちに来る⇩僕達も危ない
た、大変だ早く家に入らないと！

「天気君！ 早く！ 早く！ 家の中に！」

「すまないはじめちゃん！ しくじった！」

またわけが分からないことを…

「いいから早く！」

タタタタタ！

ガチャ、ボタン！

「はあ…はあ…はあ…はじめちゃん、助かったわ…ありがと…」

うわあ…高橋さんだいぶ疲れてるなあ…

「おい、お前たち何をしたらあんなことになったんだ？」

高ちゃんが言った。

本当、何をしたらあんなことになったんだろう？

「ははは！ ちょっと蜂の巣に石をね…」

馬鹿だ…馬鹿がいる…蜂の巣に石って…

「何で蜂の巣に石投げたんですか！？」

理由なしにしたなら本当にただの馬鹿だし…

「紗香ちゃんから最近蜂が増えて来てるって聞いてね…ちょっと蜂さんには悪いけど、元を絶とうってことになってさ…オレが巣におもいっきり石を投げたわけよ！ そしたら…」

「怒った蜂さんが、逆襲しにきたというわけですわ」

麗香さんが付け加えるように言った。
なるほど、まったく意味が分からない。

「何か飲みます？」

僕は言った。

「あ、お願い。」

「すみません」

「ありがとう、はじめちゃん！」

「ああ、頼む」

「俺も！」

「もちろんもらおう。ああ…美少女が飲み物を持ってきてくれる…
考えただけで最高だ！」

僕はとりあえず前田を殴ってから台所へ向かった。

第十章：僕の服

「よし！ そろそろ行こうか？」

僕が持ってきたジュースを飲みほしてから、シュバーレさんが言った。

みんなは、『え？どこに？』って顔をして、シュバーレさんを見ている。

「えーと…そうだな…はじめちゃん！ みんなに説明してあげて！」

「何をですか？」

「今から行くところについて」

何を言ってるんだシュバーレさんは…今から行くところって天界のことだね？

僕、天界のこと何て知らないよ…？

「早く！ はじめちゃんが知ってることでいいからさ！」

みんなの視線が僕に集まる……僕が知ってることっていったら…

「えっと…今から、天気君の家に行きます。えーと…僕もよく分かんないんだけど…うん。」

ああ…何て言えばいいか分かんないよ！

「はい！ というわけで、オレの家に行きます！ なーに気にする

ことはないさ！　すぐ着くから！　みんな準備オツケイ？」

うわぁ…なんか適当だなぁ…あれ？　そういえばさっきから前田が姿が無いような……

「ねえ高ちゃん！　前田見なかった？」

「そういえば前田、トイレに行くって言ったつきり帰ってきてないな…」

……まさか！！

タタタタタ！

ガチャッ！

「……………」

僕が僕の部屋を開けると、なんかひらひらした綺麗な服を、クロ―ゼットに収納している前田がいた…

「な…何してるの…」

「いやぁー。ちょっとはじめにプレゼントをね…」

ひらひらした綺麗な服を持って笑顔で答えた前田…コイツはいったい何がしたいんだろう…？

まだ大人になりきれない僕の幼い脳では想像もつかない。

「そう…プレゼントありがと。でも、僕それいらないよ。売っていい？」

僕は、僕なりに冷たい視線を向けながら前田に言った。

「待て！　せめて…せめて写真を！　この服を身につけたはじめての姿を写真に納めさせてくれえええ！！」

前田は僕の冷たい視線を嫌がるどころか、全く効果無し、逆に要求をしてきた…いったい前田って何者…？

「うん。無理！」

僕の言葉を聞いて、その場に崩れ落ちた前田…

「くそっ…着てくれたっていいじゃないか…着てくれたって…」

何だってコイツは…

「わかった、わかったから！　僕の服達を離せ！」

前田は手に持っていた服（シュバーレさんが女用に変えてしまった）とひらひらした綺麗な服を素早くおくと呟いた。

「……嘘ついたら…俺の言うことを聞いてもらおう…」

「あ、ごめんそれは死んでも嫌！」

「そうかそうか！　聞いてくれるか！　はじめ！　今回は素直だな！」

ゴスッ！！

「ばべら!!」

僕はなんのためらいもなく、前田にドロップキックをした…それにしても奇妙な叫び声だなあ…

僕は倒れた前田をひっぱって、シュバーレさん達のいる部屋に戻った。

第十一章..天界へ

「はじめちゃんおかえりー！」

前田をひっぱって部屋に戻った僕をシュバーレさんが出迎えた。

「た、ただいま」

「よしっ！ これでみんなそろいましたわ！ それでは天気さん。天界に行きませんか？」

うんうん。早く天界に……つてええええええ！！

「ちよつと天気君！ 何で麗香さんが天界のことを知ってるの?! みんな知らないはずでしょ!？」

「うん。知らなかった！ だから、はじめちゃんが前田を捕まえに行つてるときに説明しといたんだよ。オレが神の息子ってことや今から天界に行くこととかをね！」

説明した？
僕がいらないうち？

「ずるいですよ！　僕だって天界のことやシュバーレさんの事とか知りたいんですから！　僕にも説明してくださいよ！」

僕は天気君もとい、シュバーレさんをできるだけ怖い顔で睨みつけた。

「ゴメーヌゴメーヌマドレーヌ！」

また意味がわからないことを：

「ふざけないでください！ こっちは真面目なんです！ ちゃんと聞いてください！」

「まあそう怒らないでよはじめちゃん。怒っても可愛いだけなんだからさ！ それに：知らないほうが楽しみでしょ？ わくわくするでしょ？ ドキドキするでしょ？ それから：」

「わかりました：知らないほうが楽しみですよね：はい。わくわくしてますし、ドキドキもしてます。だから早く天界に行きましょう！」

でも、まあ確かにドキドキわくわくしてるんですけどね：

「よし！ じゃあ天界へのゲート開くから、みんな少し下がってー！」

僕達が部屋の隅に移動したことを確認したシュバーレさんは、胸の辺りで手を合わせ、何かを呟きながら円を描くようにして手を動かした。

「開け！ そして我を導け！ 天空を越えし門よ！ スカイゲート！」

ブウン：

シュバーレさんが叫ぶと、部屋を中心に、グニャ！ っとゆがみ、そして虹色のゲートが現れた。

「さあ！ 行こう！ 天界への門は開かれた！」

テンションが上がったのか、シュバーレさんがゲートに飛込んだ…
すごい…本当にいなくなった…

「俺は、はじめのあとに行く！」

前田…また意味がわからないことを…

「じゃあ私が行くよー！」

高橋さんがゲートに飛込んだ。

「私も行きますわ！」

麗香さんがゲートに飛込んだ。

「俺達も行くか」

「ああ」

高ちゃんと亮平がゲートに飛込んだ。

「待ってよー僕も行くよー！」

「よし！ 俺も行くぜ！」

僕がゲートに飛込んだあと前田も飛込んだ。

第十二章…羽?!

「うわ! 眩しい…」

ゲートに入った僕が見たものは、真っ白の世界。
まさかここが天界?

「じゃあ行こうか!」

シュバーレさんが言った。

…って! シュバーレさんが見えない?!

僕の目に写るのはただ何も無く、真っ白な世界だけ…高ちゃんも亮平も麗香さんも高橋さんも前田もない…みんなどこに行ったの?

「シュバーレさん? どこにいるんですか?」

「え? いるよ? 目の前に」

「えっ!? うそ? 何も見えませんよ? なんか真っ白なんです。
なにもかもが…」

目の前にいる? シュバーレさんが?
僕には真っ白の世界しか見えないよ…

「そうか…はじめちゃんと前田には言うの忘れてたね…はじめちゃん。目を閉じて、深呼吸してから、ゆっくり目を開けてごらん」

「う、うん」

僕は目を閉じ、二回ほど、深呼吸してからゆっくりと目を開けた…

「うわぁー…すごい…」

僕の目に飛込んできた建物、風景、人々…すごい…ここが天界なの？
建物は日本の家やお城、ヨーロッパのおとぎ話に出てきそうな立派なお城や家…他には近未来(?) 的な丸っこい建物…なにあれ？
洞窟？ 他にもいろいろな国の建物がある。

「ねえシュバーレさん…ええええええええええ?!」

シュバーレさんを見ると、何かすごいことになっていた…
真っ白の綺麗な羽が生えていて、金色のドーナツ状の何かが頭についている…

「どうしたのははじめちゃん…あ！ これ？ これは飾りみたいなものだよ！ いちおう飛べたりするけどさ」

いちおう飛べたりするって…いや、ちょっと…なに？ なんで羽が…？

「はじめちゃんも羽欲しい?」

「……………えっ?」

羽くれるの? どうやって? なんだかわけがわからなくなってきたあ…

「麗香ちゃんと紗香ちゃんも羽欲しい?」

「うん！ 欲しい！ 欲しい！ 私も羽欲しい!」

「本当ですか！ 私にもくださいますの！？」

二人とも挑戦者だなあ…

「おう！ 当たり前じゃん！ 亮平と高広もいる？」

「俺はいいよ。似合わないし、高広は？」

「俺もいらん。羽を生やして飛び回るような柄じゃないからな」

高ちゃんらしい理由だなあ…でも、似合うと思うけどなあ…

「春崎は貰わねえの？」

「えっ？ 僕？ 僕はいいよ。どうせ似合わないし」

「もったいねえなー。きっと似合うのに…ここは、お言葉に甘えて、羽貰つとけて！」

お言葉に甘えてか…まあ確かに人間の夢を叶える二度とないチャンスだけ…

「はじめちゃん！ 貰つときなってー！」

「うん。わかった！ それじゃあ、お言葉に甘えて」

「なんだか素敵な会話が！ とても素敵な会話が！ くっ…何故見えない…何故…何故…」

あ、馬鹿が一人…

「シュバーレさん？ 前田には教えなくていいの？ あれじゃあいつまでたっても目え見えないよ？」

せっかく天界に來たのに、真っ白の世界だけしか見ないなんて、なんか可哀想だし…

「…わざとだよ。あれ」

「うそっ！！ 本当に？！」

「うん」

わざとって…何で…？

「ねえ前田。本当？」

「……………」

あ、目が泳いでる…

「前田君？ 人と話をするときはちゃんと目をみて話そうって小学校の先生に習わなかった？」

「いや…俺、プライマリー（小学校）のときの記憶は抹消したから知らん！ それに…」

「それに？」

「俺はいつだって心の目ではじめだけを見ているんだ！」

なにこれ？ 告白？ 意味がわからない…

「ごめんなさい！」

「ひぐお！」

奇妙な叫び声と共に倒れた前田…また叫び声に新たなバリエーションが…

…前田本当に傷ついてるのかな…？

「前田の目も見えてるみたいだし、そろそろ羽を生やしに行くよー！」

「あ、うん！」

僕はとりあえず前田を起こして、シュバーレさんのもとへ走った。

第十二章：羽?!（後書き）

すみません。

とりあえず謝ります。

なんかすごい展開になってしまいました!…これからどうしよう?
私自身そんな感じです。

でもまあ、なんとかなるでしょう!はい。

こんな私の作品ですが、これからも読んでいただけたら嬉しいです。

第十三章：羽の正体

「ここだよー！」

ヨーロッパ風の家の前に立ったシュバーレさんが言った。

「ここって…見たところ普通の家じゃないですか…」

あ、表札のところに何か書いてある…

「おしゃれハウス・フェザー？」

なんだろう？おしゃれハウス・フェザーって…

「おしゃれハウス・フェザーは天界アクセサリー専門店なんだよー
！」

天界アクセサリー専門店ね…なんかセンス悪そうだなあ…

「まあ！　　なんだか面白そうなお店ですわね！」

「おしゃれハウス・フェザーかあ…なんかカッコいいね！」

この二人ってなんてポジティブなんだろう…

「よーし！　　行こう！」

カランカラン！

「いらっしやいませ」

店の中に入った僕達を出迎えた店員さん…すごい！ この人も羽生えてるよ！

「何だ、シュバーレか」

「おう！ お前まだこの店でバイトしてたのか！」

この店員の女の子…シュバーレさんの知り合い？

「悪いか？ 私はお金が欲しいんでな。それより、今日は人を連れて何のようだ？ 冷やかしか？」

「羽買いに来たんだよ」

「…羽ならまだ背中に生えてるではないか！」

「オレのじゃないさ」

「ほう…では後ろにいる女の子達へのプレゼントか？」

「ははは！ そんなとこだな！」

「うむ。では私にまかせてもらおう」

あ、店員さんが僕達の方に歩いてきた…

「お羽をお求めとお聞きしましたが、色は何色にいたしましょう？」

…あれ？ シュバーレさんのときとしゃべり方が全然違う：

「まあ！ 色まで選べますの！？」

「はい！ おしゃれハウス・フェザーでは、白、黒、赤、青、黄、緑などをはじめ、全ての色がございます！」

「そうですわねえ…では、私は薄いピンクでお願いしますわ」

「はい！ ありがとうございます！ そちらの方は何色になさいますか？」

「えっ？ あ、僕は白でお願いします」

「私は黒ー！」

「はい。では、少々お待ちください」

そう言うと、店員の女の子は店の奥に行ってしまった。

「あの…シュバーレさん？ あの店員さんと知り合いなんですか？」

「ん？ そうだよ。…あっ！ そうだ！ 紹介しようか！？」

「えっ！？ あ、いや…」

ガチャ！

扉が開く音とともに、店員の女の子が戻ってきた。

「お待たせしましたお客様。ご希望の羽がありましたので、持参しました！サイズは、S、M、Lとありますが、どれにいたしますしょう？」

…羽ってサイズあったんだ……

「なあ、ミサ」

「なんだ？」

この店員さんの名前ミサって言うんだ…

「オレの友達を紹介してあげよう！」

「いや、いきなりなんだ？ 私はそんなこと望んでないぞ？」

「いいからいいから！」

うわぁ…無理矢理だなぁ…まあ、シュバーレさんらしいけど…

「……………いいだろう。紹介してもらおうか」

了承しちゃったよこの娘……

「えー…右から順に、宇佐美麗香ちゃん」

「よろしくお願いしますわ。あ！ 羽のサイズは、Mでお願いします」

いや…麗香さん…羽は後でもいいじゃないですか…

「高橋紗香ちゃん」

「あ、私もMでお願いします」

自己紹介になってないよ高橋さん…

「はじめちゃん」

「ど、どうも。春崎一です」

「うむ。それより、はじめは羽のサイズはどれにするのだ？」

い、いきなり呼び捨て…

「えっと…じゃあ、Lでお願いします」

「承知した。あと、私の名前は谷本美佐だ。好きに呼んでくれてかまわないよ」

谷本美佐さん…何で美佐さんは普通に日本の名前なんだろう？

シュバーレさんは天気神って名前とシュバーレ・ウエザー・ゴッドって名前があるのに…

「ミサにもあるよ。谷本美佐とミサ・タニモトっていう名前が、だけど両方同じだから、日本名言ったんじゃないの？」

「へえーそうなんだあ…よく知ってるね。シュバーレさん…」

「ごめんなさい！ もうしません！ 許して下さい！」

シュバーレさんってばまた僕の心を：

「よし。ではこのタトゥシールを好きなところに二枚貼り。羽をイメージしてみろ。上手くいけば羽が生えるだろう。：まあ、失敗しても特に害はないが、羽は生えてこないから注意したほうがいいだろう」

へえー：羽ってシールで生えるんだあ：今更だけど、天界ってすごいなあ

「わかりましたわ」

「オッケー！」

「わかりました！」

僕は元気よく返事をし、さっそくシールを貼ることにした。

「私、両肩に一枚ずつ貼りましょうかしら？」

「拳に貼るの、紋章みたいでかっこいいなあ」

二人は自分の思い思いの場所にシールを貼っていく：僕はどこに貼ろうかな？

僕も肩に貼ろうかな？でも、麗香さんと同じじゃ面白くないし：羽だから背中に貼ろうかな？

でも、手え届かないし：

「あの、美佐さん？」

「ん？　なんだはじめ」

「このシール僕の背中に貼ってくださいませんか？」

「うむ。まかせておけ」

美佐さんは僕の手からシールを受け取ると、手慣れた手つきで、背中にシールを貼っていく…

「えっ?!　ちよっ!　美佐さん？」

「なになに。まかせておけ」

服の中に手を入れて、シールを貼っていく美佐さん…ちよっとう当すぎませんか？

「よし。貼れたぞはじめ。私の技術もなかなかのものだな」

腕組をして、満足そうな美佐さん。

そう言って、僕の背中をパンパンと二回ほど叩くと、ケータイを取り出して何かをしている…

「よし。はじめ。早く羽を出せ。私がお前の初羽姿を撮ってやろう」

ケータイを片手に、わけが分からないことを言う美佐さん。

…なに？　初羽姿って？

「ちよっとう待てえええええい！」

「何奴！」

店の入り口に立っていたカメラマンMが言った。
…まあ、前田のことね。

「はじめの初羽姿は俺が、このカメラに納める！」

ジャジャーン！ って効果音でも出そうなほどに、ポーズをきめ、
カメラを掲げる前田…すごい。きっとネコ型ロボットもビックリだ！

「むっ、貴様は何者だ！ 名を名乗れ！」

美佐さんなんかキャラおかしいし…

「ふっ…俺か？ …俺は…」

「貴様は？」

「偽りの天才。前田」

そんなセリフどっから出てきたんだろう…？
ていうか…偽りの天才ってことはバカ？

「き、貴様が…」

美佐さん動揺してるし…

「さあ！ お前の名前も教えてもらおうか！」

「ふっ…私は…」

美佐さんなんって言うんだろ？

「愛深き故に、愛を捨てた男。美佐」

「ちょっとまって！ 美佐さんは男性なんですか？！！」

「失礼な。何を言うか。私は可愛い可愛い16歳の女の子だぞ？」

「じゃあ何でさっき男って言ったんですかー！！」

「そっちの方がかっこいいであろう？」

「………はい。そうですね……すみません……」

「そうだろう？ ちなみに、さっきの私はかっこよかったかな？」

「…はい」

「そうかそうか！」

もしかすると美佐さんって今まで出会った人の中でも、一番の変な人かも…

「さあはじめ！ 羽を！ 早く羽を！」

前田が、いつでも撮れる体制で言っている。

…これはかなり危ないんじゃないかな…うん。

「馬鹿者。私が先だ」

「いやっ！ 俺が！」

美佐さん絶対遊んでるな…

「もう！ 美佐さん。前田に乗らないでくださいよ！」

「いや。すまない。つい、な」

いや、ついて…

「それより、羽ってどうやって出すんですか？ ちっとも出ませんよ？」

「念じるのだよ。私は羽が欲しい！ …とね」

「わかりました。やってみます！」

僕は羽が欲しい。

僕は羽が欲しい。

僕は羽が欲しい。

僕は羽が…

ピクッ！

「あっなんか背中がむずむずしてます！ なんかなってますか？」

「いや、全く変化なしだよ。」

「はじめちゃん！ 念じて念じて！」

「むうゝ…」

僕は羽が欲しい。

僕は羽が欲しい。

僕は羽が欲しい。

僕は羽が欲しい。

僕は…

「へくちっ！」

「「はじめ（ちゃん）…」」

「へへへ。くしゃみ出ちゃいました…」

僕は羽が欲しい。

僕は羽が欲しい。

僕は羽が欲しい。

僕は羽が欲…

「すまない…はじめには羽の才能は無いわけではない。気にするな。私も生やすのに2日かかったからな。流石に1日で生やすのは無理なのだろう」

…2日って…そりゃ無理でしょ！

僕、羽なんか天界来るまでしらなかったし

「麗香と紗香は生えたかい？」

「私には無理ではなくって？」

「私もダメ。全然生えないよ!」

高橋さんも麗香さんもダメかあ……あつ! このシールちゃんととれるのかな……?

天界のだからとれないなんてことないよね……

「ねえ美佐さん? このシールってちゃんととれますか?」

「ああ。大丈夫だ。君達に配った羽のシールは、1日使い捨て用だからね。お風呂に入れば一発だよ」

1日使い捨て用って……コンタクトレンズですか……

「くっ……はじめての初羽姿が……」

「煩いぞ。そこの変な奴」

「俺は前田晃寛だ! アッキーまたはあっくんと呼べ!」

「断る」

この二人仲が良いのか悪いのか……

「で、これから何をするんだ」

店の入り口付近で、退屈そうに待っていた高ちゃんが言った。

「オレはなんでもいいぜ! 高広は何かしたいことあるか?」

シュバーレさんが羽を取りながら高ちゃんに言っている。
…ええっ!? 羽って取れるの?!

ブチブチブチッ…

なんか痛そうな音してるし…

「俺か? 俺は野球がしたい」

「そうか! じゃあ野球しよう! みんなも野球でいいか?」

「ええ。まあ、野球でいいんじゃないくて?」

「いいよ! 野球やってみたいし!」

「野球かあ…小学生以来だな…」

「しかたねえな! 高広の頼みだからな! 言つとくが、俺はプライマリーときは野球部だったぜ!」

前田。プライマリー（小学生）のときの記憶は抹消したんじゃないか
ったっけ?

「はじめちゃんは?」

「うんっ! いいよ! 美佐さんは来ないの?」

「うむ。行っても良いのなら行くぞ。運動は嫌いじゃないんでな」

「お前、バイトはどうすんの?」

「なに、そろそろ辞めようと思っていな、いい機会だから店長に言ってくるよ」

「オツケ！　じゃあ行こうか！」

カランカラン：

野球をするために僕達は店を出た。

第十三章：羽の正体（後書き）

はい。

今回は、体育バスケに続きまして野球です！

スポーツ系はやたらと効果音系ばかりかもしれませんが、できるだけ頑張って表現しますので、次回も読んでいただけると嬉しいです。

第十四章…天界野球場・イーストダイヤモンド☆

カキーン！

ボールを打ったバットの金属音が響く。

今僕達は、『天界野球場・イーストダイヤモンド☆』にいる。

おしゃれハウス・ウェザーを出た僕達は、近くにある野球場に行くことにしたんだけど、

「ここから最寄りの球場より、逆方向にある球場のほうが、設備がいいぞ？」

と、美佐さんが言ったので、僕達はちよつと遠い球場に歩いて来たわけです。

「おいシュバーレ、先客がいるぞ…」

高ちゃんがちよつと残念そうに言った。

確かにユニフォームをきた人達がノックをしている…地元の草野球チームかな？

「大丈夫だ高広！ オレ達はあの草野球チームと戦うんだから！」

「何っ！？ そ、それは本当か？！」

あ、高ちゃんちよつとテンション上がってきたかも

「そうだシュバーレ！ グローブやスパイクや帽子やユニフォームやバットはどうするんだ？」

ユニフォームって…高ちゃん本格的だなあ。

まあ僕もまだ制服だから（前田の部屋侵入のせいで）、ユニフォーム用意してもらえた嬉しいかな？　なんて。

「それは大丈夫だ。言っただろう？　この球場は設備がいいんだ。バット、グローブ、その他もろもろ全て無料で貸してくれるぞ」

「あの～：美佐さん？」

「ん？　なんだ？」

「球場に詳しいんですね！　野球、好きなんですか？」

「わっ！　ち、違う！　そんなじゃない！　わ、私はこの近くに住んでるんだからし、知ってるんだ！」

「そ、そうですか？　すみません。僕のはやとちりです…」

「すまない：気にするな。そ、それより早く野球をしないか？　高広君も好きなのだろう？　野球」

ん？　…高広君も…？

「お、おう」

「それより、この球場はどうだい？　気に入ってもらえたかい？　私の勝手な判断で決めた場所なわけだが」

「そうだな：グラウンドはこの目で見て見ないと分からないが、外見、設備、サービスは素晴らしいと俺は思う。まあ：どんな球場でも、マウンドに立ったときには、野球さえできればどうでもいいと思え

てくるがな」

「すごいな…素晴らしいまでの天然野球少年だな、君は」

「…ま、まあな」

なんか高ちゃんと美佐さんって相性いいかも…

「みんなー！ 受付して来たから！ 早く着替えようぜ！」

シュバーレさんが入り口のところで、僕達に言った。

それにしても、おっきい球場だなあ！ 東京ドームよりおっきいかも！

すごいなあ…こんなに立派な球場で、しかも無料で野球できるなんて

「はじめ」

「すごいなあ……」

「はじめ」

「………」

「は～じ～め」

「………」

「はじめ！」

「えっ?! あっなに?」

「おいおい。この俺の間掛けを無視したときはそういうプレイかと思っただぞ!? そういうのならまた今度ゆっくりとだな!」

「するかバカッ!!」

「くっ…それは残念だ…まあいい。なんたって高広のおかげで、はじめのユニフォーム姿を撮ることができるのだから!! ははは!! おじさんが可愛く撮ってやろう!!」

「うん。デッドボールに128回当たってくれたらいいよ。全部頭ね!」

「よし! いいだろう!」

「ごめん。僕が悪かった勘弁して…」

「ブアハハハ!! 容量はたっぷりアルゾホォー!」

「つ、通じてない?!」

「なに?! なんで笑ってるの!」

「怖い! 怖いよ! 恐すぎるよ!」

「アストロン!! アストロン!!」

「なに?! 今度はなに!」

【前田は呪文を唱えた】

「わあああ！ 助けてー！ シュバーレさーん！！」

僕は前田に脅えながら、全力でシュバーレさん達のもとへ向かった。

第十五章…更衣室

「男の子は右側、女の子は左側の更衣室を使って下さい。あ、道具とユニフォームはこちらです。」

球場の中に入ると、管理人さん？が、僕達に言った。

「はい。はじめちゃんの分のユニフォーム！」

シュバーレさんが笑顔で僕にユニフォームと帽子とスパイクを渡してきた。

「ありがとうシュバーレさん。あ、グローブは…」

渡してもらった物の中にグローブが無い…もしかして素手で捕れと…？

「女の子達の分のグローブは、オレが持って行くから！気にせず着替えてきなって！」

「う、うん。」

僕は更衣室に向かった。

広い！なにこれ？何人まで着替えれるようになってんの？ってくらい広い！

「うわあ…広い…」

「確に。部室とは大違いだ！こりゃすげえ！」

「確に広いな。」

「すげえな！普通に広いぞこの更衣室！」

「だよねー！これはおっきいよ！」

「それより春崎、何でこっちにいるんだ？こっちは男の更衣室だぞ？」

「えっ？何でって…僕、男じゃ……なかったあああ！！」

僕がショックを受けて、思考停止状態におちいつていると

ジー…パシャ！パシャ！パシャ！パシャ！

あ！危ない危ない…もうちょっとで帰って来れないとこだった…えっ…この音はまさか…

クルッ

「……………」

「……………」

回れ右をした僕の目に写ったのは、低姿勢でカメラを構えた前田。なんか連続でパシャパシャパシャパシャいってるし…

「き、記念にね！ね！」

記念って…記念になら普通にみんな撮ろうよ…

その間にも、クルクル横に転がったりしながらカメラのシャッターをきる前田。これはちよつとウザイかも！

「えいっ！！！」

「うおおお！し、白か！…べぶら！！！」

カメラを持って、上を向いて寝転がってる前田…お腹がカメラを持っているせいでノーガードの状態になっていたので、僕は女の子になつてから軽くなった体重を全力でかけて、前田のお腹にネリチャギ（踵落とし）をした。

前田がピクピクと動いている。

これは流石の前田でも効くでしょ！

でも、ちよつと可哀想かも…

「ふっ…フハハ…撮れた…撮れたぞ！…はじめの、白く輝く彗星が！」

前言撤回。全然可哀想じゃない。

なに？白く輝く彗星って！変な例えかたしないほしい。

いや、それより撮られたの消さなきゃ！

「前田？ちよつといいかな？」

僕は前田から優しくカメラを奪うと、データを見た。

ピッピッピッ！

うわ！これかあ…なんでさっきの一瞬でこんなの撮れたんだ前田の奴…

「えーと…消去。」

ピッピッピッ！

「ノオオオオオオオオ!!」

「あ、他にもある：体育のときのやつかな？とりあえずこれも消去。」

ピッピッピッピ!

「ウワアアアアア!!」

「はい。カメラ返すね、前田。」

「はじめ：お前って奴は：お前って奴は：」

「じゃあ僕、着替えてくるから!」

「ああ。急げよ。」

「はあゝい!」

僕は高ちゃんに返事をして、走って女子更衣室に向かった。

ガチャ。

「はじめ。何処に行っていたのだ？早く着替えろ。私はロビーで待ってるから。」

更衣室に入った瞬間に美佐さんが話しかけてきた。

美佐さん着替えるの早いなあ

「はい。すみません。急いで着替えてきます!」

僕は美佐さんに軽く一礼して、ロッカーの前に行った。

「あ、はじめちゃん!どうしよう：着方がわからないよ!」

ロッカーの前で立ち尽くしていた高橋さんが涙目で言った。

「あ、はじめさん!私も分かりませんの：教えてくだらない?」

麗香さんまで：

「うん。じゃあまずは…」

僕は約十分ほど、高橋さんと麗香さんにユニフォームの着方のレッスン講座を行った：

第十五章：更衣室（後書き）

すみません。

なんか野球始まりませんね。

すみません。

次回こそは野球ですので、楽しみにしていただけたら嬉しいです。
読んで下さってどうもありがとうございます！

第十六章…お話し

「遅れてすみません！」

ロビーに着いた僕は、退屈そうにふかふかの椅子に座っている美佐さんに言った。

「うむ。素直でよろしい。だが…実はシュバーレと高広君と亮平君と前田が、まだ来てないのだよ。悪いが見てきてもらえないかな？」

てことは、まだ誰も来てないんじゃない？

まあ、シュバーレさんと前田はともかく、高ちゃんと亮平が遅いのはちよっと気になるなあ…よし！

「わかりました！僕、ちよっと見てきますね！」「ああ。頼むよ。」

「はい！」

笑顔で元氣よく返事をした僕は、高橋さんと麗香さんを美佐さんのところに残して、男子更衣室へ向かった。

「…シュバーレさん？」

男子更衣室に来た僕の目に入ったのは、知らないお兄さん方や、おじさん、おばさん、お姉さん方と話をしているシュバーレさん達だった。

…ていうか…なんで男子更衣室におばさんやお姉さん方がいるの…？

「お！はじめちゃ〜ん！」

「はじめちゃ〜ん。じゃないですよ！なにしてるんですか？！美佐さん達待ってますよ！？」

見たところ、普通に話をしてるだけみたいだけど…

「いやあー！着替えてたら、この人達が入ってきてさー。いろいろ話をしてたんだよ。はじめちゃんのこととかさー！」

「へえー。僕のお話をねえ…ってちよっと！なんで僕の話をするんですか！？意味が分かりませんよ？！」

なんだってまた…僕の話を…

「はじめちゃんは可愛いよー!とか、はじめちゃんは愛らしいよー!とか、はじめちゃんは優しいよー!とか、…」

はい。ダメだ…理由を述べてくれない…

「シュバーレさん?僕は、なんで僕の話をしているかをですね…」

「おおー!その娘がはじめちゃんかい?」

シュバーレさんの後ろにいたお兄さんが言った。

「そうだよ!可愛いだろ!」

「可愛いだろって…この娘見て可愛い言わなかったら、どの娘が可愛いんだよ!めちゃくちゃ可愛いじゃないか!」

なに…?ここは喜ぶところなの?…なんかとっても複雑な気分…

「ねえはじめちゃん!はじめちゃんは好きな人いるのかい?」

…なに言ってるのこのお兄さん…

「い、いませんよう!」

「よし!じゃあお兄さんと付き合ってくれ!」

「えっと…ごめんなさい!」

「ああーお兄さんフラれちゃったよー」

なんかよくわからない人だなあ

「それより、シュバーレさん!早く野球しましょうよ!」

「あ、ゴメーヌゴメーヌ!じゃあ皆さん!試合しましょうか!?」

「「おおー!」」

みんなテンション高いなあ…あれ?そういえば、高ちゃんと亮平がいないような…

「シュバーレさん。高ちゃんと亮平はどこ行ったんですか?」

「ああ。高広が早く野球がしたいって言って、亮平と一緒に先にグラウンドに行ったよ!」

早く野球がしたいか…高ちゃんらしいなあ

「じゃあ僕達も行きましょうか!?」

「そうだな!」

僕達は走って美佐さんのところへ行った。

「おい！ シュバーレ！ いったい何をしていたんだ！？ 遅いではないか！」

「ゴメーヌゴメーヌ！」

「…まあいい。それではグランドに行こうか。」

「「はい。」」

僕達はグランドに向かった。

第十六章：お話し（後書き）

すみません。

なんか、まだ野球始まってません。

次回こそは！とか言った自分がお恥ずかしい：
でも、次回こそは：次回こそは！野球を！

第十七章：プレイボール！

シュツ！ギュルルルル…ズバーン！！

グラウンドに着くと、高ちゃんがピッチャー、亮平がキャッチャーで、キャッチボールをしていた。

「よし！結構肩暖まってきたな。」

満足そうに肩をくるくる回している高ちゃん。

なんか機嫌よさそう。

「高ちゃん！亮平ー！」

「あ？」

僕の呼び掛けを『あ？』で答えた高ちゃん。

『あ？』ってちよつと…もうちよつといい返事返そうよ…

「お！春崎か！ちようどよかった。みんなちよつとこっち集合！」
僕の声に気づいた亮平が手招きをしながら僕達を呼んでいる。

「よーし！これでみんなそろったな。んじゃあポジション決めようぜ！」

亮平もテンション高めみたいだ。

「とりあえず自分がどこしたいか言って。」

「僕はどこでもいいよ。」

「私はできれば簡単どころがいいです。」

「私もー！」

「私はどこでも良いぞ。」

「オレはサードで！」

「俺は外野で！」

「じゃあ俺はピッチャーで」

「よーし。じゃあ希望がない人は俺が決めるけど、それでいいか？」

「「オッケー！」」

「じゃあ、【ピッチャー】高広。【キャッチャー】俺。【セカンド】春崎。【ショート】谷本。【サード】シュバーレ。【レフト】宇佐

美。【センター】前田。【ライト】高橋。って感じでいいか？」

「ええ。私はそれでいいです。」

「私もー！」

「「俺も」」

えっ？ちよつとまって…ピッチャー、キャッチャー、セカンド、シヨート、サード、ライト、センター、レフト…あれ？ファーストがいない！？

「ふぁ、ファーストは？」

僕が恐る恐る亮平に聞いた。

「ファーストは、敵のチームから借りよう。」

借りようって…物じゃないんだから…

「あのー。すみません、ファーストを貸していただけないツスカ？
本当に敵チームに言っちゃったし！」

「いいよ！」

えっ…チームのファースト貸していいの…？

「あざあッス！助かりやすー！」

やっぱ亮平テンションおかしい。うん。

「おい、シヨウゴー！」

チームの監督らしき人が、ファーストの人の名前を呼ぶ。

「お呼びですか親方様！？」

ベンチから全力疾走で来た『僕は痩せてますよ！痩せましたよ！ふつくらしてた昔の僕じゃないよ！』的なオーラを加持出している男が言った。

「お前解雇。」

解雇って…ファーストの人、可哀想に…

「ははあー！！有り難き幸せでございます親方様！」

解雇されたのに喜んでるよこの人…

「よし！では行けえい！！」

「御意！」

タタタタタ！

親方様（？）の最後の命令を受けたファーストの人は、笑顔で僕達の方へ走ってきた。

「新しい親方様は何処?!」

「……………」

いきなりの理解不能の言葉に沈黙の僕達。

なに? 新しい親方様って…

「親方様は…」

「……………」

「親方様…俺の親方様は…」

「こ、この人だよ。ショウゴさん!」

この空気に耐えきれなくなった僕は、シュバーレさんを示しながら言った。

「おお! あなた様が、俺の新しい親方様でありますか!? よろしくお願ひしますだ親方様!」

ガシッ!

歓喜した(?) ショウゴさんが、シュバーレさんに抱きついた。

「親方様あ!! 自分! ショウゴは、全身全霊を尽して、親方様のチームの勝利に貢献しますだ!」

「うおえ! な、なんだテメエキモいぞ! 離れ! 早くオレから離れい!」

キモいって、ちょっとシュバーレさん言い過ぎだよ… ショウゴさん可哀想…

「シュバーレさん! それは言い過ぎだよ! ショウゴさんが可哀想だよ!」

「いいんだお嬢さん! 悪いのは俺なんだから!」

「でも…」

ショウゴさんって心が広い人なんだなあ

僕も見習わなきゃ!

「親方様あ! 俺は何をすればよろしいでございますか!」

「そりゃあファーストに決まってんだろ! 人数足んないんだから。」

あと、オレは親方様じゃないぞ！」

えっ！？ここにきて親方様の座をカミングアウト？！

シュバーレさん以外にこのチームの親方様は考えられないけど…

「親方様はね。あの、肩間である綺麗な黒髪の、」

「うんうん。」

「ちよっと背が小さめの、」

「うんうん。」

「スタイルがよくて可愛い」

「うんうん。」

「はじめちゃんって娘だよ！」

「へえー。僕が親…って、ちよっと待ったあああ！！」

「わかりましただ！はじめちゃんが新しい親方様なのですな！」

「わかるなああああああ！！」

ああ…頭痛くなってきた…よりによってなんで僕が…？

「改めて、新しい親方様！よろしくお願いしますだ！自分は親方様の為に頑張りますだ！」

ショウゴさんなんか言ってるし…

「いや、ちよっと…親方様って…」

「親方様は親方様と呼ばれるのがお嫌いですか！？…ならば、はじめ姐さんばどうさね？」

ああ…どうして僕の知り合いは、こうもキャラがおかしい人が多いの…？

「ごめん。それは、絶っつ対嫌！！」

「わかりましただ！はじめ姐さんと呼びますだ！」

「……………」

ああ…この人どうしてくれよう？

僕の中では地味で痛々しい攻撃方法が、パラパラ漫画の用に次々と浮かんでくる……………僕…こんなキャラじゃないのに…

「はじめ姐さん！試合始まりますだ！俺達も並びますだ！」

僕が攻撃方法を考えている間に、敵チームの準備ができたみたいだ

……呼び方は結局『姐さん』ですか…

「…うん。じゃあ、僕達も行こうか…」

僕は泣きそうになりながらも、シヨウゴさんに返事をして、シュバーレさん達のところへ行った。

「整列！礼！」

「「お願いします！」」

両チームが向かい合って並んで、挨拶をする。

「ちなみに、こちら側の都合で、3回までしかできませんでした。誠に申し訳ない。」

敵チームの監督(?)っぽい人が言った。

ちよっと残念だけど、3回あればいちおう野球らしい野球もできるだろうし、別にいいか。

そして両チームベンチに入った。

「はい。はじめちゃんのグローブ！オレ達後攻だから、守備に行くよ！準備オツケ？」

いつの間にか僕の隣にいたシュバーレさんが言った。僕はシュバーレさんがもっていたグローブを受けとると、急いで自分の持ち場、セカンドに向かった。

「プレイボール！」

第十八章…ベースボール！前編

「ストライーク！バッターアウト！！」
す、すごい！

高ちゃんこんなに球速かったっけ…？
今、一人目の打者に対して、高ちゃんはストレートだけで三振を取った。

しかも全部ど真ん中！なのに一人目の打者はボールに当てることすらできずにベンチへと帰っていく…

「すまない…こんなはずじゃ…」

「気にするな！まだ始まったばかりじゃないか！あいつらに俺達の力見せ付けてやろうぜ！」

「おう！」

なんかすごい青春してるなあ。

『二番。セカンド。キュルス。』

…キュルス？珍しい名前だなあ。

ネクストバッターサークルにいたキュルスさんは何故か笑顔で僕の方を見ると、手を振ってきた…なに？いったいキュルスさんはなにを求めているの？僕の場合に打つぞってこと？

そしてキュルスさんは笑顔のままバットを持ち、打席に立った。

亮平がサインを出し、高ちゃんが頷く。

高ちゃんがゆっくりとボールを握り、流れるような動きで振り上げた腕を振り下ろす。

シュツ！ギョルルル…

高ちゃんから放たれたボールは、亮平のミットめがけて、ものすごい速さで進んでいく…

ブンッ！！

もらった！と言わんばかりにフルスイングをしたキュルスさん。

そして、キュルスさんの思いとは逆に、亮平の構えたミットに吸い

込まれていくボール。

ズバーン!!

「ストライーク!」

審判の人が叫ぶ。

いったい高ちゃんの球なんキロ出てんの?

このストレートなら、プロ野球選手にひけをとらないんじゃないかな?

僕がそんなことを考えている内に、高ちゃんは2球目を投げ終えていた。

危ない危ない。ちゃんとボールに集中しないと!

高ちゃんは亮平のサインを見て、3球目を投げる。

シュツ! ギュルルル...

ズバーン!

「ストライーク! バッターアウト!」

三球目もストレートで、コースは真ん中高め... キュルスさんは動くことすらできず、笑顔で立ち尽くしている... あ、目があった...
そして何回か頷くと、ベンチへと帰っていった。

『三番。サード。タキムラ。』

...

.....

.....

「ストライーク! バッターアウト! チェンジ!!」

すごい! 三者連続三振!

へっ! どうだ! 参ったか! って台詞が似合いそうな笑顔を浮かべる高ちゃん。

そしてベンチに帰ると、笑顔で僕に話しかけてきた。

「はじめ。今俺の肩、ビンビンだぜ?」

高ちゃん... いつからそんなキャラに...?

僕が知ってる高ちゃんはこんなじゃないはずだよ... もっとクールな

イメージしかないのに…

「はじめ。今俺の肩、ビンビンだぜ？」

何故にリピートですか？

高ちゃん…いつからそんなキャラに…？

僕が知ってる高ちゃんはこんなじゃないはずだよ！もう一度言うけど、クールなイメージじゃないよ！

「おっし！ナイスピッチングだな高広！…だが、そんなんじゃ俺の華麗な守備が見せられないだろ？どうにかしろよ！」

「知らん。」

「存分に知れええい！」

いきなり叫びだす前田。

華麗な守備って、誰に見せるつもりなんだろう？

今、天界野球場イーストダイヤモンド☆には敵チームのみなさんと、僕たちしか居ないのに…

だが、そんな事は気にせずに高ちゃんに文句をいい続ける前田。

「高広！おまえなあ！俺の守備をどれだけの人が見たがってるのか知ってるのか！」

「いや、知らん。」

「俺も知らんわ！でもな！でもだぞ！はじめを含む女の子達が俺の華麗な守備を見たら、俺に惚れるかもしれないだろが！さっせ！そこんとこさっせ！」

「誰が惚れるかバカッ！！消えてしまえ！前田なんて僕の前から消えてしまええええ！」

いきなりなんて事を言うんだ前田のやつ…たぶんさっきの言葉で、僕の体内温度が2度くらい上がったよ！なんで僕が前田に惚れなきゃいけないの？絶対無理だよ！てゆうか、嫌っ！！

「はじめ！俺に惚れろ！俺はいつだって…

カキン！！

その瞬間、ボールを打った音が響いた。

僕は急いで打球に目をやると、打球はやや低めではあるが、ボール

がバットの芯をくったようで、勢いよく左中間をまっぴら断つ！打ったランナーは我もの顔で一塁を踏み、そのまま二塁へと向かう。

バッターは…ショウゴさん？！

うそっ！なんか予想外なまでにすごい足速いんですけど！ショウゴさんっていったい何者？流石、野球経験者はすごいね！敵チームから来てもらったのに、

「俺、こっちのチームスから！え？仲間だった？知らん知らん！みたいな勢いで走ってる…ように見える。」

「うっし！続けよみんな！…はじめ姐さん！俺、やりました！やりましたよ！」

「えっ！いや…う、うん！」

『二番。ショート。谷本。』

「よし！私がショウゴ君を帰してやる。はじめ。お前も続け。」

「う、うん！…えっ？てことは、僕が三番なの？！」

「うむ。」

美佐さんは、僕の質問に答えると打席に立った。

見た感じ普通のスタンダードフォームで構える美佐さん…えっ？！何で左打席？美佐さんグローブは普通に右利き用だったから右打者だと思ってたよ。

そんな僕の考えとは裏腹に、美佐さんは慣れた感じで、ピッチャーが球を投げるのを今か今かと待っている。

美佐さんの思いが届いたのか、ピッチャーがゆっくりと振りかぶり…そして投げた。

シュ！シュルルル…

バスン！

「ボ、ボール！」

ボールが完璧に見えていたのか美佐さんは、

「ふっ、当然だ。君はもう少しコントロールを鍛えた方がいい。」
みたいな感じで次の球を待っている。

ピッチャーはボールだったことに不満なのか分からないけど、ちょ

つとご機嫌ななめに見える。
でも、

「そんな事は言ってられねえ！ なんとって俺はピッチャーだからな！ 次は空振りだ！」

とか思っているのか、1球目よりも、よりいっそう大きく振りかぶり、その振り上げた腕からボールを放つ。

シュ！ シュルルル：

カーン！

「ファール！」

美佐さんは軽く流すかのように外角低めのスローカーブをカットする。

ピッチャーの人は狙い通りだったのか、ニヤリと笑うと、一息置いてから再びボールを投げる。

シュ！ シュルルル：

さっきのスローカーブは見せ球だったのか、相手ピッチャーは懇親のストレートと言ってもいいほどの速いストレートを投げた。

カキーン！

「ふおお？！ なぁにいい！！？」

相手ピッチャーの懇親のストレートを上手く流し打ちした美佐さん。相手ピッチャーは自分の懇親のストレートを打たれた事にびっくりしたのか……うん。叫んだ。しかもなんかアホっぽく。そして、打球は勢いよくそのままサードの頭上を越え、ファール線ギリギリのところで落ちる。

走って一塁へ向かう美佐さん。

すかさずレフトが走ってきてボールを拾い、ファーストに投げる。
パシッ！

「セーフ！！」

レフトの見事な送球を、ファーストの人が捕ると同時に、叫ぶ審判の人。

当然だ。と言うように、美佐さんは僕の方を向くと、ニッコリと微

笑んだ。

「はじめ姐様〜!!」

いつの間にか帰ってきていたショウゴさんが僕に向かって走って来る。

えっ？何故に様なの？さんじゃなかったっけ…？

「これで1点でございますだー！俺は…俺はやりましたぞー！」
僕のところに着くと、叫ぶショウゴさん。

「うん！ショウゴさん足速いんだね！びっくりしたよ！」

「ははあー！ありがたき幸せ！」

『三番。セカンド。はじめ。』

「ショウゴさんごめんね！僕、打順来たから…」

「はい！頑張ってください！自分！全身全霊を込めて、応援しておりますだ！」

「あ、ありがと。」

そして僕はバットを持って、打席に立った。

第十九章：ベースボール！後編（前書き）

頑張って書きました！

野球は今回で終了です！

うん。頑張ったんですけどね…

第十九章…ベースボール！後編

シュツ！シュルルル…

バスン！

は…速い！130キロ後半…いや、140は出てるかもしれない！
ショウゴさんや美佐さんはこんな速い球打ったの？！

この人、草野球でもかなりレベルの高いピッチャーだね。
でも、

シュツ！シュルルル…

カキン！

「ふふっ…こんな球じゃあ僕を抑えるのは無理だよ。」
ストレートのタイミングピッタリにバットを振り抜いた僕。

バットに当たったボールは、いい感じに真っ直ぐ飛んでいく。

かなり広い球場なので、女の子になっちゃった僕の手じゃホームランは無理だけど、前進守備をしていたセンターの上を越え、ヒットになる。

一塁を踏み、二塁へと全力疾走で向かう僕。

その間に三塁を踏み、ホームベースへと向かう美佐さん。

ビュッ！シュー！！！！

「なに！？」

二塁へ向かう僕の上を、ものすごい速さで飛んで行くボール…センターの人なんて肩してるの？！

これが属に言うレーザービームってやつ？！

本当に矢のような送球だよ！全く球の勢いが止まらない！

そして、センターの矢のような送球がホームベースのキャッチャーに向かって行く。

スパーン！！

「セ、セーフ？！」

何故か疑問形の審判の人。

ベースに飛込んだ美佐さんは、ゆっくりと立ち上がり、審判の人に言った。

「そんな無責任な判断はよせ。審判は貴方なんだ。自分の判断に責任を持ってくれないと困る。」

「…………セーフ!!」

美佐さんの言葉でふっ切れたのか、再び叫ぶ審判の人。

「よし！これで2点めだ。」

小さくガッツポーズをとる美佐さん。

そしてベンチへと帰って行く。

『四番。ピッチャー。高広。』

高ちゃんは、自分の打順が回って来たことが嬉しいのか、表情がとてもいきいきしている。

バットを持ち、気合い十分の高ちゃん。

打席に立つと、ゆっくりと斜め45°の角度で、空へバットを向けた。

：これってもしかして予告ホームランってやつ？

「タイム！」

すると、相手ピッチャーがタイムをとった。

ワラワラとマウンドに集まってくる敵チームの人達。なにかを話し合っているみたいだ。

2〜3分すると、マウンドに集まっていた人達は、自分の守備位置に戻って行く。

「プレイ！」

審判の人の言葉で、試合再開。

僕達の時なんかより、目が真剣なピッチャーさん。

チラッと高ちゃんを見て、そのまま腕を大きく振りかぶる。

シュッ！シュルルル：

スパーン！

「ストライーク！」

速い！きつと僕の時なんかより全然速い！

気迫むきだしのピッチャーさんは、キャッチャーさんの返投を受け捕り、第二球目を投げる。

シュッ！シュルルル：

スパーン！

「ストライーク！」

二球目もストレートできたピッチャーさん。

高ちゃんの予告ホームランが気に入らなかったのか、それとも、その度胸が気に入ったのか、ピッチャーさんは二球連続で同じコースにストレートを投げてきている。

それなのに、高ちゃんはぴくりとも動かず、二球連続で、キャッチャーさんのミットめがけて飛んでくるボールを見送っている。

そして、三球目を投げるピッチャーさん。

シュッ！シュルルル：

勝負に出たのか、ピッチャーさんは、真ん中高めのコースにストレートを投げる。

カキーン！！

その、ピッチャーさんの全力のストレートを打ち飛ばす高ちゃん。

シューン：

高ちゃんの打った打球は、ライトの頭上を軽々と越え、ライトスタンドへ飛込む。

ホームラン！！

打たれたピッチャーさんはガックリと肩を落とす。

そんなことは気にせず、一塁、二塁、三塁、そしてホームベースに帰ってくる高ちゃん。

「やったな！予告ホームラン成功だ！」

こう言ったのは亮平。

「すごいですわ！男らしかったです！」

これは麗香さん。

「すごいです！高広君すごいよ！」

これは高橋さん。

「やるな！高広！」

これはシュバーレさん。

「やるではないか！見直したぞ高広君！」

これは美佐さん。

「やるな！」

これはショウゴさん。

そして：

「てめえ！高広！これじゃあ俺の見せ場無いだろ！ぜってカットされる！俺はぜってカットされる！」

これは前田：なに？カットされるって？

テレビじゃないんだから：流石にそんなことは：

：

……

……

……

……

……

……

……

……

……

：

そんなこんなで、今は三回表。

なんか一気にとんじやった気が：まあいいか！

ちなみに今は、6対4で僕達がリードしてるんだけど：

二回表で、高ちゃんが

「俺はもういい。誰か投げたい奴はいるか？」

って言い出して：前田がピッチャーすることになったんだけど、

カキーン！

カキーン！

カキーン！

カキーン！

と、打たれまくり、今にいたっている。

「よし！この回抑えたら勝ちだ！後は、泥船に乗ったつもりで俺に任せろ！」

前の回で散々打たれたのに、何故か自信満々の前田。

それに：泥船じゃあ沈んじやうよ：

「前田。何か秘策はあるのか？」

「秘策も秘策！俺は変化球を投げる！」

美佐さんの問いかけに、大袈裟に反応する前田。

変化球なんて本当に投げれるのか？といった目で前田を見るみんな。

「な、なんだよ！任せろって！俺に任せろって！」

「いったい何が投げれるのだ？曲がらないカーブか？落ちないフォークか？」

信じられないな。と美佐さんは前田に球種を聞く。

「ナックルだ！」

「よし。行こう。」

前田の腕を掴み、何処かへ向かう美佐さん。

「ちよっと待て！何処に連れていく気だ！？マウンドはあっちだぞ！」

「病院だ。」

「いや、待て！何で病院？！何処の病院？！何の病院？！」

前田はジタバタしながら美佐さんに聞く。

「分からないか？精神科だよ。」

「何故？！」

「前田。お前な、ナックルを投げるのは簡単ではないんだぞ！プロでもそう投げる人はいないんだ！それをお前は投げれるのか？」

「当たり前だ！騙されたと思って投げさせろよ！」

いつになく真剣な前田。

ひょっとしたら本当にナックルを投げられるのかも：

「ミサ。前田に投げさせてやろうぜ！前田ならやってくれるさ！」

「…わかった。今回は前田を信じてみることにしよう。」

「よし！行け！前田！お前の真価がとわれるときだ！」

「おお！やゝってやるぜ！」

ハイテンションでマウンドに立つ前田。

一球、二球とストライクをとり、三球目を投げる。

シュツ！シュ―……

前田から放たれた球は、ストレートとは比べものにならないくらい遅いスピードで亮平のミットへ向かって行く。

ククッ！

ブンッ！

「ストライク！バッターアウト！」

空振りをした人は、何であんな遅い球が…とくやしがっている。

その後の二人も、前田は三振をとり、試合は僕達の勝ちとなったんだけど…

第十九章：ベースボール！後編（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます！
次回からはまた、いつも通りの『ノリ』で書いていきたいと思っています！

第二十章：天界野球場・イーストダイヤモンド☆下（前書き）

今回、題名と内容は全然関係ありません。

第二十章…天界野球場・イーストダイヤモンド☆下

「いやあー！ 実にいい試合だったよ！ またやりたいものだね！」

試合も終わり、さあて、帰ろっかな？ ってオーラを出しまくってる僕達に、敵チームの監督（？）らしき人が言う。

その人の話を美佐さんが、

「うむ。ああ。そうだね。」

の言葉だけで流し、僕達は球場を出ようとした。

…その時！！

「ショウゴー！！ よく頑張った！ 解雇なんて嘘ヨ！ 戻って参れえい！」

叫ぶ監督（？）らしき人。

「すみませぬ！ 今の俺の親方様…いや！ 頭は、はじめ姐さんですだ！ だから…俺は貴方のところには…」

申し訳なさそうに断わるショウゴさん。

…いや、ちょっと待って！ 僕、ショウゴさんの姐さんになった覚えがないよ！ ていうか、絶対僕の方が年下でしょ！？

それに、頭なんてなりたくないし！

「お前が必要なんだ！ お前はこのチームのファーストなんだよー！ 帰ってこーい！」

再び叫ぶ監督（？）らしき人。

「だから俺は…」

「行ってあげなよ。僕のことはいいからさ。また、あの人達と野球しなよ。」

「しかし…」

モジモジしながら言うショウゴさん。

なんでそこでためらうの？

「しかし何かかしいよ！ ショウゴさんは野球が好きじゃないの？！」

「好きだ！」

「うんうん！」

「はじめ姐さんも好きだ！」

「うんう…ええええ?!！」

な、なに言ってるんのこの人?! とりあえず…

「いや、なに言ってるんですか!?! 変なこと言わないでくださいよ!」

「俺はまたこのチームで野球をしますだ!…それではまたお会いしましょうぞ! はじめ姐さん!」

「うん! また野球しようね!」

そして僕達は天界野球場・イーストダイヤモンドを出た。

第二十章：天界野球場・イーストダイヤモンド☆下（後書き）

さて：これからどうしましょう？

自分でも先が分かりません：

最後まで読んで下さってありがとうございます！
また読んでいただけると嬉しいです。

第二十一章：おひっこし。

「さあ帰るか！」

天界野球場・イーストダイヤモンド☆を出て、言った第一声がそれだった。

「んじゃ、ゲート出すからさ！：よいしょ。」

ブウン！

天界に来るときはちよつと時間がかかったはずのゲートを、『よいしょ』のひとことで開門させたシュバーレさん。

「さあ、みんな飛び込めー！ちなみに出口は、はじめちゃん家の前だからね！」

「はーい！」

シュツ！シュツ！

次々とゲートに飛び込んでいくみんな。

なにこれ？よく分からない展開なんだけど：

「よし！みんな入ったな：あ！ちよつとはじめちゃん！君はまだだつてば！」

「みふえ！！？」

ゲートに入ろうとした僕の襟を掴み、シュバーレさんが言った。襟をひっぱられたせいかな、変な声をあげてしりもちをついてこけてしまった僕。

「痛ッ！痛いですよシュバーレさん！何するんですか！？」

「はじめちゃんとミサは、今からオレの家に荷物取りに行くの手伝つてくれー！」

「だ、そうだ。」

ふふつと小さく笑う美佐さん。

そういえばシュバーレさん、僕ん家に居候するんだったっけ：すっかり忘れてたよ

「じゃあ、このゲートに入って！オレの家に繋げたから！」

そう言っでゲートの前で、お先にどうぞ。みたいな動作をしているシュバーレさん。

「ほう：レディファーストと言うことか。では、はじめ。行こうか。」

「あ、はい！」

なんか、シュゝって感じにゲートをくぐると、一瞬でおっきな家の前に着いていた。

今回は移動距離が短いからか、天界に来たときになった、『目の前が真っ白現象』（なんだそれ）にはならなかったみたい。

「：ここにくるのは久しぶりだな：」

「えっ?! なにか言いましたか？」

「いや、なんでもないよ。：そこにすわってシュバーレが来るのを待ってようか。」

そう言っで美佐さんが指をさした先には小さな公園があつた。

入り口のところには、丁寧にきれいな真っ白いベンチがある。

「はい! そうですね。今日は野球して疲れましたし、すわってまってましよう」

僕はそう言っでベンチへ向かつた。

公園のなかは、滑り台やブランコといった公園には欠かせない(?) 遊具があり、それで遊んでいる子供たちがいた。

「あの、」

「ん? なんだ? 」

「美佐さんって16歳でしたよね? 」

「うん。そのとうり。私は16歳だよ。ちなみに誕生日は7月7日だ。」

丁寧に誕生日まで教えてくれた美佐さん。7月ってことは、あと二か月弱くらいかあ：プレゼントなにあげよう? (またこれは別のお話し)

「はじめは何月生まれなんだい? 」

「あ、僕ですか? 3月です。3月14日。」

「結構遅いんだね。てことは、今は15歳か…いやあ若いね。」

若い？そ、そりゃあ高校生なってまだ一か月くらいだからほとんど中学3生と変わらないけど…美佐さんって16歳だよ…まだ全然若いじゃん！

「私も学校に通ってみようかな？」

「美佐さん学校行ってないんですか？」

「うむ。だが、それ相応の学力はあるつもりだけどね。」

「そうなんですかあ。学校はめんどくさいですけど、友達に会えるし、楽しいところですからねえ。行った方がいいと思いますよ。」

「うん。そうだね。お、シュバーレがきたみたいだな」

美佐さんの目線の先には、旅行カバン5、6個はゆうにあるであろう量の荷物を持って、笑顔で立っているシュバーレさんがいた。

「はじめちゃん！手伝ってくれよう！」

グラグラグラリンと荷物のバランスを保ちつつ、僕達の方へ歩いて来るシュバーレさん。

そこにすかさず駆け寄り、荷物が落ちないように手を貸す僕。

「いったいなんなんですかその量は！？なにがはいつてるんですか？！」

「えーっと…まず服だろ、んでカメラ、学校の教科書、筋トレの道具、CD、サイフ、学校の制服、それから…」

「い、いいです！もういいですよ！要するに、全部持って来たんですね？」

「違うよ。必要最低限の物しか持って来てないよ！」

パサッ

「「あっ…」」

荷物の中からスラリと抜け落ちた1冊の雑誌…必要最低限って…エ
○本もですか…？

ハハハ！…なんてこったい！

「はじめちゃん！誤解しないでくれ！これは…そう！前田に頼まれた物だからさ！ね？1000円で売って…とかいつてきたからだか

らさ！オレの私物じゃないからさ！」

素早くエ○本を拾い、力説するシュバーレさん：うん。普通だよね！思春期ですものね！普通だよ普通：

「…そ、そうですよね！じゃ、シュバーレさん！荷物も持ってきたことですし、僕ん家に帰りましょうよ。ね？」

「そ、そうだな！帰ろうか！ちよつとゲート出すから荷物持ってて」そして、荷物を僕と美佐さんに渡し、ゲートを開くシュバーレさん。ブウン

「よし！帰ろう！」

そう言うと、素早くゲートに入っていくシュバーレさん。それじゃあ僕も帰ろう。

シュ…

ゲートに入ったと思ったら、すでに僕の家に着いていた。

「あれ？普通に目え見えてる…ってええ！美佐さんがなぜここに？」

僕の目の前にある僕の家。

その家の前にいる僕の前に美佐さんがいる…

「いや、私も荷物を渡されてね。ノリで着いてきたのだよ。」ああそういうことね！

僕がうんうんと納得していると、シュバーレさんがきた。

「はじめちゃん荷物ありがとう！あと、玄関開けてー！」

ガチャっというありがちな効果音とともに開く玄関の扉。

「おっかえりなさあーい！」

第二十一章：おひっこし。（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます！

題名を見てのとおり前編です。

終わり方を見ても、続きますよー！って勢いです。

今更ながら、へたれな文で読みにくいかと、分かりにくいかと、思
います。

あ、あと、作品のご意見ご感想とうお待ちしております。

あ、最後に、これからどうか読んでやって下さい。

第二十二章：今日から私?!（前書き）

すみません！今回、おひっこし。後編は題名を変えて、今日から私?!になりました。どうかお気になさらずに。

第二十二章…今日から私?!

「お父さん！お母さん！お姉さん！それにはじめちゃん！今日はオレのために歓迎会開いてくれてありがとねー！」

「「「イエーイ！」」」

いったいなに？このテンション…？

今、僕はシュバーレさんの歓迎会をしている最中です。

今日はなぜかお姉ちゃんも帰ってきていて、シュバーレさんやお父さんといっしょに、てんやわんやのおおはしゃぎ。

その名も、おひっこし記念パーティ…それは名前とはかけ離れた、たいして豪華なものではなく、大人の飲み物（お酒）。おつまみ。ちよつと豪華な晩ご飯。の、三つから成り立っているもので、お酒が飲めない（未成年だからね）僕ができることと言えば、お話をしながらご飯を食べることくらいなんだけど…

「ハハハ！どうだい？君も飲むかい？」

こう言っているのはお父さん。手にはアルコール度数40を超えるほどの危険なお酒を持っている。

…なに？僕にそのお酒を飲ませる気なの？てゆーか『君』ってなに？！『君』って？！

お父さん相当酔ってるよ！

「うーん…かわウイーですねえ！お嬢さん。今夜、おれといっしょにランデブー？」

ふだん見る笑顔よりも、よりいっそう楽しそうな笑顔を浮かべ、僕にお酒を薦めるお父さん。…実の息子を口説こうとするなんて…父親失格だね。…まず、ランデブーってなに？

あ、シュバーレさんがこっち見てる…

「待ってくださいよう！はじめちゃんはオレの女ツスよ！はじめちゃんはー！」

ああ…手遅れだ…シュバーレさんもお酒を…未成年はダメなのに…

「はじめったら、さつきからモテモテじゃない！いつからそんな娘に？あら！この胸：おつき！」

「ちょ！ちよっと！や、やめてよお姉ちゃん！あっ！ちよっ…いやめてえ！！」

いきなり僕の：胸を、ぐわしぐわしと鷲掴みにしてきたお姉ちゃん。容姿は悪くなく、僕の鼻眉目でなくとも、美人と言う部類に入る綺麗さ。：でも、性格がなあ：

そんなお姉ちゃんは、僕の抵抗をもろともせず、いまだぐわしぐわしと僕の胸を：ああ：なんか変な気分：僕は男だよー！

「本当になかなかのものを持ってるわね。奈緒美ちゃんいいな。ママもはじめちゃんの触ってみたいな」

「お母さん！目がおかしいよ！！」

「いやあ。はじめくん。実に楽しい家族だね。私もそのうち悪ノリしてしまえようだよ。」

「や、やめて：くださいよ！美佐さん！ああ！ちよっと！お姉ちゃん酔ってないでしょ！？ふざけないでよー！」

「ごめんね！はじめ、ごめんね！悪気はないの！：つい、ね。」

そう言っかわいらしく舌を出してテヘッ♪と言うお姉ちゃん。ダメだ：似合わない：

「次はママの番よー！はじめちゃん！覚悟！」

はち切れんばかりの笑顔のお母さん。

：いったいどう覚悟しろと？どうせ逃げても無理矢理揉むくせにー！ええい！こうなったらやけくそだ！

「望むところだ！」

「いまだ！食らえ！40度お酒アタック！」

「ちょ！お姉ちゃん！：むう：ゴクゴクッ……………うふ♪いきますよおう？！」

：
：
：

：

：

：

やあ。はじめくんの精神崩壊(?)に変わって、後半は私が語ろうではないか。

おっと、何故くん付?と思った人。それはね:最近、『はじめ』と呼び捨ての人が増えてきて分かりづらいかな?と思う作者の優しさだよ。

さて、とりあえず名前は覚えてくれてるよね?谷本美佐だ。

いや、今はそれどころではないな、はじめくんの様子を!

「はふう:ぼくははるさきはじめでふ。よろひくおねがいしまふ。」

「はい。こちらこそよろしく!」

シュバーレと向かい合って話すはじめくん。

おやおや、2人とも顔を赤くしちゃって(お酒のせい)、まるでお見合いみたいだな。

ん?待てよ:シュバーレは神なんだから酒は効かないはずじゃ:

「あなたのおなまえはなんですかあ?」

「オレの名前はシュバーレ・ウェザー・ゴッドだよー!」

うむ。シュバーレは確実に酔っていないみたいだな。

「では、すばーれさん!ぼくはですね:ぼくはですね:」

「うんうん。」

「おんなのこじゃないんれふよ?おとこなんれす!なのにはぼくは:どうすればいいのですかあ?」

おお!はじめくん。人生相談ときたか!

「そうだね:まず、私って言った方がいいよ。女の子になっちゃったんならさ!女の子っぽく話そうよ!」

シュバーレ:お前っていったい:

「はい!わかりました!あたしですね。きょうからあたしでふね!あたしがんばりまふ!」

「おお！いいよはじめちゃん！」

「あたしががんばりまふ！あたしががんばりまふ！あたしいく……んんく……むにゃむにゃ……」

あ……寝た。

「なあ美佐？」

「ん？なんだ？」

「はじめちゃんを部屋まで運んであげて！オレはまだお父さんとお母さんとお姉さんと話して信頼を深めるからさ！」

「うむ。わかった。まかせておけ。ついでに私も寝させてもらうよ。今日は疲れたから」

「おお」

「よいしょっと」

そう言って私は、はじめくんを担ぎ、部屋を出た。

「んんく……むにゃむにゃ……きょうからあたしですよ……みなさんよろしくですよ……」

「ふふっ……誰に言ってるのやら……」

第二十三章：夢を追いかけて！（前書き）

すみません。最近忙しくって、書き置きしてたやつをちまちまと投稿してます。

まあ：これが書き置きの最後ですけどね！

次回からはどうなるのか自分でも分かりませんが、頑張ります！

第二十三章：夢を追いかけて！

『はじめ。』

僕を呼ぶ声がする…

誰だろう？聞いたことない声。

でも、なぜか心地いい。とても優しい声。

『はじめ。行きなさい。』

どこに？ぼくはどこに行けばいいの？

『行きなさい。はじめ。行きなさい…』

…

……

……

……

……

「はじめくん。はじめくん。」

ん？誰？ぼくを呼ぶのは…

「はじめくん。学校に行かなくていいのかい？遅刻するよ？おい、

はじめくん」

え？学校に行く？……学校…ああ！学校！！

「がっこ！」

叫びながら、勢いよく布団を跳ね除て起きたぼくを見下ろす1人の女性。

今のぼくと同じくらい、肩まで伸びた綺麗な髪に、パツチリとした二重まぶた。

体は少し細めなのに、出るところはでていて、顔はかわいいというよりも、美しいといった感じだ。

「やっと起きたかい？今日は学校だね？」

「そうでした！学校でした！美佐さん、今何時ですか？」

なぜ美佐さんがいるのだろう？そんなことはさておき、今は何時な

の!?

「7（なな）時15分だね。」

美佐さんが時計を見ながら言う。なんでなな時って言ったんだろ？しち時のほうが言いやすいだろうに…

「わぁ！早い！起こしてくれてありがとうございます。おかげで余裕をもって登校できますよー。」

「いやいや、一宿一飯の恩義くらいしないかね。あ、制服と着替えはそこに出して置いたよ。」

美佐さんが指差す先には、丁寧にたたまれたカッターシャツとTシャツ、ハンガーにかけてある制服があった。

「あ、ありがとうございます。：はぁ：」

溜め息がでる。ぼくの通う清流高校の制服は、男子は紺色のブレザーに、緑色のチェックのズボン。

女子は、同じく紺色のブレザーに、緑色のチェックのスカート…しかも、自分で言うのもなんだけど、なぜか今のぼくに似合うんだよね…：はぁ…

昨日は気にならなかったけど、よくよく考えてみればすごく恥ずかしいよ。

ヒラヒラとスカートをはためかせて学校へ登校するぼく…ダメだ…考えただけで泣けてきた…

「ん？どうしたんだい？」

あまりの悲しさに、ふるふると震えているぼくを見て、美佐さんが不思議そうな顔をして聞いてきた。

「い、いや！なんでもないです。気にしないでくださいー」

「そうかい？それならいいんだが…妙にはじめくんの目がうるうるしていたからね、どうしたのかな？と…」

「だ、大丈夫です。ちよっと…目にゴミが入ったんです。」

ふーん…そうかい？と言って美佐さんは…なにかを始めた…：…：つてええええ！！

「わっ！ちょ！美佐さん！」

「ん？なんだい？はじめくん。」

「なんだいじゃないですよ！いきなり着替えないでくださいよ！…うわぁ…いや、いや！ぼくは男ですよ！？少しは恥じらいというものをですね！」

「あら、なにかい？はじめくんは恥じらいがある娘が好きなのかい？…可愛らしいな…」

その瞬間、ぼくの顔は湯気が出るんじゃないかってくらい赤くなっただ…と思う。

そんなぼくを見て美佐さんは、ふうんはじめくんは恥じらい好きかぁ…ふうん少し笑いながら言っている。

「ち、違います！ぼくは男なんだから少しは気を使ってくださいって意味です！まだ…その…この体とか、女の子とか…慣れてないんですから…」

まあ昨日なつたばかりだし、まだまだ慣れるなんて無理だろうけど…

「大丈夫だよ。私は気にしないから、さ、はじめくんも着替えないと。」

「えっ？！いや、ぼくはまだ…」

「善は急げだよはじめくん！私は気にしないから。さあ！」

善は急げって…学校に行くまでの時間を引いても、まだ1時間以上時間余ってるんだし、まだ着替えなくてもいいんじゃないか…

「い、いや、大丈夫ですよ。まだかなり時間ありますんで…」

「いや、着替えなさい！私が教えるから！はじめくんのために気付く講座開いちゃうから！」

「い、いや！いいですって！ていうか美佐さんキャラおかしくなってますって！わっ！ちょ！美佐さん？…！」

「はい。黙りなさい！女の子なんだろう？ブラジャーくらい着けないと、女の子やってけないよ？」

「いや、だからってちよっと！い、いやぁぁぁ！！！」

この後約30分近く、美佐さんのブラジャー気付け講座が開かれま

した…………。

：

……

……

「うう…なんだか男として、とても大切なものを失った気がします…」

ようやく心痛む気付けど講座が終わり、制服に着替えたぼくは言った。ついさっき終わったことだからか、まるで野球中継のハイライトシーンのように蘇る鮮明な記憶。

さっきまでぼくは…うわああああああ！！

「大丈夫。はじめくんはもう立派な女の子だよ。」

「うう…美佐さん…それ、フォローになってませんよ…」

「いや、すまない。つい、な。」

はははと笑う美佐さん。

いや、ついて…嫌がらせですか？ぼくはどうすればいいの？ああ…やだっ！なんかスカートすっごくスースーするう…

今日は学校休もうかな…きっと許されるよ。家で寝てたら男に戻ってるかもしれないし…

軽く現実逃避気味のぼくをよそに、ガッチャーン！と豪快に開く部屋の扉。

「はっじめちゅあーん！おっはよー！」

シュバーレさんが部屋に乱入。

なぜか麦わら帽子をかぶり、虫かごを肩から腰にかけて長い紐で吊し、虫捕りアミを手を持っている。

なに！？…いったいなにを企んでるの！！？

「今日の放課後、ツチノコを捕獲しに行こう！」

ああ…なに言ってるのこの人…ツチノコ（他のへびに比べて体が短く、体の真ん中辺がふつくと膨らんでる幻のへび。※作者の記憶があいまいなので、ちゃんとした説明ができません。大変申し訳ありません。）なんているわけないじゃん…

「いや！いるんだよこれが！」

「あっ！シュバーレさん！ぼくの心読みましたね？！」

「ゴメーヌ！でもさ！いるんだよ！さっきニュースでお姉さんが目撃情報を！」

なんで朝っぱらからニュースでツチノコ発見報告してるの！もつとまともなニュース見ようよ！普通の天気予報とかのほうがよっぽど素敵だよ！

「てことだからさ！放課後に山行くよ。山！来れる人は呼んどいてね！多い方が楽しいし！」

「そりゃそうですけど…」

『はじめ。行きなさい。はじめ。行きなさい。』

「ツチノコ探しに！？」

「どうしたのははじめちゃん？！！」

いきなりの謎の声に思わず叫んでしまったぼく。

行きなさいって、ツチノコ探しに？意味が分からないよ…

「あ、いや、ちょっと…」

『はじめ。行きなさい。行きなさい…』

再び聞こえてくる謎の声。

なにこれ？心に直接響いてくる優しい声。

でも、なに？行きなさいって…ツチノコ探しに行けばいいのかな？

「は・じ・め・ちゃん！」

「きゃっ！」

謎の声の言葉の意味を考えていたぼくの顔の前に、突然シュバーレさんの顔が！びっくりして変な声出ちゃったし！

「おっ！女の子してるねえはじめちゃん！」

「う、うるさいっ…です…」

「で、どうするの？はじめちゃんはツチノコ探し、行く？行かない？」

「うーん…」

謎の声は行けって言うけどなあ…ツチノコ探しかあ…どうし

よう？行ったほうがいいのかな？でも、もしかしたら行かないほうが：

「うゝん…」

「じゃ、決定で！」

「えっ？！ちょ、ちよつとお…」

「んじゃあオレ、そろそろ学校行くからー！」

そう言って虫捕り少年の姿のまま部屋を出て行ったシュバーレさん。

…ま、いっか！楽しそうだし、未確認生物とかは嫌いじゃないしね！

「…あっ！ぼくも学校行かなきゃ！いってきまあゝす！」

「いってらっしゃーい！」

そしてぼくも、シュバーレさんの後を追うようにして家を出た。

第二十三章：夢を追いかけて！（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。

次回からのツチノコ探しなんて：もう、どうしよう？って感じですよ。

次回も、ノリで！勢いで書きたいと思います。

また、次回も読んでいただけると光栄です。

：あ、あと、他の作品も読んでいただけると光栄です。

第二十四章…ツチノコ探し

「起立。れいっ。」

「「「ありがとうございます」」」

やっと6限目の授業が終わり、教室はキャッキヤと楽しそうに話しながら帰り支度する生徒や、帰っていく生徒でごったがえしている。そんな楽しい放課後にも関わらず、確実に浮いている人が1人…

「はじめちゃんはじめちゃん！早くツチノコ探しに行こうよー！オレ、もう我慢できないー！」

あの、牛乳と混ぜるだけで美味しくできてしまう朝ご飯の定番（？）のCMに出てくるゴリラの真似をしながら、虫捕りアミを振り回しているシュバーレさん。

それを聞きつけてか、ぼくのもとにやってくる男子生徒が2人…つて速っ！なぜに走るの？！

「うおお！俺も我慢できないいいい！」

「俺もだああああ！」

「なにをだあー！」

うわっ！しまった！勢いでぼくまで叫んでしまった…ああ…恥ずかしい…クラスの女子がクスクスこっち見て笑ってるよ…

「なにをだとう？ふっ…知れたことを！俺はいつだってはじめに着いて行くからな！覚悟しろ！はじめ万歳！はじめ萌えー！はじめ萌えー！またこんど、このメイド服着てくれー！」

そう叫びながら、メイド服をヒラヒラと鞆から取り出し、涙目で土下座している男子生徒……前田。

「おお！俺も見えてえ！春崎、俺からも頼むよ！見してくれ。絶対似合うよ！かわいいよ！春崎万歳！」

「えっ?! ちょっと亮平…キャラおかしくない!? ちょっと! なに、そのエロい笑顔は!…ぼく…いやだよ! 着ないよ! ぼくは着ないからね!」

そうだ！着るもんか！ぼくの心は漢なんだぞ！

「じゃあ、せめてこれを！せめてこれを着けてくれー！」

無駄に叫びながら、亮平が前田の鞆から取り出したものは：

「これを着けて、亮にゃん♪だあゝいすき♪または、亮たまあゝお腹空いたにゃあゝ♪って言ってくれ！それだけで俺は満足だ！」

取り出したものはネコ耳カチューシャあ！！？

ちよ、ちよっと！亮平が、亮平が壊れたよ！いやだよ！ぼく、こんな亮平いやだよおー！！

「た、谷口：君…？」

「えっ！高橋さん！？ダメッ！今は亮平に近付いちゃダメだよ！もう、いろんな意味で危ないよ！」

突然現れた高橋さんは、ぼくの警告を無視して、じりじりと亮平に近付いて行く。

「そ、それ、かわいいね。私、着けてみたいな…」

うわっ！高橋さんまで？！今日はいったいどうしたの！？実はそんな趣味が…

「いいよ。ほら、貸したげる。」

「わあーい！ありがとー。…えへっ似合うかな？」

カチューシャを着けてクルクルと回る高橋さん。

高橋さんってもしかしてかなり天然？

「グット！」

「よし！次は、はじめちゃんの番よ！覚悟お！」

「いやだよ！ぼく、着けないよ！」

「そんなこと言わないで。谷口君と前田君も手伝って」

「ハッ！！」

威勢のいい返事とともに、ぼくの両腕を抑えるバカと化した亮平と、もともとバカな前田。

「うわあ！卑怯だよ！ううゝ離してえー！いやっ！ネコ耳はやだー！…うそっ？！くうゝ…動けないいい！えっ？い、いやあああああ！あ！！！」

…カパッ

高橋さんの手によってぼくの頭に着けられたネコ耳カチューシャ。あっ…ちょっと泣きそう…もう、この際こいつら（高橋さんを除く）を殴り飛ばし、ケチヨンケチヨンにしてやりたい気分だ。

「似合う似合う！かわいい！かわいいよはじめちゃん。かわいい！」
ぼくを見て、ひたすらかわいいを連呼する高橋さん。

「想像通りだ。はじめ！お前、本当にありがとう！いいものを見してもらったよ！ああ…マジでかわいいぜ！はじめ万歳！！」

「う、うるさいバカッ！！」

カチューシャを着けたぼくを、やたらと褒めてきた前田。

なんというか…ウザかったので、一度やってみたかった飛び後ろ回し蹴りをしたぼく。蹴った瞬間、フワリとひるがえるスカートはどうしたのか…

「ぐはっ…ピ、ピンクだと！…我が生涯に…一片の悔い無し！！」

「い、いいじゃん！なに色でも！ぼく、好きで履いてるんじゃないんだよ？！あっ！ちょっとそこの男子！見ない！見ちゃダメッ！」

教室の中にいた男子生徒の視線がぼくに集まっている。

うう…いやだな…なにこれ？ぼくは男なの！お・と・こ…！凝視するな！

そして、気持ち悪い笑顔を浮かべ、その場に倒れる前田。

さようなら…そして、二度と起きあがないで…

「くおおー！春崎いー！亮たまって、亮たまって言ってくれー！」

「言わないっ！」

だめだ…前田を倒したと思ったら、次は亮平！？…今日の亮平はやつぱりおかしいよ…こうなったら…

「えいっ！」

「く、くすべらっちゃー！！」

亮平のお腹にぼくの全体重をかけた正拳突きが炸裂！

意図的に出したであろう、奇妙な叫び声を出して前田と同じように、ドサッと倒れる亮平。

次起きるときは、もとの亮平に戻ってるといいな…

「こら！お前らドサツと倒れるな！今からツチノコ探し行くんだぞ！」

どこからかヤカンを取り出し、亮平と前田の顔に水をかけるシュバーレさん。

なんだか古くない？気のせい？

「ああゝあ。いい夢見えるかと思ったのによー。シュバーレ、お前どうしてくれんだよ？」

「あ、悪かった。でもな！ツチノコ探しに行く〓はじめちゃんとドキドキイベントが発生するかもしれねえだろ！？オレはこっちのほうがいいと思うけどなー」

「「おお！それは素晴らしい！」」

水を浴びて目覚めたバカ2人（もう亮平はダメみたいだ）は、目をキラキラさせてぼくを見てくる。

なにこの純粋な子供の目は？そんな目で見られると…なんというか…ねえ？

「そ、そんなこと言ってないで、ね！早くツチノコ探し行こっ！」

「そうだ！早くツチノコ探し行こうぜ！はじめちゃんとのうれし恥ずかしびっくりドキドキイベントを期待して！」

なにさ！うれし恥ずかしびっくりドキドキイベントってなにさ！？そんなイベント、絶対に発生さしてなるものか！

「あ、そういえば麗香ちゃんは？高広は？」

「あ、麗香さん（手芸部）と高ちゃん（野球部）は部活があるから行けないって言ってたよ。」

「あゝ…そりゃ残念！せっかくのツチノコに会うチャンスなのに…まあいいや！紗香ちゃんも来るかい？」

「えっ？あ、うん。私も行きたい。」

「オッケー！じゃあ、行こーか！」

「はい！」

元気よく返事をして、シュバーレさんに着いて行く高橋さん。

「おい、はじめ！」

「なに？」

パシャッ！

ぼくが振り返ると同時に、勢いよくシャッターをきった前田。

…カメラ、持ってきてたんだ…

「うおおおお！なんて自然体！そしてネコ耳！はじめ！俺はおま…ぐふお！」

「バカッ！こんなもの！」

とりあえず前田のお腹を殴り、いまさらだけど、カチューシャを急いで取るぼく。

「こんなもの…」

…カパッ

…前田の頭にネコ耳装着！

「ぷっ…全然似合わないや」

なんだろう？なんか楽しいや

「さ、亮平。行こっ」

「お、おう！」

「シュバーレさーん。待ってくださいよー」

ぼくは亮平とシュバーレさんの後を追った。

第二十五章…ツチノコはいね〜が〜

ザワザワと風で木が揺れ、少し生暖かくて気持ち悪い風で、ぼくの髪がサラサラとなびく。

学校を出たぼくたちは今、学校から歩いて約30分くらいで着く、海の近くの山に来ている。

ぼく達の住んでいる清流町は、田舎か都会かといえば、田舎のほうが濃い町で、少し歩けば山へ海へと行けちゃうところだ。

そんな清流町の豊かな自然を肌を感じつつ、ぼくたちはツチノコ探索をしているんだけど…

「シュバーレ…ツチノコ、いないんじゃないか？さっきからカエルしか見つけてねえじゃねえかよ」

そう、亮平の言うとおり。

ツチノコなんてまったくいる気配が無い。

本当にさっきからヒガエルとかトノサマガエルとかしか見つけてないし…ここにはいないんじゃないかな？

「馬鹿野郎！まだ探し始めたばかりだろ。男なら簡単に諦めんなよ」

「いや、シュバーレさん？探し始めたばかりって…もう、1時間くらいこの森歩き回ってるよ？そろそろ帰ろうよ。ツチノコは、また今度でいいじゃないですか。」

それにもう、5時過ぎちゃってるし、暗くなったら怖いしさ。

「じゃあ、あと30分！あと30分だけ時間ください！絶対見つけてみせるから！」

「…わかりました。30分ですね。見つからなかったら、今日は諦めてくださいよ。みんなもそれでいいよね？」

「「「いいよ」」」

「オツケ！はじめちゃん。その代わり、もし30分以内にツチノコ見つけたら、日曜日にオレとデート行こう！」

「なんでですか?! どうやったら今の会話からデートにたどり着くんですか!?!」

ていうか、デートってなに?! なんでぼくなの?

ぼくの中で、デートと言うものは、仲のいい男女が友情やら愛情やらを深めるためにするものだと思います。

確かに、シュバーレさんはカッコいい男の子で、今のぼくは女の子です。

だからって、体は女の子でも、心は男なんだよ? なんかぼく、危ない人みたいじゃないですか!

「大丈夫。はじめちゃんはかわいいからそんなことは問題ないよ」

「あゝっもう! 人の心読まないでください!」

「ごめーんね! それじゃ、ツチノコ探して来るからその辺で待ってー」

「あっ! ちょっと! シュバーレさん!」

ものすごい速さで走って行くシュバーレさん。

…行ってしまった…こうなったらツチノコが見つからないこと祈るしかない。

早く帰りたいし、ぼくはデートなんてしたくない。

もし、したところでなにしたらいいか分かんないし、デートっていったら…その…手とか繋がなきゃならないんじゃないかな…? シュバーレさんのことだし、ありえなくもない。

…大丈夫。ツチノコなんているはずがない。

どうせ朝のニュースの目撃情報は見間違いだ。きっと、カエルかネズミを食べてたあまり大きくないへびを、ツチノコと見間違えたんだ。うん。ぼくはそう信じたい。

「うおお! ツチノコいたあー!」

「なにiiiiiiii!?!」

ツチノコらしき生物を持って、全速力で帰って来るシュバーレさん。わわわわわわわ! 本当にへびだよ!

…えっ? なに? あれがツチノコなの?! なんか長いような…まるで

普通のへびみたい

「さあ！ツチノコつかまえだぜはじめちゃん！ひゃっほう！日曜日デートだー！」

「ちょ、ちょっと待ってください。…それ、普通のへびじゃないですかつ！ツチノコじゃないですよ！」

「こいつはツチノコだい！ツチノコなんだい！」

必死でツチノコと言い張るシュバーレさん。

そう言われると、ツチノコに見えなくもないような…いや、でもやっぱり長いような…いったいなんなのこのへび！

「おいおい、お前らは何も知らないんだな。この俺が見てやるよ。」

子供動物図鑑爬虫類編を丸暗記しているこの俺が！

いや、子供動物図鑑爬虫類編って…前田そんなもの暗記して何するつもりだったんだろ？やっぱりぼくにはこいつのしたいことが分からない。

「どうだ前田！こいつはツチノコだろ！？」

「…いや、子供のアオダイショウだな。たぶんこの腹の膨らみは、カエルでも飲んだんだろ。残念だったなシュバーレ！はじめは簡単には渡さんぞ！」

「くっ…ツチノコじゃないのか…」

「で、どうするんですか？このアオダイショウ。かわいそうですよ。あ、シッポ持ってブラブラしちゃあダメですっ！ちぎれちゃいますよ！シッポが！」

「安心しろはじめ。へびはちぎれない。シッポがちぎれるのはトカゲだ。」

「あっ…」

「なんてかわいいはじめちゃん。トカゲとへびを間違えちゃってー」「人間、間違えない人なんていないんです！ほっといってください！」

ああ…ウザい。言っちゃ悪いけど、すごくウザい。なんだってこの人は…

「まあ、雑談はこの辺にして帰ろうよ。私、お腹空いちゃったし、

ちょっと暗くなってきたみたいだから」

「そうだね。じゃあ帰ろうか。」

「あゝ…ツチノコが、ツチノコがあああああ…」

「いいから帰るの！ 帰りましょう！ あと、そのへどは逃がしてあげてくださいね」

「「はーい」」

ああ…疲れた…今日は帰ったらすぐ寝よつと。

「はじめちゃん！ 帰ったらオセロしようよ。」

あ…涙が…

第二十五章…ツチノコはいね〜が〜（後書き）

今回も、今日から私?! を読んで下さってありがとうございます。
いきなりですが、最近笑いどころがなくなってきた気がします。

…どうでしょう? そう思いませんか?

と、いうわけで、次回は笑いを頑張ろうと思います。

では、また次回に会いましょう!

第二十六章：お買い物。（前書き）

今回の登場人物は、はじめちゃんとシュバーレさんの2人だけです。他のキャラが好きな人は、え〜っ！…残念。なんて思わず、普通に読んでくださると幸いです。

第二十六章：お買い物。

さて、どうしたものか…お魚か…それとも、お肉か…うゝん…迷うなあ…

あ、これじゃあぼく、変な人みたいですネ…

今ぼくは、今朝お母さんに夕飯の買い物を買われたので、学校帰りに近くのスーパーに来てるわけです。

しかも、おつかいの内容は、『はじめちゃんにおまかせ♪』…ぼくにおまかせって…いったい何年主婦してんの?! おつかいの内容くらい考えてくれたって罰は当たらないよ!

で、ぼくがお母さんにそう言ったら

「じゃあ今日の夕飯は、はじめちゃんにおまかせ♪これは花嫁修行よっ! 美味しいの作ってねー。」

もういやっ! なに? 花嫁修行って! ぼくにお嫁に行けと?…うゝ…なんか泣けてきた…はあ…まあ、ぼくは料理とか作るの嫌じゃないし、むしろ好きなんだけどね。

でも、花嫁修行とか言われたらさあ…ねえ?

まあそんなことは置いといて、メインをお肉にするか、魚介類にするかだ。

ぼくはとくに好き嫌いはないけど、お母さんが半端じゃない!

お肉は、牛肉食べれないし、野菜ではピーマンやニンジンが嫌いだ
(子供かまったく…)

だから、今日は魚介類で攻めてみようかなと思ってたりするんだけど…

「はじめちゃんはじめちゃん。オレ、ビーフシチュー食べたいなー」

「…シュバーレさん? お母さん、牛肉嫌いって言ってなかったっけ?」

問題はシュバーレさんだ。

ぼくはシュバーレさんの好物なんて分からない。

だから困ってるわけで：あ、いまさらだけど、買い物、シュバーレさんも着いてきてます。

「えっ？オレの好物？嫌だなあー。はじめちゃんの料理ならなんだって食べるさー」

「はい、心読まない！」

「ごめんなさい。」

「で、シュバーレさんはなにか食べたい物ありますか？」

「そりゃあ、はじめちゃ：ごめんなさい。」

なにを言おうとしているんだこの人は！？バカじゃないですか？！なんとかぼくが、大きく腕を振り上げてシュバーレさんを威嚇したからよかったものの、もうちょっとでこの小説が危ない方向へ走り出すところでしたよ！危ない危ない。

「まじめに答えてくださいね？次さつきみたいなこと言ったら叩きますよ？」

「申し訳ありませんでした。」

「わかればいいんです。わかれば、で、なんですか？」

「うーん：じゃあママ！僕、エビフライが食べたいなー」

「ま、ままママ……」

「あれ？ママじゃいやかい？ならお母さんで：」

「ちっがああううー！そこじゃないですってばっ！」

ちよつとシュバーレさん。

ぼくの心&声の叫びに対して、え？なんで？じゃあ、なにさ？なにがいいのさ？って目で見るのはやめてくださいよ：

意味が分かりませんから：

「どったの？はじめちゃん。」

「えっ？あ、いや、なんでもないんです。なんでも。：あと、お母さんとか言わないでくださいね。意味が分かりませんから。それ系統のことを次言ったら叩きますよ？」

「あ、はい。ごめんなさい。」

「わかればいいんです。じゃあ、今夜はエビフライで決定ですね。ぼく、頑張っちゃいますよー！」

ようし！まず、エビフライならエビを買わないとね。

さあて、んじゃあちよっくらお魚売り場にでも…

「荷物はオレが持つよっマイハニー！…かはっ！…：…はじめちゃん。速いよ…少しはためらって！躊躇して！オレを気にかけてくれよう！…基本的にオレ、神様だから怪我とかしないんだけどさ…：…眉間を第二関節の部分で殴るのはさ…：さすがに効くよ？心、痛むよ？腹筋、割れるよ？バラバラだよ？」

「シュバーレさんが悪いんですっ！なんですかマイハニーって！？…じゃあ、なんですか？シュバーレさんはぼくのマイダーリンですか？」

いきなりの謎めいた発言に、思わず拳が反応したぼく。

よかった…その辺は、まだまだ男の子なんだね。

しかも、反射での攻撃にもかかわらず、丁寧に急所突いてるし…ぼくの前世って武術家かもっ！

「うんうん！マイダーリン！呼んでー！マイダーリンって呼んでー！」

「いやですっ！」

もう！シュバーレさんはいったいなにを求めているの？！

いちおうまだ学校の制服なんだよ？いや、制服でなくてもだけど！道行く人が、ダーリン（はあと♪）ハニー（はあと♪）なんて言い合ってるの見たら絶対引きますよ！

少なくともぼくは引きます！

「やだやだやだー！マイダーリンって呼んでくれなきゃやだー！」

「いやですってばー！」

「くう…：言ってくれないなら、神様の力、使っちゃうもんね！奇跡、起こしちゃうもんね！」

「えっ?! ちょ、ちよっと！シュバーレさん？それは人としてやってはいけないと思います！人の心を捨てないで！」

ダメだ！絶対にダメだ！シュバーレさんが神様の力使うなんて…ああ…想像もつかないよ！それだけはなんとしても避けないと！

「さようなら。汚れ無きオレ…そして、こんにちは。汚れてしまったオレ…」

うわっ！なんか言ってるよっ！…シュバーレさんって、その日その日でキャラ変わったりするからなあ。

これはもう、ぼくが言うしかないのか…あれを言うしか…

「神よ！では、まず1つ目の願いじゃ！はじめちゃんと…」

「ちょ、ちょっと待ってください！言います…言いますからっ！神様の力はやめてください！奇跡なんて起こさないでくださいっ！」

「やったぜい！ありがとうマイハニー！ついに決心がついたんだね！賢明な判断だと思うよー」

「は、ははは…ぼくもよく決心したと思いますよ。……はあ…」

さようなら…汚れ無きぼく。そして、こんにちは…汚れちゃったぼく…う、うう…

「じゃあさっそく…言ってご覧。マイダーリン（はあと♪）。リピートアフターミー。マイダーリン（はあと♪）」

「ま、マイ…ダーリン…」

ぐはあ！…いい、痛い…心が痛いよ…なんでぼくがこんなことを？神様あ…なにかぼく、悪いことしましたか…？

…あっ…神様ってシュバーレさんのお父さんのはずじゃあ……うう…涙が…

「ノン、ノン、ノンッ！はじめちゃん。言うのはマイダーリン（はあと♪）だよ？（はあと♪）の部分が大事なんだよ分かる？」

「すみません…分かりません…」

「だからね！気持ちをね…」

この後、（はあと♪）の部分の発音を練習させられたのは言うまでもない。

ああ…ぼく、晩ご飯の材料買いに来たのになあ…

それにしても、難しいな…（はあと♪）…

第二十六章：お買い物。（後書き）

どうも、リリースです。

今回は、はじめちゃんとシュバーレさんのお買い物。

という、言わなくても分かるお話です。

だって題名、お買い物。だもんね！…わかるよね？

次回は、続・お買い物。ということで、頑張って書きたいと思います。

今回も読んで下さってありがとうございます。

次回も読んでいただけると幸いです。

第二十七章：続・お買い物。

マイダーリン（はあと♪）発音講座が始まって、約20分が経過したところ、ぼくはなんとか（はあと♪）の発音ができるようになってきた。

約20分間ずっと、マイダーリン（はあと♪）マイダーリン（はあと♪）と言い続けていたせいか、ぼくの周りにはたくさん（20人くらい）のギャラリーが集まっている。

写真撮ってる人とかいるし：はつきりいつてやめてほしい：ぼくは見せ物じゃないよ！！

「さ、はじめちゃん！最終テストだ！オレがマイハニー（はあと♪）と呼ぶから、なあに？ダーリン（はあと♪）と振り向き様に言ってくれ！」

「：わ、わかりました：」

今のシュバーレさんの発言のせいか、さっきよりギャラリーが増えたような気がする：パートのおばさんまで見てるし：仕事しようよ！仕事！：はあ：今のぼくなら、日本に来たときのパンダの気持ちに分からないでもないかも：

「よし！：いくぞ？」

「ど、どんとこいです！」

嵐の前の静けさと言ったところだろうか、さっきまでガヤガヤしてたギャラリーが静まりかえる。

うう：嫌だなあ：騒いでてくれて構わないのに：

「：ハアイ♪マイハニー（はあと♪）」

「なあに？だ、ダーリン（はあと♪）」

「：.....」

パチパチパチパチ！

突然起こる拍手の嵐。

なに！？いったいなんなの！？拍手の意味がわからないよ！

…そんなことはお構いなしに、拍手を続けるギャラリーのみなさん。
「よくやった！ 恥じらいがかわいいぞ」

そんな…

「本当、お似合いのカップルだわ」

いや…

「かわいいぞ！ 好きだー！！」

やめて…

「う、うわああああああ！！！！」

「どこ行くのはじめちゃん！？ ねえ？ はじめちゃんったらー」

「うわあああああああ」

ダメッ！ 耐えられない！ 耐えられないよ！ 拍手ってなに？ お似合いのカップル？ しゃらくせえー！！ ぼくは漢だー！！！！！！！！

「ああゝ待ってよはじめちゃん」

「ぜ、絶対いやですーっ！」

走れ！ ぼくよ！ 風に、風になるのだ！ もう、こんなところにはいられない！

ぼくはスーパーの入り口付近のカゴ置き場に、手に持っていたカゴを置き、急いでスーパーを出た。

「スーパーのばっかやろー！！！！！！」

そして叫んだ。

スーパーが野郎なのかわからないが、スーパーがバカなのかわからないが、ぼくは叫んだ。

ああ…涙が………………最近ぼく、泣いてばかりだよ…うう…

そして、家に帰ったぼくは、ぼくの部屋で思いっきり泣いた後、シユバーレさんを叩きました。

…あ、結局エビフライの材料はお母さんが買って来てくれました。

…エビフライは美味しかった…けど、トラウマになりそうなお出がひとつできてしまった。

…あ、また涙が…

第二十七章：続・お買い物。（後書き）

どうも、リリースです！

今回、一回書いたやつを消して、書き直すと言うあら技をしてしまいました！

すごい自分でもなにがしたかったのか分かりません：

うん。まあ、次回は：うん。いつも通りのノリで書きますので、楽しみにしておいてください。

今回も読んで下さってありがとうございます！

へたくそな小説ですが、もしよろしければ次回も是非！

そんなわけで、え〜っと：リリースでした！

第二十八章：今日は五月二十六日（金）（前書き）

今回は、はじめちゃんの日記です。

第二十八章…今日は五月二十六日（金）

五月二十六日（金曜日）

今日は、近所の小学生たち（10人くらい）に『お姉ちゃん！サッカーしようよー！』と、誘われて、一緒にサッカーをしました。

家の近くの公園でしたんだけど…またこれが結構上手な子たちでびっくり！

小学生なのに、結構足速いし、ドリブル上手いし、シュート上手いしで、ちょっときびしかった…

まだ、小学生だから勝てるけど、これが中学生とかだったら勝てなかったと思う。

まあ、それでもまだまだ小学生。

こけて泣いてる子や、ボールを全力で蹴ろうとして当たらない子、甘えてくる子とかがたくさん！

みんなの面倒みるのは大変でした！

そして帰るときに、お姉ちゃんお姉ちゃん泣きながら抱き付いてきたときはどうしようかと思いましたよ…

でも、サッカー楽しかったし！子供たちはかわいかったし！いい運動になったしで言うことなしでした！

そういえば、今日で女の子になってから約二週間が過ぎました。

シュバーレさんや美佐さんに書くように薦められた日記も、だいぶ日記らしくなってきた気がします。

ああ…時間が経つのは早いなあ…

そして、人間、慣れるのも早いなあ…

近ごろは、トイレに行くのにもためらいがなくなってきた気がします。

最初は間違えて男子トイレに入ってしまったし、女子トイレに入るのに戸惑ったりと、苦戦してばかりだったけど、今となっては

もう、あまり抵抗が無いように感じます。

本当、慣れって怖いよ。

：ていうか、シュバーレさんはともかく…美佐さんも居候することになったらしく、とてもにぎやかになりました。

しかし、うるさすぎるのもどうかと思います。

ああ…ぼくの休める時間がだんだん少なくなってる気が…ああ…あと、明日みんなでピクニックに行くことになりました。

いちおう、麗香さんと高橋さんと美佐さんとぼくがお弁当係になってるんだけど…美味しく作れるかな？

それと最後に、シュバーレさんに聞きたいことがあります。

毎日、ぼくが書いた日記をどこへ持っていてるんですか？

日記書けって言ってきたときも、報告するために日記借りるから、書いたら見せてねって言ってましたけど…

いったいなんの報告なんですか？

またこんど詳しく教えて下さい。

とっても気になりますから。

おわり。

第二十八章：今日は五月二十六日（金）（後書き）

毎回読んで下さってありがとうございます！

リリイです。

今回は、はじめちゃんの日記ということで書いたんですが、なんか変になっちゃった気がします。

……大丈夫かな……？

あと、はじめちゃんが日記を書いている理由ですが、今のところは、シュバーレさんが言った『報告』という言葉がカギになると思います。

あと、これからもちよくちよく日記が出てくるかもしれませんが、今まで通り、普通に読んであげてください。

次回はみんなでピクニックです！

頑張って書きますので、次回も読んでいただけると光栄です。

第二十九章：おはよー。今日はピクニック♪

チュンチュン

なんだろ？この鳴き声：すずめかな？

朝のチュンチュンという小鳥の鳴き声。

略して朝チュンで起きたぼくは、脳が半分寝ている(?)状態で、そんなことを考えながら布団からそもそもと抜け出す。

今の動きなら、ナメクジとか、有名なゾンビを倒すゲームのゾンビのほうがいい動きをするかもしれない。

そんなゾンビと化したぼくは、そもそもと布団から：

「……うーん……ぼめらにあんうー……」

謎の言葉を発した。

：なんだ！ぼめらにあんうーって！？ぼく、なに言ってるの?!：
もしかして、ポメラニアンのこと？犬？

「なにを言っているんだいはじめくん？」

「んうー……」

いつの間にか部屋に入ってきた美佐さんは、まだ、布団から出るこ
とができず、寝ているぼくをゆさゆさと揺さぶる。

：ぼくはなんて器用なんだろう。寝てるのに、思考回路は正常に働
いてるよ。

「はじめくん」

ゆさゆさ

「……………」

「では、失礼。」

：かばっ

「……………!!……んう！んう………ぱあっ！はあ……はあ……

はあ……み、美佐さん？死にますよ？鼻と口を同時にふさがれたら死
にますよ？エアーが！空気が！酸素がー！」

いきなり鼻と口をふさいできた美佐さん。

：おかげで、目が覚めましたよ。

「いや、すまない。それより今日は、『サタデイわくわくピクニックプロジェクト！』だよ。君と私はお弁当係。お弁当作らないと。」
なんだ、『サタデイわくわくピクニックプロジェクト！』って：わ
ざわざ名前つける意味あるの？ただ、ピクニック行くだけなのに：
それより、お弁当作らないと！

「あの、すみません。今何時ですか？」

「8時半だよ。たしか、集合は10時だったよね？」

8時半か：ちよつと寝過ぎたかも：

「あ、美佐さん。シュバーレさんは起きてますか？」

「いや、まだ寝てるよ。シュバーレは、お弁当ができてから起こそ
う。なにやら昨夜は、遅くまでゴソゴソしてたみたいだからな。」

「わかりました。じゃあ、着替えますから、先にキッチン行つとい
てもらえますか？」

「うむ。わかった。」

そして、部屋を出る美佐さん。

「あ、そうだー。はじめくーん！ちゃんと、かわいい服着なさいね
ー！」

「えっ？あ、はい」

美佐さんの言葉に、ぼくは反射的に答えてしまう。

それにしても美佐さん：かわいい服って言ったって：ぼくにどれ着
ろっての？

「うーん……」

どれに：いったいどれに：

「むむむむむ……」

クローゼットと睨めっこをしながら、このときぼくの中では、3分
ほどで終わりそうな会議が行われていた。

「よし、決めたっ」

ぼくの中の、脳内会議が出した結論は：……………肩ら辺にピンク
のラインが入っている真っ白なかわいらしいワンピース。

今日は暑いらしいし、たぶん問題はないでしょ！うん！

「ふんふんふう〜ん♪ふふふのふう〜ん♪」

クローゼットから真っ白のワンピース。略して、真ッピーを取り出し、謎の鼻歌を歌いながら、パジャマを脱いでいくぼく。

そして、鏡に映る自分の姿にうろたえながらも、真ッピーを着る。

「うん。似合ってる…のかな？なんか複雑…」

鏡に映るぼく…真ッピーを着ている姿は、だいぶ様になっている気がする。

ほかには、サラサラと肩まで伸びた髪が、なんだか大人っぽい感じを漂わす反面、自分でいっちゃなんだけど、なんだか幼い。顔が。

あれか、俗に言う童顔と言うやつですか？！…はぁ……

「はぁ…」

ここでため息をひとつ。

…さあて！お弁当作らなくっちゃ！

そしてぼくはキッチンへと向かった。

第三十章：シュバーレさんのお部屋。

「わああああああおはようございますうううううう！！！」

あまりの驚きに、なぜか挨拶をしてしまふぼく。

「わっ！こ、こちらこそおおおおおはようございまっすうううううう！！！」

ええ！返された？！なんだ！？いったいなにが起きた！？てゆうか、なんでシュバーレさんの部屋に女の子が！？

わけわかんないよー！

――30分前――

「さて、手始めに卵焼きでも焼まろうか！」

キッチンにやってきたぼくを見て、美佐さんが言った。

なんか、黄色いくまさんのプリントがされているかわいらしいエプロンまでしてやる気満々みたいだ。

「あ、卵焼きはぼくがしますよ。」

「そうかい？じゃあ頼むよ。…おっと！はじめくん！ダメじゃないか！」

「え？なにがですか？」

器に入っている美佐さんが溶いたであろう卵を持った瞬間、美佐さんが言った。

ダメって…なにが？ぼくは別に悪いことはしてないはずだけど…

「エプロンを着けないと！ほら、そこに用意してあるから、着て。むしろ着ろっ」

そう言って、机の上に丁寧にたたまれているエプロンを指差す。

たたまれているから形は分かんないけど、真っ白い綺麗なエプロンだ。そしてぼくは、言われたとおりそのエプロンに手を伸ばす。

「……………」

…訂正。ちよつとおかしい真つ白いエプロンだ。

無駄に袖とか裾とかがヒラヒラフリフリしている。

これじゃあまるで、危ないメイドさんだ。

いや、それだけならまだいい。

よく見ると、ヒラヒラフリフリしている付属品が、エプロンに包ま

れている…カチューシャ？

…本当に危ないメイドさんだ

「あの…美佐さん？なぜに…」

「お黙り。さあ、着なさい。拒否権はないのよ」

「いや、卵焼くのにカチューシャは…」

「お着けなさい。さあ、なにをしてるの？お着けなさい。」

怖いよ！美佐さん怖いよー！なんでそんなに目がマジなの？！おかしいよ！

その間に、手に包丁を持った美佐さんがぼくに詰め寄ってくる…いや、別に脅されてるわけじゃない。たまたま野菜切ってたから包丁持ってるだけだよ。

「ねえ、着けて。いいじゃない。かわいいんだからっ」

「いや、かわいいと言われてもですね…」

「じゃあ、おもしろいんだからっ。ねえ？ねえ？ねえ？」

「はいっ！わかりました着けます！だからねっ…そのねっ…包丁、下ろしてください。おねがいですから…」

クイクイツと手を動かし、包丁をキラキラさせる美佐さん。

うわっ！危ない！切れる！耳、切れるって！

「よし。着けなさい。」

「…はい」

カパッ

装備完了。

【防御力が5上がった】

ああ…朝からなにやってんだろぼく…

ぼくは真人間でいたかったのに…

「あら、やっぱり似合う」

「うう…じゃあ、卵、焼いていいですか…?」

「ああ。存分に焼きたまえ！私は他の料理を作るから」

「はい。おねがいします」

とりあえず美佐さんに他の料理をまかせ、ぼくは卵焼きを作ることにした。

よし！まずはフライパンを出さなきゃ！

ぼくは、卵焼き用(?)の四角いフライパンを出して、火にかけた。そして、フライパンが温まったのを確認し、油を注ぐ。

適当にフライパンに油を馴染ませ、卵を少しずつ少しずつ流し込む。ジュ

卵の焼ける音とともに、卵焼きのいい匂いがする。

適度に焼けた卵をクルクルと巻き、また卵を流し込む。

その動作を何度か繰り返すと、立派な卵焼きの完成！

そして、完成した卵焼きを、お皿へと移した。

「できたあ！」

うん！我ながら、綺麗な卵焼きだ！うん。

「おお！はじめくん。上手いもんだねー。これならお嫁にいつでも安心だ。ははは！」

「…笑えませんよその冗談…」

「いや、すまないね。つい…」

ついて…酷いなあ…

ていうか、お嫁にいくきなんてさらさらないですよ。

「あ、そうだ！はじめくん。シュバーレを起こしてきてくれないか？」

「えっ？お弁当できてからじゃなかったんですか？」

「いや、なに、あいつにも手伝ってもらおうと思ってね。というわけで、頼むよ」

「はい。わかりました」

…で、今に至っていると…

「あ、あの…」

「あ、はい」

申し訳なさそうに口を開く女の子。

ていうか、誰なの？

「アタシ、エルって言います。あなたが、はじめちゃんですか？」

「う、うん。そうだけど…」

「ず、ずいぶんかわいらしい趣味をお持ちのようで…」

…いや、待てえい！

まず、かわいらしい趣味っていったい……………ああ！

「ち、違います！間違えました！人違いです！私は、はじめの従姉妹のペサ子です！よく似てるって言われますけど、けっしてはじめではありません！」

いやだ！第一印象が、『変な趣味の危ない人』なんて、絶対にいやだ！

なんとかして誤魔化さないと！

「い、いや…だって最初にはじめて…」

「ち、違うの！あれはねっ！ノリでねっ！言っちゃったの！」

「は、はあ…では、はじめさんはどこにいますか？」

「ちよつと野暮用でいないの！もうすぐ帰って来ると思いますから！」

「は、はい！」

「じゃあ、この部屋から出ないで下さいね！帰ったらこの部屋に来るように言いますから！それではー！」

「ああ！ちよつとペサ子さーん！」

「さようならー！」

ガチャッ！バタン！

ダダダダダダダダ！

「美佐さん！美佐さん！お部屋に女の子がー！！」

二階にあるシュバーレさんの部屋を勢いよく飛び出たぼくは、叫び

ながらキッチンへ向かった。

「み、美佐さん！女の子が！シュバーレさんの部屋に女の子がいます！」

「なにい！！シュバーレめ！はじめくんと言う者がありながらなんて奴だ！よし！行くぞはじめくん！」

「はい！ぼくは関係ありません！が、シュバーレさんは健全な高校男子の敵です！女の子とお部屋で一緒に一夜を過ごすなんて許せません！行きましょう！」

「私に続けはじめくん！」

「はいっ！」

そしてぼくは再びシュバーレさんの部屋へ向かった。

…あ、その前にエプロンとカチューシャ取らなきゃ！

第三十一章：アタシはタコさんウインナー

シュバーレさんの部屋の前に来たぼくたちは、心の準備のため、少し休憩をしていた。

「よし。行くぞはじめくん。」

「…はい。」

そう言うとき美佐さんは指でカウントダウンを始めた。

3…2…1…って早いよ！！普通10からでしょ？！

「美佐さん？ちょっと早いで…」

「くうおら！シュバーレええ！！」

ガツチャーン！！！！

ぼくを無視してシュバーレさんの部屋のドアを蹴り飛ばし、部屋に入る美佐さん。

しかも、なぜか満面の笑みで手の骨をコキコキペキパキと鳴らしている。うわ…楽しそう。

「ひんっ！！…あっ！ペサ子さん！？」

ドアを蹴り飛ばした音と美佐さんの声に怯えながらも、ぼくの顔を見て言うエルちゃんと言う娘。

「あ、あはは…ぼくははじめです。ペサ子じゃありません。ペサ子は過去へ帰りました。」

そう、ペサ子は過去に

「そうなの？まあいいや。はじめちゃん！これ、シュバーレに渡しとけて言われたから」

よかった！まるで眼中に無いって感じた！やったー！

…うう…でも、なぜ悲しいの？なんかすごく悲しい…

そんなことはお構いなしに、サツと部屋に置いてあったピンク色のかわいらしい鞆から、なにかを取り出すエルちゃん。

えっ…これって…ぼくの日記？

「なんでエルちゃんがぼくの日記を？」

「そりゃあアタシは」

「あんたってばエル!!! ひっさすぶりねえ〜! お元気〜? おつきくなっただねー! 私、分からなかったわさ!」

「うわっ! びっくりした!」

「ちょっと... いや、かなり美佐さんテンション高くない?

キャラなんか完璧に違うし!

「うわっ! 美佐さん!? なにしてんのこんなところで!?!」

「そっち!? 突っ込むところそっち!? キャラじゃないの!?!」

「...もしかして美佐さん。前はこんなキャラだったのか...

「見ての通り居候よ♪」

「いや、見ただけじゃ分かんないし...

「そうなんですか!?! いいなー! アタシも居候したいなー! ホームステイ! ホームステイ!」

「いや、居候とホームステイはちよつと違う気が...

「はじめちゃん! アタシも居候していい?」

「ダメです。それよりまず、エルちゃん。君って何者なの? あと、シュバーレさんは?」

「居候は? 居候は? 居候は? 居候は?」

「もうっ! わかったよ! いいから! してもいいから!」

「サンキュ! えっと、シュバーレは天界に行ってるの。あと、アタシは...」

「アタシは?」

「天使です!」

「なにいいいい!!!」

「て、天使ってこの娘バカ?... いや、神様いるなら天使もいて普通か! むしろいいないとおかしいよね! 天使。」

「でね、エルって名前はエンジェルを略してエルになったのよ! はい! これで少し賢くなった!」

「うわっ... この娘テンション高すぎだよ...

「その天使さんがなぜ、ぼくの日記を?」

「あゝ：返しに来たの。昨日の報告が終わったから」

昨日の報告？：あ、日記を見せたってこと？

…：いったい誰に：

「で、シュバーレがちょっと用があるって言ったから、代わりに渡しに来たわけ」

「へー：事情はだいたい把握したけどさ、報告っていったい誰にするの？」

「シュバーレのパパ。つまり、神様です。はじめちゃんは女の子の体の男の子と言う特別な存在ですから、いちおうどんな精神状態とか、どんな生活かとかの調査だと思うよ。」

うわっ：聞かないほうがよかった：これじゃあまるで、保護される動物だよ。

「そ、そうなんだ：もしかして、まだなんかする気なの…？」

「：だ、大丈夫だよはじめちゃん！あいては神様なんだから！悪いようにはされないよ！だから気にしないで」

「う、うん。」

でも、神様ってシュバーレさんのお父さんなんだよね…：なんか心配…

「そうだエル！朝ご飯食べてく？てゆーか、ピクニック行く？」

「行食う！」

あ、美佐さん。キャラ戻らないんだ

「オツケ！なに食いたい？なに食いたい？」

「アタシはタコさんウインナー！！」

タコさん！？タコさんにする意味はあるの！？

「オツケー！お弁当のおかずにあったはずよ！私についてきなさい！」

「りょーかい！」

そして、タコさんと連呼しながら部屋を出て行く2人。

…：ああ：いったいどうなるの：ピクニック…と、お弁当…

第三十二章：神様帰宅

「うーん。ご飯オイスィー！あ、卵焼きも最高！」

「すごい！このウインナータコさんにしたことにより、旨味が増してる！」

なにを言ってるんだこの人達は：

シュバーレさんの部屋を出て、キッチンに向かった美佐さんとエルちゃん。

ぼくがキッチンに着いた頃には、もう、これでもかとお弁当を食い散らかしていた。

ぼくが日記を部屋に置きに行かなければこんなことには：って、お弁当はどうなるの！？

「あ、はじめくん！一緒に食べよ！」

「：いや、美佐さん？お、お弁当は？」

「……………」

ぼくがそう言うと、困った顔をして黙る美佐さん。

いや、分かるよ。食べたことくらいさ、なのになので、困ったわ：どうしましょ？私ったら食いしん坊ね♪って顔するのはやめてくださいよ：意味が分かりません。

「：食べちゃった♪エヘ♪」

「は、ははは：ですよね：」

ああ：どうしよう？作り直すにしても、もう9時半過ぎてるし、時間足らないよ：

「はじめちゃん！お弁当なら大丈夫よ！シュバーレに頼めば一発ですから！」

「いや、エルちゃん？その肝心のシュバーレさんがまだ帰って来ないじゃないですか」

「大丈夫大丈夫！はじめちゃんが祈ればすぐ帰って来るはずよ！」

「えっ？なんでぼくが？」

「だってはじめちゃんはお気に入りでから！」

そう、笑顔で言うエルちゃん。

いや、お気に入りに入って…ぼくはおもちゃか！！

それより、なんでシュバーレさん天界に行ってるんだろ？今日のピクニックを提案したのはシュバーレさんなのに

ああ…シュバーレさん帰って来なかったら、この2人はぼくが相手しなきゃいけないの？ぜったい体が保たないよ！

もう！シュバーレさん早く帰ってきてよー！

『呼んだ？』

「えっ？」

「どうしたのははじめくん？」

「い、いや！なんでもないですよー」

…あれ？さっきシュバーレさんの声がしたような…

『どうしたのははじめちゃん？』

あっ！また…なんだろう？心に響いてくるような声…いったいどこにいるの？

でも、あたりを見渡してもシュバーレさんの姿はない。

帰って来てるんじゃないの？

『ごめんごめん。まだ天界にいるんだ。今からけるからさ』

あっ！まただ！

…でもこの感じ…前にも一度あったような…

『帰ってから教えてあげるよ』

えっ？

――5分後――

「たっただいまあー！」

「おう。シュバーレ！お前も飲むか？野菜ジュース」

「いらん。それより、はじめちゃんは？」

「部屋にいると思うぞー」

「サンキュ！」

トタタタタ……コンコンッ！

「はじめちゃん？」

「……………」

「入るよ？」

ガチャ…

「えっ！？シュ、シュバーレさん？！の、ノックくらいしてくださいよ！」

「いや、したけど…」

オレが部屋に入ると、なぜかあたふたしているはじめちゃん。

…えっ？つーかなぜにオレ視点？

…まあ、細かいことはいいや！

ドアの開く音でオレの方を向いたはじめちゃん。

ああ…顔、赤くしちゃって…かわいらしいなあ。

さっきまで音楽を聞いていたのか、はじめちゃんの耳からタラリタラリとイヤホンのコードが垂れている。

だからノックに気付かなかったのか。

あと、机の上には急いで置いたであろうシャーペンと消しゴムが転がっている。

はは…ん…なにか書いてたのか…まさかオレへのラブレター！？

帰ってきたオレにラブレターを渡して『うふふ♪びっくりしたあ？

はい。好きです。あの…言葉でどう言えばいいのか分からなくて

…これが私の気持ちです！』みたいな！ハハハ！

はじめちゃんったら健気ね〜

はじめちゃんが望むなら、オレはいつだってオツケーなのにー

「…なに笑ってるんですか？」

「い、いや！別にー」

「そうですか？」

「もう、全然！それより、はじめちゃんこそ、何かあるんじゃない？」

「あ、また心読んだんですか？なら話は早いですね！」

「おっと！心なんて読んじやいないのに…はじめちゃんったらまさか本当に！？」

「さっきの声のこと教えてください。あと、天界へ行ってた理由もー！」

「あ、ああ。あれね！声ね…」

「はい。声です。前にもシュバーレさん意外の人の声を聞いたことがあるんですけど、シュバーレさんと何か関係あるんですか？」

「は、はは…ですよねですよね！やっぱ無理ですよねーラブレターなんて！はじめちゃんがラブレターなんて…夢の見すぎかな？オレ神様なのになー…（息子だけど）」

…

…

…

「ええーい！クヨクヨしてても始まらない！とりあえず、次回へ続く！またなっ！」

第三十三章：説明講演？

「はい、ちゅうもく！」

「いや：注目って言われてもですね：この部屋には、ぼくとシュバーレさんしか居ませんよ？」

いきなり、ぼくの机の上に置いてあった30cmものさしで、机をパシーンと叩き、叫ぶシュバーレさん。

叩いた音が、虚しく響く。

「：よし！只今より、第一回説明講演を始める！」

なんだ！第一回説明講演って！第一回ってことは二、三とかもあるってこと？

そんな疑問形のぼくをよそに、再び喋り出すシュバーレさん。

「では始めに、今日オレが天界へ行っていた理由から説明しよう！」

「いや、ぼくは先に声の正体のほうが：」

「シャラップ！：では、始めようか」

「：お願いします」

「うむ。まあ、いつもどおりはじめちゃんの日記を見て、オレは親父に報告をしに行ったんだ。」

「そのことならエルちゃんから聞きました。女の子の体の男の子のぼくが、どんな生活してるか、とか、どんな精神状態か、とかを調べてるんですね？」

「ああ。そんなことろだ。：で、ちょっと親父から気になる話を聞いてな：」

「き、気になる話ってなんですか？」

「それは：」

静まり返るぼくの部屋。

そして、真剣な顔のシュバーレさん。

こんなシュバーレさんを見るのは、初めてかもしれない。

「美佐のことなんだが：エルがこの家に来たとき変わったところ

はなかったか？ほら、キャラとか…」

「えっ？あ、はい。テンションが異常なまでに高くなりましたけど…」

確かに美佐さんのテンションがおかしかったのは事実だけど…それがなにか関係あるのかな？

久しぶりに友達に会って嬉しかっただけだと思うけど…

「やっぱりな…」

少し困った顔をして、頭を抱えるシュバーレさん。

そして、なにか考えたのか、少し間をあけて口を開く。

「…まあ、なんとかなかっか…」

「えっ？なにがですか？」

「…はい！次、声の説明な」

「ねえってばあ…」

ぼくを無視して話を進めるシュバーレさん。

なに！？いったい美佐さんがどうしたの！？

「ねえ？シュバーレさん？聞いてます？美佐さんがどうしたんですか？」

「…ごめん。はじめちゃん。そのうち話す。悪いけど、それまでは待っててくれないか？」

いつもとは正反対というか、とても怖い顔をしているシュバーレさん。

…もしかして…怒ってるの…？

「は、はい。…わかりました。無理言っでごめんなさい…」

「いや、別に。…じゃあ、改めて声の説明いこっか！」

再びいつもどおりのテンションで話し出すシュバーレさん。

顔は笑顔なんだけど、目は笑ってないように見える。

「えーっと…まず、どうやって声を伝えたかだけど…オレが心を読む力持ってるのは知ってるよね。その力で、逆にオレの心の声をはじめちゃんに送ったみたいない感じ…簡単言うと、心を読む力で、心を読ませたってこと」

「うーん：なんとなく分かりました。」

：いや、ちょっと待てよ：なら、前に聞こえた声は誰なの？
あきらかにシュバーレさんの声じゃなかったけど：

「あの、その力ってシュバーレさん以外にも使える人いますか？」

「ああ：この力は神族なら誰でも使えるよ。」

さらっと答えるシュバーレさん。

えーっと：神族って、神様のことだね？

もし、神様がぼくに言ったんなら、神様の目的はなんなの？

ぼくはシュバーレさん以外の神様には会ったことないのに：

「：あ、そういえば、親父がはじめちゃんに会いたいわって言ったんだけど：どうする？」

「えっ！？」

シュバーレさんのお父さんがなんでぼくに？

「まあ、嫌ならいいって言ってたけどさ」

「い、嫌だなんてそんな！」

「そう？じゃあ、今夜、日記が書いたらオレの部屋に来てちょーだい。天界に連れてったげるからさ」

「わかりました。………ってええ！？」

机に置いてある時計の長い針が10。短い針が9を示している。
もう9時50分?! 集合まであと10分しかないじゃん!

「しゅ、シュバーレさん! 早くピクニックの準備を」

「あ! 忘れてた！」

マジですか!?

第三十四章：行こうか

「はじめく〜ん、シュバーレ〜。そろそろピクニックに行こうではないか〜」

ぼくが部屋でピクニックの準備をしていると、下から美佐さんの声が聞こえてきた。

さっき9時50分だったから今は55分くらいかな？さすがにそろそろ行かないとまずいかもしれない

「は〜い。今行きま〜す」

ぼくは、女の子になったときにシュバーレさんが出してくれた白くて小さな鞆に、ケータイやお財布やらを入れて部屋を出た。

そういえば、お弁当…どうなるんだろ？エルちゃんが、シュバーレさんが出してくれるとかなんとか言ってたけど…大丈夫なのかな？

「は・じ・め・ちゃん！」

「うひゃっ！」

突然、背後から抱き付いてきたシュバーレさん。

なに！？なにが目的なの？！危うく階段から落ちるところでしたよ！

「あっ！はじめちゃんその鞆使ってくれてるのね！似合ってるよ！すんばらしいよ！オレ、うれすいーよ」

「あ、はい。この鞆、結構使いやすくて」

この鞆。白くて小さな普通の鞆。

本当に普通の鞆。

…いや、ごめんなさい。ウソです。

シュバーレさんいわく『エンジェル使用』の鞆らしいです。

エンジェル使用って…なに？野球のグローブとかである『松坂使用のグローブ』みたいな感じなのかな？

小さくて、これといってとくに派手なわけでもないく、真ん中ら辺に『ANGEL』ってプレートが付いてるだけの鞆で、『ANGEL』の文字以外からは全く天使らしきなんか伝わってこない。

でも、エンジェル使用だから知らないけど、シンプルなデザインで軽くて持ち運び便利だから、ぼく自身結構気に入ってたりする。

「そうだろ！いやあ、分かる人は分かるんだね、エンジェル使用商品の素晴らしさが」

そう言っ、はははと笑いながら階段を下りていくシュバーレさん。その後ろについて行くようにして、ぼくも階段を下りていく。階段を下りると、玄関に美佐さんとエルちゃんが待っていた。

「お、やっと下りて来たかはじめくん。」

いかにも、待ち兼ねたように感じてぼくに言う美佐さん。

「はじめちゃん。早く行きましょう！」

エルちゃんも待ち兼ねたように感じた。

「うん。じゃあ行こうか！」

ぼくはドアに手をかけた。

第三十四章：行こうか（後書き）

どうも、リリイです。

えーっと…すみません。

なんか今回笑いがなかったかと思います。いや、今回だけでなく、全然ないかもしれないですけど…

コメディーなのに、読んで下さってる人に申し訳ない。

これからも頑張って、読者の皆さまを楽しませることができると話を書きたいと思います！

今回も読んで下さってありがとうございます。

次回も読んで下さると光栄です。

それでは、リリイでしたー

雲一つ無い青空の下。たくさんの樹々が、光を求めて上へ上へと背を伸ばしている。

そんな雲一つ無い青空は、ぼくたちを歓迎するかのように暖かい日差しを振りまいている。

今ぼくたちは、清流町の中で最も高い山、流水山に来ています。

流水山には、ミネラル豊富な湧き水が湧いていて、『流水山な天然水』として、通信販売やらなんやらで結構有名で、美味しいらしいです。

らしいと言うのは、ぼく自身飲んだことがないからで、一回コンビニに売ってあったのを見たときに飲んでみようかなって思ったけど、他の某清涼飲料水の魅力に負けて結局飲まないまま今に至っているわけです。

それで今日は、流水山の『天然の湧き水です。ご自由にお飲み下さい。』がある地点までテクテクと歩いて行って、『流水山な天然水』を飲んで、お弁当食べて帰るという非常に地味な企画になっています。あゝ『流水山な天然水』ってどんな感じなんだろう？楽しみだなあゝ

「さあて！んじゃあ『流水山な天然水』目指して頑張っぜー！」

そう言って、拳を突き上げるシュバーレさん。

その周りには、めんどくさそうにしてるけど、意外とこういうのが嫌いじゃない高ちゃん。

サワヤカナ笑顔でやる気満々な亮平。

しゃがみ込んで楽しそうに野草を見ている麗香さん。

お弁当つまみ食いしてる高橋さん。（結局ぼくと美佐さんはお弁当を持って来なかったけど、麗香さんと高橋さんがたくさん作って来てくれてたから、シュバーレさんに頼んで出してもらおう必要もなく

なった。」

近くの川を見てる美佐さん。

そして、ぼくの袖に掴まってるエルちゃん。…なんで？

あと、カメラ片手に、天使っ娘！天使っ娘！って言ってる前田。

…なんでエルちゃんがぼくの袖に掴まって隠れるか理由が分かった気がする。確かにこれは危険だ。

そんないつものメンバー＋αで今日はピクニックをおっはじめようというわけです。

「は、はじめちゃん。…この変な人だれ？なんか怖いよー」

ぼくの袖をグイグイ引っ張りながら言うエルちゃん。

なんだかなり前田に怯えてるみたい。

「あ、まだ紹介してなかったっけ？この人はね…」

「前田晃寛だ！よろしく天使ちゃん！」

気持ち悪い笑顔を浮かべて、エルちゃんの手をとる前田。

「きゃあああああああああああああ！！！」

さすがに初対面の人には前田はキツイのか、叫ぶエルちゃん。

前田の容姿は…うん。言わないでおこう。

とにかく、初対面の人にはキツイみたいだ。なんかカメラとか持ってるし…

そう考えると、麗香さんや高橋さんや美佐さんはかなりすごいのかもしれない。

「何故！？何故叫ぶのだ！天使ちゃん！シュバーレから聞いたぞ！天使なんだろう？」

「きゃあああああ！寄らないで下さい！目え合わせないで下さい！手

え握らないで下さいiiiiiiii!! 助けてはじめちゃん!!」
「うわっ! え、エルちゃんとりあえず落ち着いて! 大丈夫だから! ぼくが前田から守ってあげるから! ね、大丈夫だから。えっ?! 何で泣くのおく...?」

ぼくにしがみついて泣きじゃくるエルちゃん。

なんで!? どうして!? 確かに怖いよ。ぼくも前田は怖いさ。泣くほど怖いかもしれないけど...ほら、泣くのはちよつと...さすがに前田もかわいそうだよ...

「ふっ...いいんだ。いいんだ。俺は写真さえ撮らせてくれれば。萌えるような笑顔を浮かべてくれていればそれで...

「これ以上エルちゃんを怖がらす気かああああ!」

ゴスッ!

鈍い音とともに、ぼくの拳が前田のお腹に直撃。

どう? 普段から腹筋も走り込みも縄跳びもしてない君には効くでしょ? ボディー。

どこぞのボクシング漫画に出てきたようなセリフが、ぼくの頭をよぎる。あゝ...でもこれは絶対効く。

「くっ...はじめ...今日のパンチは...キテる...ぜ...」

うん。自分でも怖いくらいに。

そう言って片膝を着いて苦しがる前田。

ごめん前田。これ以外方法はなかったんだよ。

「んー...はじめちゃん?」

「あ、はい。なんですか?」

申し訳なさそうにぼくに聞いてくるシュバーレさん。

「高広、先行っちゃったよ？」

「うそっ！な、なんで？！」

「長くなりそうだから俺は先に行く。そのうるさい奴黙らせたら
はじめにそう言っといてくれ。って言い残して高広は山の中へ in
the sky！」

いや、飛ばないし。

「それに、紗香ちゃんと美佐も着いて行ったよ。つーことで、高広
をさっさと追っかけようぜ！」

「はい！わかりました！てことだから、麗香さん、亮平、前田、エ
ルちゃん。高ちゃん追っかけるよー」

「「「おー！」」」

そしてぼくらは、高ちゃんを追っかける&『流水山な天然水』を飲
むために流水山の中へ入って行った。

：エルちゃんが泣きながらしがみついた状態で：

第三十五章：サタデイわくわくピクニックプロジェクト in 流水山！前編（後書

え〜っと…どうも、毎度読んで下さってありがとうございます。リ
リイです。

やっと始まりました！ピクニック編！ピクニックですよ！ピクニッ
ク！

まあ、はじめちゃんが言っていたように、水飲んで帰るっていう地
味な企画ですが。

前編ということで、後編があります。

いろいろと都合がありまして、早く水を飲ませて帰らしたいのです
が、そうも言ってられません。

とりあえず、頑張りたいと思います。

今回も後書き、本編ともに読んで下さってありがとうございました！
次回も読んで下さると光栄です。

では、リリイでしたー

第三十六章：サタデイわくわくピクニックプロジェクトin流水山！後編

結構歩きやすく整えられている道。辺り一面に生い茂る木々は太陽の光を遮り、環境問題のひとつ、地球温暖化などまったく感じさせないほど涼しくなっている。

高ちゃんを追いかけて歩くこと約30分。

結構歩いた筈なのに、一向に高ちゃんたちの気配が感じられないのはなぜだろう？

ぼくたちが歩くの遅いのかな？それとも、高ちゃんたちが速すぎるのか？

そろそろ追いついてもいい筈なのに…

「なあ春崎。」

「ん？どうしたの亮平？」

ぼくの横に並んで歩いていた亮平が言う。

それにしても、亮平の横顔、かっこいいなあ…って言うか、背え高いなあ。絶対180cm以上あるよ…ぼくも亮平くらいまで背え高くなりたかったな。亮平、バスケでシュート決めたら女の子にきや～きや～言われるんだろ～うなあ…ぼくも活躍したかったな…まあそれは今となっては無理な相談で。

いくら頑張ってもきや～きや～言うか、女の子としてしか活躍できないんですね。今は。はあ…

「あのだ、早く高広に追いつくために、もうちょい速く歩こうぜ。いや、むしろ走ろうぜ！」

サワヤカナ笑顔で言う亮平。いや、実にサワヤカサワヤカしてます。サワヤカ3組よりサワヤカしてるかもしれないです。

「そうだね。うん。走ろっか！ね、みんな」

そう言ってぼくは、亮平とともに後ろを歩いている四人にサワヤカな笑顔を送る。

亮平なんてたぶん、今世紀一番のサワヤカさじゃないかな？

「う……うおお！うおおおお！！萌える！サワヤカな笑顔の美少女萌える！真っ白なワンピースをヒラヒラはためかせて歩くその姿は、一見、上品なお嬢様を思わせる。が！しかし、振り返るや刹那！その姿なのにも関わらず、服を気にして歩くとか、汚れるから嫌とか全くそんなくだらない感情が無く。仕草、笑顔はもちろん。歩くその姿さえも愛らしく、気品漂うなどといったお嬢様など微塵も感じさせない。まさに健康美溢れるサワヤカ美少女……ぐふお！！」
「バカあああ！！！！」

本日二度目のボディー。

どう？普段から腹筋も走り込みも縄跳びも……以下省略。

その、本日二度目のボディーを受けた前田は苦しそうに……

パシャッ！パシャッ！パシャッ！

写真を撮っていた。……って、なぜ？なぜそうまでして撮りたいの？もしかして、ぼく、悪いことした？世間一般の常識が分からなくなってきたよお……

「は、はじめ……もうちょっと脚を開いて……」

「あ、うん。……って、アホかああああ！なに言ってるの！？大丈夫なら早く立ってよ！こんなことしてるから高ちゃんに追いつけないんだよ！ほら、早く！」

「それは…無理だ…」

「なんで?!」

残念そうに言う前田。

なに?なんで無理なの?

「腹をやっちゃった。もう先には進めねえ」

「…どおゆうこと?」

相変わらず苦しそうにしている前田。

なんかかなり汗をかいているみたい。大丈夫かな?

「さっきのはじめのボディーが効いたのか、昨日食べた朝ご飯達が、こんにちはしてるんだ…だが、ここで俺がこんにちはをして、さようならをするわけにはいかない…俺にもプライドがある。こんなところでさようならをするわけにはいかないんだ…まだ朝ご飯達にはいてももらわないと困るんだ…」

前田…お前、漢だよ。

女の子がいるから気を使ってるんだね…

要するに、今前田を激しい便意が襲ってるみたいです。

「ごめん前田…ぼくがお腹殴ったりしたから…本当にごめんね…」

「ふっ…気にするなはじめ…そのかわりに…ぐはっ」

「な、ななな、何してるんですかシュバーレさん!?!」

「いやあ…こういうのを見ると押したくなるんだよね…グイグイって」

前田に謝るぼくをよそに、グイグイと前田のお腹を抑えるシュバーレさん。

うわあ…これはキツイ！絶っつ対キツイ！

さよなら前田…さよなら前田の昨日の朝ご飯…

「…まだキツイか？」

シュバーレさんが前田のお腹を抑えながら言った。

まだキツイってどういうこと？…もしかして、出しちゃったの…？

「ちよつとキツイな…でも、さっきより楽になった。これなら動けるぞ」

「そうだろう？」

そう言って立ち上がる前田。えっ？一体なにが起きたって言うの？前田の精神力が便意を押さえ込んだって言うの？！そうだったらすごいよ前田！

「おいおい、あまりはしゃぐなよ前田。オレの力で便意をちよつと抑えただけだから、動き回ると元に戻るぞ」

「うっ…そんなこともつと早く言えよな…」

カメラを構えてエルちゃんの方を向いたその瞬間、再び便意がきたのか、お腹を抑えてしゃがみ込む前田。

ドンマイとしか言い様が無い。…あ、そういえば！

「ねえ、前田…」

「な、なんだ…はじめ…」

「えっと…その…ティッシュあるけど？」

「………ああ。助かる。後から追いかけるから先に行っててくれ…」

「…わかった。行こうみんな。…あ、前田。ちゃんと手洗うんだよ。」

そしてぼくたちは再び歩き出した。後ろを振り向かないようにして。

※※※※※

適度に歩きやすく整えられた道を歩くこと約50分。

最初は緩やかな坂だったのが、階段へと変わっている。

さっきからずっと高広君のペースで歩いているからか、私や紗香の歩く速さが落ちてきている気がする。だが、さすが男の子。さすが野球部と言ったところか、高広君はなにくわぬ顔でスタスタと私達の前を歩いている。

高広君が野球部と言えど、男と女にこれほど体力の差があるとはな……。高広君には悪いが、私と紗香はそろそろ休憩をとった方がいいかもしれない。

「ちょっと、高広君。」

私は前を歩く高広君に声をかけた。

「…なんだ？」

歩く速さを落として、振り返らずに返事をする高広君。…なんだ？
照れ屋なのか？

そのまま歩きながら私は話を続ける。

「頼みがあるだ。私自身、まだ行けるとは思うのだが、どうも身体が疲れてきているみたいなのだよ。歩く速さも落ちてきているみたいだ。紗香も疲れているようだし、はじめくん達を待つついでに休憩をしたいのだが…いいかな？」

私は立ち止まり、高広君の返事を待つ。

まあ…彼のことだ。答えは決まっているだろうが。

「…わかった。じゃあこの辺で休憩しよう。ちょうど座る場所もあるみたいだからな。」

階段を20段ほど上がったところにある少し広い場所で、私達は休憩する事にした。

そこには、この山。流水山のマップや、休憩するために作られたであろうベンチがあった。

「はふう…疲れたあ…」

ベンチに座り、紗香が言った。なんだか大きな荷物を持っているようだ。

よくここまで頑張れたものだ。これは疲れて当然だ。

「ねえ、高広君。水飲み場ってまだまだかかるの？私もう疲れちゃったよ」

大きな荷物を置いて、高広君に聞く紗香。
なんだか不安そうだ。

「いや、この階段を上がったところにある。…って書いてあるぞ。」

流水山のマップを見ながら言う高広君。

この階段を上がったところなら、あと1分もあれば行ける距離だな。見たところ階段はあと10段ほどだろう。

「それより、ふたりとも汗かいただろ？ちゃんと水分補給しとけよ。」

高広君が某スポーツ飲料水を飲みながら言う。
準備がいいな。さすがは高広君だ。

「あれ？谷本さんは飲まないんですか？」

そう言いながら、大きな荷物の中からペットボトルに入ったお茶を出し、美味しそうにグビグビと飲む紗香。

：うむう：私としたことが、飲み物を忘れてしまったとは情けない：

「なんだ、持って来てないのか？」

呆れたように聞く高広君。

「うむ：どうやら鞆に入れ忘れてたらしい。今頃は、はじめくんの家の冷蔵庫の中で存分に冷えているだろうな。私のポ○リ。」

「：そうか：じゃあしかたない。俺、3本持って来てるから1本やるよ。」

そう言って、リュックサックから某スポーツ飲料水：改め、アク○リアスを出し、私に渡す高広君。：優しいな：頼れる兄貴といったところか。

「すまない。助かるよ。」

「：いや。」

私はアク○リアスのフタを開けた。パキッ、と新品のフタを開けたときの音がする。

そしてそのまま、飲み口を口へと運ぶ。

ゴクゴク。

汗をかいた私の中に染み込んでいくアク○リアス。
いや、まさに生き返るようだ。

「あの、高広君。」

「なんだ？」

「いや、その…あ、ありがとう…な。」

「……………」

…口をパクパクさせている高広君。なんで？とてもいいリアクショ
ンなんだが…なんで？…あ、顔が赤くなってる…。珍しく私があり
がとうを言っただけなのに…やはり照れ屋なのか？

「おいおいおい！熱いねえおふたりさん！太陽も真っ青だぜ？」

「バカ、そんなのではない！アク○リアスをもらったお礼を言って
いただけだ！」

「照れるな照れるな。」

突如現れたシュバーレ。

もう来たのか。予想より速かったな。

「あゝ…疲れたあゝ…やっと追いつきましたよお。」

「本当。疲れましたわ…。」

「アタシお腹空いた〜！」

はじめくんに麝香にエル…ん？前田がいないような…

「そういえばシュバーレ。前田の姿が見当たらないが…。」

「なに、じきに来るさ。それより、水は？」

「この階段が上がったところだ。」

「オツケ！行くぞみんなー！」

ふっ…このメンバーでいると何をしてても楽しいな。

「美佐さーん。早く早くー！」

「ああ。今行くよ。」

第三十六章：サタデイわくわくピクニックプロジェクトin流水山！後編（後書

どうも、リリイです！

今回も最後まで読んで下さってありがとうございます！

えーっと：終わり方がなんか微妙な気がします。そこんところは、うん。まあ：はい。すみません：。

いちおう次回ははじめちゃんの日記の予定ですので、『流水山な天然水』はどうだった？とか、お弁当はどうだった？とか、書きたいと思います。

それでは、今回も本編、後書きを読んで下さってありがとうございます。ました。

次回も読んで下さると光栄です。

リリイでしたー

第三十七章：今日はピクニックでした。

五月二十七日（土曜日）

今日は、いつものメンバー十人天界から来た天使のエルちゃんといっしょにピクニックへ行きました。

なんか美佐さんに、

「かわいい服を着なさいねー」

とか言われて、ぼくなりについていいんじゃないかな？って思った真っ白なワンピースを着て行きました。

いや、いいと思ったんですけどね…すっごくスースーするんですよ。あれ。まあ…しかたないですけど…。

行った場所は、流水山でした。

流水山には、『流水山な天然水』という湧き水が湧いていて、一回飲んでみたいなくっと思っていたので、この際飲んでやろうということになって、水飲み場があるところまで歩いて行きました。

飲んでみてひとこと。

よく分からないけど、なんかさっぱりしてるっていうか…なんていうか…水道水にある臭み（？）がなかった気がします。とっても冷たくて美味しかったです！また飲みたいです。

まあ…実際、清流町のスーパーやコンビニに行けばいつでも買って飲めるんだけど…：500ミリリットルで200円。2リットルで500円は高いと思います。

水なんだし、500ミリリットル120円。2リットルで250円くらいでいいんじゃないかな…？

その後、麗香さんと高橋さんが作ってくれたお弁当を食べまし

た。

もう、すごい和風！煮物やら焼き魚やらなんらたくさんおかずがあつて、しかも全部手作り。

デザートに蕨餅があつたのは本当にびっくりしたなあ。

また今度機会があつたら、ふたりに料理習っちゃおうかな…？

…今後のために…。

あと、なんか今晚天界へ行くことになりました。

詳しいことはよく分かんないんだけど、シュバーレさんのお父さんがぼくに会いたいだとかなんとかって、シュバーレさんが言っていました。

シュバーレさんのお父さんって本当の神様だよね…いったいなに用だろう？

まさに、神のみぞ知ります。

おわり。

第三十七章：今日はピクニックでした。（後書き）

どうも、リリィです。

今回も読んで下さってありがとうございます。

次回は天界に行きます。

今度は入りますよ！シュバーレさん家に！

えっと…なるべく面白く思ってもらえるように、頑張って書きたい
と思います。

今回も、後書き、本編ともに読んで下さってありがとうございます
た！

次回も読んで下さると光栄です。

では、リリィでしたー

第三十八章：牛乳

今は…えっと…午後8時過ぎ。

ぼくは女の子になってから日課となった日記を書いていた。

「…よし。今日の分おーわりっ！」

そう言ってぼくは、パタム。と、日記帳を閉じた。

もう、晩ご飯は食べたし日記は書いたし、今日は宿題無いし…あと、なんかすることあったっけ？うーん…。

ガチャッ！

「おっじゃましーすう！」

ぼくが考えていると、突然部屋に入って来たエルちゃん。元気だなあ…夜になったらからテンション高いのかな？この娘。それとも前田がいなくなったから？泣くほど怖がってたし…。それより何の用だろう？

「はじめちゃんはじめちゃん！いっしょにお風呂入ろー！お風呂っ！」

あっ…お風呂がまだだったんだ…。

「えーっと…ダメッ。」

「なんでー?! 今日から家族の一員になるんだから、裸のお付き合いのひとつやふたつ…。」

「エルちゃん？その言い方はなんかおかしくないかな…?」

「大丈夫大丈夫。ちょーフツーだよ！ちょーフツー！」

いや、ちょーフツーって…どんだけ普通なの！？
普通よりも普通ってなんなのさ？！

「ごめんねっ。ぼく、ひとりで入りたいんだ。だから…」

「あ…：そんなの知ったこっちゃないわ。アタシははじめちゃんと
背中の流れ合いっこがしたいの。それだけッス！」

「いや…だから…ねっ？ぼくはひとりで…」

「はいはい。話はお風呂場で…」

「だ…か…ら…！」

「はいはい！話はお風呂場でね…」

「いやだああああ………」

ぼくはエルちゃんに引つ張られる様にして、お風呂場へ連れてかれ
た…。

——30分後——

「いやあ…いい湯だったね…はじめちゃん！」

「ま、まあまあね…。」

君がいなければとても快適でしたでしょうよ。

まあそんなことは絶対口には出しませんけど…。

お風呂から上がったぼくたちは…：はあ…：……。ぼくたちは、Tシ
ヤツに短パンという、まさに風呂上がりだぜ！といった格好で、裸
足でペタペタ歩きながら、冷蔵庫のあるキッチンへ向かっている。
お風呂上がりといえば牛乳！そう！フルーツ牛乳かコーヒ―牛乳！
もしくは普通の牛乳を飲まなければ、お風呂上がりと言えないと言
っても過言ではない。…いや、ごめんなさい。過言です。

そんな、お風呂上がりの絶対条件。牛乳を飲むために、ぼくたちはキッチンへ向かっているのです。

ガチャッ

「ふう〜涼スイ〜。冷蔵庫様様だねはじめちゃん！きつどこんなかで寝よつたらなまら気持ちよかよね〜。」

「いったいどこの人ですか？！」

「牛乳星人さ〜。好物はバナナミルクよ〜。」

「は、ははは…宇宙人なんだあ…そうか…出てく？」

「うそ！うそよ！アタシはエルちゃん！天使のエルちゃん！フルーツ牛乳大好きなエルちゃん！」

そう言いながら、冷蔵庫からさり気なくフルーツ牛乳を取り出し、カブガブと飲むエルちゃん。
じゃあぼくはコーヒ―牛乳をば。

「それよりはじめちゃん。」

「なに？」

「いつ天界行くの？シュバーレのパパに会いに行くんだよね？」

「……ああ！忘れてた！」

「やっぱりい〜」

「シュバーレさ〜ん！！」

ぼくは急いでコーヒ―牛乳を飲み干し、シュバーレさんの部屋へと向かった。

第三十九章…エルちゃんと天界へ

ガチャッ！

「遅くなつてすみませんシュバーレさん！」

ぼくはシュバーレさんの部屋の扉を開けると同時に言った。とくに時間指定してなかったけど、もう9時になるし、シュバーレさんがお父さんに、

「何時ごろに行くから」

とか言つてたら困るし。

「いや、別にいいけどさ…はじめちゃん？それで準備オツケ？なん
かいつもよりセクスイーだよ？」

「えっ？セクシー？どこが…？」

ぼくは自分の体を見下ろした。

かわいらしいピンクのTシャツに陸上選手が履いてるような短さの
短パン…。

あっ…これは家から出ていいような格好じゃないぞ。

「は、ははは…き、着替えてきまーす！」

ガチャッ！バタンツ！

ぼくはシュバーレさんの部屋を出て、自分の部屋へと向かった。

シュバーレさんのお父さんって言っても、いちおう神様に会うんだし、ちゃんとした格好じゃないといけないのかな？うーん…なにを着れば…？

部屋に着いたぼくは、ガバアッとクローゼットの扉を開けた。
はつきりいつて着たことのない服のほうが多いクローゼットの中を
ジーっと見つめながら、ぼくの中で、3分ほどじゃ終わらない脳内
会議が開かれていた。

なにを着ればいいの？ピクニックのときみたいにワンピース？それ
とも適当な感じでスカートとTシャツで？あっ！もしかしてドレス？
あゝ！いったいどれを……。

――20分後――

「ええい！もう、これでいいや！」

ぼくは、よくパジャマ替わりに着たりするジャージを手にとった。
それを素早く着て、ぼくはシュバーレさんの部屋へと向かった。
：20分以上考えた結果ジャージって：いったいなんなんだぼく！

ガチャッ

「すみません！遅くなりました！」

ぼくがシュバーレさんの部屋に入ると、そこにはシュバーレさんは
おらず、エルちゃんがいた。

「あれ？エルちゃん。シュバーレさんは？」

「あ！はじめちゃん！シュバーレならもう天界に行ったよ」

「うそお！！」

「うん。でね、アタシがはじめちゃんを天界のシュバーレン家まで
連れてくからさ！あ、準備オッケ？日記持った？」

「あっ……………取ってきますう……」

「急いでねー」

ガチャッ！

「取ってきたよ！日記！」

「ご苦労様ー。じゃあ行こうか！」

「うん！」

そう言うのとエルちゃんは、前にシュバーレさんが出してた【スカイゲート】を出した。

なんだかシュバーレさんのに比べて、小さい気がする。

シュバーレさんのは、扉くらしいの大きさがあったのに、エルちゃんのは窓くらしいの大きさしかない。

うーん：ちゃんと通れるんだろうか？ちょっと不安だなあ…。

「よしっ！ゲート開いたよはじめちゃん！ダイブダイブ！」

「あ、うん。」

そして、ぼくはゲートに飛び込んだ。

第三十九章…エルちゃんと天界へ（後書き）

読者の皆さま、おはようございます、こんにちは、こんばんは、リ
リイです。

すみません！なんかまた天界へ行くとか言ってたのに、行けてませ
ん。

本当に申し訳ない…

でも！大丈夫！次回こそは絶対に天界ですから！
どうか見捨てたりしないで……。

えっと…今回も読んで下さってありがとうございます。
次回も読んでいただけると光栄です。

リリイでしたー

第四十章…公園

ブウン…ドサツ

「きゃっ！」

うわぁ…なんか恥ずかしいなぁ…上手く着地できず転んじゃったよ…。

それにしても痛いなぁもう…あれ？ここはどこ…？

エルちゃんのゲートに飛び込んだぼくは、たぶん天界と思われるところに来ていた。

周りには、滑り台にブランコ。それに、シーソーや鉄棒といった公園には必要不可欠な遊具があり、入り口のところには、真っ白な綺麗なベンチが丁寧に置かれている。

ここは…シュバーレさん家の近くの公園…？

「はっじめちゃん！」

「うひゃぁ！」

ぼくの名前を叫びながら、後から抱き付いてきた人…。

こんなことをする人って言ったら…。

ぼくは背後からする声の主に聞いた。

「シュバーレさん？」

いや、どうせ当たってるだろうけど…とりあえず疑問形で。

「よくわかったねはじめちゃん！じゃあ、さっそくオレン家行こうか！」

ぼくの手を握り、歩きだすシュバーレさん。

「ちょっと待ってください！エルちゃんがまだなんです。もうちょっと待ってましようよ」

「却下」

「なんでですか！？」

「ええ。だって、エルの奴もうオレン家来てるし」

「…えっ？」

「いや、だから、エルが間違っではじめちゃんを公園に落としちゃったんだって。それを探しにオレが」

「…どうもありがとうございます…」

「いやいや」

再び歩きだすシュバーレさん。

いや、ちょっと待て！

「シュバーレさん！手え放してください」

いや、まず、なんで握んの！？

ぼくがそう言うのと、なぜか笑顔になるシュバーレさん。

「なに？恥ずかしいの？はじめちゃんは分かりやすいなあ。顔真っ赤だよ？ゆでダコ？」

うわぁ…ウザい…。

「そんなことないです！きつとぼく、風邪なんです。ほら、手え放してください！移っちゃいますよ？」

「風邪上等！オレ、神様だから風邪ひかねーし」

「…あ…そうですね…」

やられたああああ…神様は風邪ひかないのかあ…

「じゃ、オレン家行こうか」

「…はい」

…そのまま手を繋ぎっぱなしで、シュバーレさん家まで連れてくれました。

第四十章：公園（後書き）

どうも、リリイです。

いやぁ～なんか最近短すぎる気がします…。

どうしたものか…。

次回はもちよつと長く書きたいと思います。

今回も本編、後書きともに読んで下さってありがとうございます。
次回も読んでいただけると光栄です。

リリイでしたー

第四十一章：シュバーレさん家（前書き）

すみません。また短いです…

第四十一章：シュバーレさん家

ギイイイ……

重い門を開けると、そこにはギリシャ神話に出てきそうな大きな建物があつた。

「シュバーレさん？もしかしてこれが…」

「そう。オレン家」

「うっそおおお！？」

そのギリシャ神話に出てきそうな大きな建物のほかには、前にシュバーレさんが言っていた広さ3ヘクタールの庭。

その3ヘクタールの庭にあるバカデカイ噴水。
ギリシャ神話的な建物を囲むようにして、所々に建てられているお

とぎ話に出てくるようなお城や神殿。
もう、すごいを通り越してバカですか？と聞きたくなってくる。

「あ、ちなみに前言ってたペットってアイツらのことね！」

「えっ？アイツら？」

ぼくはシュバーレさんの指差す先を見た。

庭を走り回っているネズミ類の動物が2匹…。

……………ハムスターだ…。

あれはたしか…ジャンガリアンハムスターだっけ？

なんでまた3ヘクタールもあるこの庭に…？

「どう？」

「いや、どうって言われてもですね…あの…：…かわいいです」

「ありがとう！あ、名前は、大五郎と助三郎だ」

「は、はあ…」

シュバーレさん…ハムスターに大五郎と助三郎はないですよ…濃すぎませんか？

「大五郎おー助三郎おー達者に暮らせよおー」

「シュバーレさん！なに言ってるんですか！？」

「いや…こうも庭が広いとめったに会えないからさ」

「あ、そうですか…」

じゃあ家で飼えよって言って欲しいのかな……いや、言わないぞ！
ぼくは断じて言わないぞ…。

「さて、大五郎と助三郎にも会えたし、親父のとこ行こうか」

「あ、はい。でも、神様はどの建物におられるんですか？こうも広くては分かりませんよ？」

「…なぜそんなに敬語？」

「いや…だってほら、神様ですし…失礼ないようにと思ひまして…ね？」

きつとこの会話も聞いてたりするかもしれないしさ。

ほら、知らない人には敬語使わないとね。

「まあいいけどさ、怯えてる猫みたいでかわいいし」

「なんとでも言ってくださいー！ぼくは知らない人と女性には敬語って決めてるんですから。仲のいい人は除きますけど…あれ？どうしたんですか？」

喋ってるぼくをよそに、プルプルと震えているシュバーレさん。

…なに？いったいなんなの？

「はじめちゃん……」

「はい？」

「そのジャージのせいかもしれないけどさ、そんなに敬語使われるとさ、はじめちゃんが女子マネージャーに見えてきてさ…」

「えっ……？」

「……天氣先輩って呼んでー!!」

「うわあああああああ！ シュバーレさんが壊れたあああああ
あ！！！」

満面の笑みを浮かべながら、抱き付いてくるシュバーレさん。
いや！ちよつと力強すぎだよ！

えっ! ? ちょ、顔近いって…うそお! ?

「頬擦りはやめてええええええええええ！！」

そして、シュバーレさんは約10分壊れっ放しだった…。

第四十一章：シュバーレさん家（後書き）

どうも、リリィです！

すみません！全然長く書けませんでした…。

もしかしてスランプかも…いや、そんなはずはない！…たぶん…。
えっと…頑張ります！

今回も本編、後書きともに読んで下さってありがとうございました！
次回も自分を信じて頑張って書きますので、また読んで下さると光栄です。

それでは、リリィでしたー

第四十二章…神様?!

シュバーレさんが壊れてから約10分後、やっとシュバーレさんがもとに戻り、ぼくたちはシュバーレさんのお父さん…神様の待つ神殿らしき建物にやってきました。

外見、本当に神様がいるのではないかと思わせる（実際いるんだけど）雰囲気的神殿らしき建物。

が、しかし、なかに入ってみるとびっくり!

普通の家のような内装で、外の神々しさはどこへいったのって感じになっている。

えーっとなんて言えばいいのかな…なんか、神殿住宅って感じた。

「ねえ、はじめちゃん」

「なんですか?」

「あのさ、喉渴かない?」

テクテクと神殿らしき建物改め、神殿住宅の廊下を歩きながらシュバーレさんが言った。

言われてみると、ぼくの喉はちよっとなんか飲みたいかもって感じになってきている。

「えっと…はい。なんか飲みたいかもです」

「オツケ!じゃあキッチンに行こう。ジュースくらいあるはずだから」

「えっ!でも…なんかドロボウっぽくないですか?」

「なんで?ここオレん家だぞ?」

「あ…そういえばそうでしたね」

「だろ?じゃ、行こうか」

「はい」

廊下を真っ直ぐ行って、右に曲がるとキッチンがある。
そう言ってシュバーレさんはスタスタとぼくの前を進んで行く。

「……………」

「……………」

キッチンに着いたぼくたちは言葉を失った。

廊下を右に曲がった瞬間、ぼくたちの目の写ったおじさん。

白髪なのかそれとも地毛なのか、真っ白な髪をしていて、見たところ40代後半ってところだ。

優しそうな顔をしていて、口にはタバコを咥えている。

服装は、上に白いシャツ、下はトランクスといったお家モード全開な感じだ。

そんなおじさんはぼくたちに気づいてないのか、冷蔵庫を開けてビールを一気飲みしている。

…誰？

「わりい…親父だ…」

ぼくの心を読んだのか、シュバーレさんは言った。

「うそお！この人が神様あ！？」

第四十二章：神様?!（後書き）

どうも、リリイです！

：すみません。また短いです…。

うゝん：どうしたものか…。

まあ、なんとかやるでしょ！うん。

今回も、本編、後書きともに読んで下さってありがとうございます！
た！

次回も読んでいただけると光栄です。

リリイでしたー

第四十三章：7月7日は何の日？

キッチンで会ったシュバーレさんのお父さん：神様に連れられて、ぼくたちは今、神殿住宅の奥の和室に來ています。

まさに『和の空間』といったこの部屋。

なんか日本刀まで飾ってあるし：。

そんな和室の青々しい畳に敷かれている座布団の上に正座しているぼく。

その隣りに座っているシュバーレさん。

ぼくたちの前に、いまだシャツとトランクス状態で座っている神様。

なんなんだこの空気：。

いや、なんなんだ神様：なぜにまだトランクスなのですか：？

いや、違う！ いったいぼくになんの用なのでしょう？

そんなぼくの気持ちを察したのか、それとも読んだのか分からないけど、徐に口を開く神様。

「えーっと：君が春崎一ちゃんかな？」

「あ、はい。そうですけど：」

「あれ？ 元気ないなあ。せっかく呼んだのにー」

ぷくーっと頬を膨らませて、ご機嫌ななめですよ！ といった感じな神様。

よく考えてみよう。40代後半のおじさんが、ぷくーっと頬を膨らませてふてている姿を。無理だ。なんか悲しくなってくる。

「えっ：いや、元気ですよ！：いや違う。あのですね神様：」

「いやあー！ 声は聞いたことあったんだけど：かわいいねー！ 予想以上だよ！：そうだ！ 夏休み一緒に海にでも行かない？ パパの力で

沖縄でもハワイでもタダで連れてったげるよ！あ、ちなみに、シュバーレのパパだからパパとでも呼んでねー」

えっ？声は聞いたことある？どうして？ぼく、神様に会うの今日が初めてなのに…。

「あはは！それはねー。前にパパがはじめちゃんに話しかけたからだよ」

「あ…」

「ごめんね！今、心読んだよ」

「ですよ…で、それっていつですか？」

「確か…あれ！ツチノコ探しの時だね。ちよっと面白そうだったから行け行けって言ったんだけど」

あゝ確かにあの日の朝、声が聞こえてきたけど…夢じゃなかったんだ…。

「あ、それよりも神様…」

「パパだよ」

「パ、パパ。ぼくになにか用があるんじゃないんですか？」

もし無かったらあれだけど、無いならわざわざ天界まで呼ばないと思うし。

「そうそう、ちょっと話があってね…」

「話し…ですか？」

「そう。おゝい！エルちゃん！」

「はあゝい」

かわいらしい返事とともに、現れたエルちゃん。

「説明したげて」

「はい。わかりましたー」

和室のタンスから座布団を一枚取り出して、ぼくの前に正座するエルちゃん。

「あのですねはじめちゃん。7月7日はなんの日か知ってますか？」

7月7日…？7月7日っていったら…。

「七夕だよね？」

「はい。その通り。そして、美佐さんの誕生日でもあります」

「あゝそうだった！美佐さんの誕生日だ！」

「で、7月7日にですね。美佐さんのお誕生会を開こうと思いついて…」

「うん。いいんじゃないかな。美佐さんもきっと喜ぶよ！」

「会場をはじめちゃん家にしたいな」とパパさんが言っておりまして…」

えっ？ぼくん家？

「えっ？…なんで天界じゃないの？こっちのほうが広くていいのに…」

「7月7日はパパさん忙しいらしいんですよ七夕だから」

あゝ！願いを叶えたりしなきゃいけないもんね。神様だから。

「ダメかな？パパからのお願い…」

目をうるうるさせ、上目遣いでぼくを見てくる神様。これ、拒否権はないでしょ。

「いいですよ。どうせ暇ですし、ぼくん家でよければ」

「ありがとうはじめちゃん！さすが、シュバーレが氣にいるだけのことはあるな！」

「えへへ、どうもです」

美佐さんのお誕生会かあ…プレゼント何あげよう？あ、ケーキも作らなきゃ！なにケーキにしようかな…まあ麗香さんや高橋さんと一緒に決めればいいや！。

「あ、おいエル。そういえば、お前もしかしてもう美佐に誕生日のこと言ったか？」

突然思い出したようにして聞くシュバーレさん。

「え？なにも言っていないよ？」

「あ、ならよし！はじめちゃんも美佐には誕生日のこと言わないでね。ドッキリって感じにしたいからさ」

「あ、はい。わかりました」

ドッキリかあ…美佐さんどんな顔するかな？まあ、どうであれ、喜んでくれることは確かだと思うけど。

「うわあああああああ！！9時過ぎてるううううう！！」

うわっ！びっくりした！

なぜか突然叫びだす神様。

なに？いったいなんなの！？

「ハ○ルの動く城があああああ…いや、まだ間に合う！待っててくれ！日本天界放送局ううううう…」

目にも止まらぬ速さで部屋から出ていく神様。
あ、今日ハウ○の動く城やるんだ。へえ…。

「パ、パパ待って！ぼくもハウル見たいですうううう！！」

第四十三章：7月7日は何の日？（後書き）

どうも、リリィです！

ああ！やばい！時間が！

ハウル見なきゃ！

て、ことで、今回も本編、後書きともに読んで下さってありがとうございます！

ジブリ大好きっ子のリリィでしたー

第四十四章：七夕。前編（前書き）

いつきに七夕まで飛びます。

第四十四章：七夕。前編

7月7日。彦星と織り姫が天の川で出会った日。そんなロマンチックな日、7月7日、七夕は谷本美佐の誕生日である。

私こと、モスト・スカイ・ゴッドは神様なわけで、この日は日本中の願い事を叶えなければならない。

もちろん。それは“すべて”ではない。数指定されているわけでもない。

本当に叶えたいと思っている強い願いだけしか叶えることはできない。

しかし、それもすべてではないのだ。

さあ：今年はどうな願いが私に届くのだろうか？

7月7日。午後6時40分過ぎ。

今日は、待ちに待った美佐さんの誕生日。

この日のためにプレゼントを買った。午前中にケーキも作った。

そして今、ぼくはお誕生会会場となる部屋の飾り付けの真っ最中だ。って言うっても、もうほとんど終わっちゃってるんだけど。

「おい、はじめ。この笹はどこに置くんだ？」

飾り付けの手伝いをしていた高ちゃんが、玄関のところに置いてある2mほどの大きな笹を指差しながら言った。

どこに置くって言うても：部屋の中はまず無理だと思う。笹置くほ

ど広いわけじゃないし…。

美佐さんが、

「これでは天へ願いが届かないではないか」とか言いそうだし。

うーん…どこに置こうかな…？

「おい、はじめ」

高ちゃんが笹を持ち上げながら言う。

「お前ん家、たしか屋上あったよな？」

「あ、うん…あぁー！」

そうだ！屋上があった！

「ナイス高ちゃん！さっそく屋上に行こっ！…あ、笹は…」

「俺が持つ」

「ありがとー。さすが高ちゃん！」

「…気にするな」

そう言っって首をポリポリとかく高ちゃん。

これはきつと照れ隠しだ。

小さいころから、褒められるとすぐ首をかく癖があったし。

なんか昔、

「褒められるのは好きじゃない」

とか言っって顔を赤くしながら嫌がってたけど、全然嫌そうじゃなかったし。

まあ、そんなことはお構いなしに、今まで高ちゃんを褒めちぎってきたばくなんだけどね。

「よし。どの辺に置こうかなつと…」

屋上に着いたぼくは言った。

屋上の広さは…10畳くらいかな？

そこそこ広いから、ぼくらが小さいころは、お父さんと高ちゃんのお父さんとが夏に飲み会とかしていたのを覚えてる。

「はじめ、これはどうだ？」

中央に置いてある白くて円いテーブルに、ビーチパラソルを挿す穴が開いている。

その穴に差し込むようにして高ちゃんが笹を置いた。

「うん。いいんじゃないかな？ほかに置くとこ無いしさ」

「そうか？じゃあここでいいな。あとは谷本達が帰ってくるのを待つだけか…」

「うん！…でも、エルちゃん大丈夫かな…美佐さんに誕生会のこと話してないといいけど…」

第四十四章：七夕。前編（後書き）

どうも、リリースです！

いやあ、飛びました。

いつきに七夕です。誕生日です。

次回は七夕後編か中編ってことでお願いします。

それでは、今回も本編、後書きともに読んで下さってありがとうございます！

リリースでしたー

第四十五章：七夕。中編（前書き）

今回は美佐視点です。

第四十五章：七夕。中編

7月7日。午後6時過ぎ。

夏だからまだ日は高いけれども、だんだんと空が赤く染まってゆくこの時間。

今私は、エルと前田と谷口君を連れて、夕飯の材料と笹につける短冊を買いに近くのデパートに来ている。

なぜ、前田と谷口君がいるかと言うと、私は初めて行くデパートなので、

「どこに何があるか分からなかったら困りますし」

と、はじめくんが谷口君を道案内としてつけてくれたのだが、なぜかオマケまでついて来てしまったというわけだ。

「ふう。あとは夕飯の材料だけです」

1. 5リットルのジュース5本と短冊50枚セットの入ったカゴをブラブラさせながら言うエル。

：ああ：私としたことが、お使いの紙を無くすとは一生の不覚…。
いったいどうすれば…。

「美佐さん？」

「な、なんだい？」

「はじめちゃん。夕飯何にするって言ってました？早く買って帰りましょーよ」

「それが…」

言えない：紙を無くしたなんて死んでも言えない！

くっ：なんだ：今夜、はじめくんは何を食べる予定でいるというのだ…？

…そうだ！！はじめくんの気持ちになって考えるんだ！
今日の夕飯は……………

…どうしよう…私には分からない…。

「美佐さん…もしかして…」

あゝあ。と言うような目で私を見るエル。

くそっ…気付かれたか…私だって無くしたくて無くしたのではないのだぞ！こんちくしょうめ！

そしてそのまま話し続けるエル。

「はじめちゃん、夕飯の材料言うの忘れてたんですね？」

「えっ？…あ…う、うん。そうなんだ！はじめくんが…」

すまないはじめくん…だが、こうするしかなかったんだ…。

すると、エルがはじめくんから借りていた白い鞆からケータイを取り出し、誰かに電話をし始めた。

ピッポッパ！プルル…

カチャッ

『あ、もしもし春崎ですけど…』

「あ！はじめちゃん。あのですね…」

ピッ！ツーツーツー…

私はすかさずケータイを奪い、電話を切る。

「な、なにするんですか!？」

「は、はじめくんには私が聞くよ。…いや、聞かせて! 私に聞かせて!」

エルに電話をさせたら私が紙を無くしたことがバレてしまう。それだけは絶対に避けなければならない! 私は今までエルの前で失敗はしたことがないのだ!

今まで、そうやって完璧な姐さんキャラを築いてきたとゆうのに…。こんなドジを踏んだと知ったら私のキャラはボロボロだ…。

ここはなんとしても私がはじめくんに聞く必要があるのだ! ねえ! そうでしょ!?

…いや、まあ、うん。そうなんだよ。

「よし。あとは私がはじめくんに材料聞いて買っとくから、エルはもう帰っていいよ」

そう言って私は、ポケットからケータイを取り出す。

その間にエルは、

「あ、そうですかあ? じゃあお言葉に甘えてアタシ先に帰りますね」と、言っただけで私のもとから離れて行く。

…よし。

ピッポッパ! プルルル…

カチャッ

『はいもしもし春崎ですけど…』

「あ、はじめくん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど…」

『あ、美佐さん。いいですよ。聞きたいことってなんですか?』

「いやあ…恥ずかしながら、ちょっとお使用のメモを無くしてしま
ったみたいなんだよ。それでね、夕飯の材料を教えてもらおうかと
思ってた電話をしたのだが…」

『あ、そのことでしたらちょうど今電話しようと思ってたんですよ
！』

「おお！それなら話が早い！ではさっそく頼むよ」

『…美佐さんメモ忘れてましたよ』

「なに！？そんなはずは………あっ！」

『ねっ忘れてたでしょ？』

「すまない…」

『いや、謝ることじゃないですよ。それより、夕飯の材料ですけど

…』

「うむ」

『シュバーレさんの要望でカレーの予定だったんですけど、急遽バ
ーベキューってことになりましたんで、お肉とお野菜などを買って
きてください。あ、あとタレとかもお願いしますね』

「オーケー任せて！なるべく早く買って帰るからね♪」

『はい！お願いしますね～』

ピッ！ツーツーツー…

よし！任務完了！いや、任務開始いー！

さて、さっそく野菜売り場に…。

「………あっ…」

ハイテンションでくると方向転換した私の目の前に現れたひとり
の男…前田…。

なぜか前田はニヤニヤしながら私をじっと見ている。

…なんだ？なんかとっても嫌な気分だぞ…？

しかも笑顔って：言っちゃ悪いが気持ちが悪い。
エルだったら今ごろ大泣きしているだろう。今更ながら思うが、確かにこれは恐怖だ。

「聞いたぞ。紙無くしたんだって？」

ニタニタしながら前田が言う。

くそっ！理由はないが、なんかとてつもなくウザい。

「バカ者！忘れたのだ！無くしたのではない！」

「その上、あの天使ちゃんにバレるとマズいんだろ？」

「な、なんでそれを！」

「さっきからブツブツ言ってたじゃないか」

しまったあ！私としたことが！声に出しちゃってただなんてえ！

「だ、だからどうしたと言うのだ。お前には関係のないことだ」

「確かに、俺には関係のないことだ。：ハハハハ！まあいい。夏休みが楽しみだよ。ハーツハツハツハツハアー！」

そう言って私の前から去って行く前田。

いったい何だったんだ？

前田が去った後、私には、謎とストレスだけが残った。

：さて、野菜売り場に行かないと：。

「あ、谷本。まだ買い物終わってなかったのか？」

私が野菜売り場でキャベツやらピーマンやらをカゴに入れてみると、

谷口君がやってきた。

どうやら本を買いに行ってたのか、手にはビニール袋に包まれた参考書のようなものを持っている。

「そうだ。まだ、買い物は終わってないのだ。なのに前田は意味が分からないことを言っただけで消えるし。エルは帰ったし（まあ、帰らせたに近いが）。私ひとりでこの荷物を持てとゆうのか？ まったく私を何だと思っているんだあいつらは…」

「ふーん…。まあ、いいんじゃない？ もともと、はじめに道案内と荷物持ち頼まれたの俺なわけだし。ほら、カゴ、俺が持つよ」

優しく手を差し延べる谷口君。

優しいなあ…。い、いや！ 私はけっしてときめいてなどおらんぞ！
ちよつと優しいなあって思っただけなんだから！
そして私は再び野菜に手を伸ばす。

「な、なあ、野菜、もういいんじゃないか？」

「え？」

「俺、野菜あんまり好きじゃないんだよな…」

意外なひとこと。そうなのか…知らなかった…。
なんか勝手に野菜とか好きで、なんでも食べるって思ってたよ。

「ふふっ。そうだね。じゃあ、お肉選びに行こっか」
「お、おう…」

谷口君の動きが止まる。

「あれ、どうしたの？ 谷口君」

「いや、谷本も女の子っぽく笑うんだな〜って」

「な、なに言ってるの！私だって笑うさ！」

やばい！なんだこれ！？わけわかんないよ！顔が熱いよ！

「おおー！」

「今度はなによ！？」

「谷本も照れてるんだな〜って」

「あゝ！もういい！さ、お肉買ってさっさと帰るぞ！」

そして私は、谷口君に荷物を持ってもらって買い物をすませた。
…ようし！早く帰って夕飯の準備だ！

第四十五章：七夕。中編（後書き）

どうも、リリイです！

いやあ、これからどうなるんだろ？

いちおう七夕は、残る後編でお終いなわけですが…どうしよう？全然考えてないや！

まあ、何とかなると思います。ノリで！

というわけで、今回も、本編、後書きともに読んで下さってありがとうございます！

また次回も読んでいただけるととっても嬉しいです！

それでは、リリイでしたー

第四十六章：七夕。後編

『お誕生日おめでとー!』

買い物から帰ってきた美佐さんを出迎えるみんな。

なんだか美佐さんは状況が掴めてないのか、キョトンとしている。

「私が？」

これを言うのに約2分。

ぼくたちは笑顔のまま首を縦に振る。

「さ、美佐さん! そんなとこ突っ立ってないで、上がって上がって!」

「あ、うん」

エルちゃんに連れられて部屋へと誘導される美佐さん。

「あっ! ケーキではないか! しかもチョコ!」

ケーキを見ていつきにテンションが上がる美佐さん。

確かにケーキを見たらテンション上がるよね。

「私と紗香さんとはじめさんの手作りですよ」

麗香さんが、3段重ねのチョコプレートケーキを目をキラキラとさせながら見つめる美佐さんに言った。

なんでチョコプレートケーキかというと、エルちゃんから

「美佐さんは昔からチョコプレートが大好きなんだよ」

と、聞いて、チョコレートケーキにしてみたんだけど、予想通り。
チョコレートケーキも好きみたい。

「ね、ねえ？あの、さっそくだけど…食べてもいいかな？」

「ダメです。ロウソクの火を吹き消してからです」

「くぬぬ…そういえばケーキを食べるにはロウソクの火を消さねば
ならなかったな…わかった。早く火をつけてくれ」

すかさずロウソクに火をつける高ちゃん。

「ふっ…この程度の火力で……笑止!!」

やる気満々な美佐さんは、ふう〜と息を吹き、17本あるロウソ
クの火を次々に消していく…。

あ！ひとつだけ消えてない！

「……えいっ！」

スポッ!…ポイツ

「ああ！何してるんですか美佐さん!？」

「だ、だってコイツってば消えないんだもん！私のケーキ食べるの
邪魔するんだもん！」

美佐さんは、消えなかったロウソクをひっこ抜いて投げ捨てた。あ
あ…なんてことを…。ちゃんと吹き消さなきゃあ。

「ようし！これで邪魔者は消え去った！」

た、確かに消えましたけど…。なんか、キャラおかしくなってます

よ美佐さん！

「はじめくん！」

「あ、はい！」

「フオーク！」

「どうぞ」

「いただきまーす！」

――五分後――

「ぷはーっ…ごちそうさまでしたー」

う、うそお！ひとりで全部食べちゃったよ！

…あのチョコレートケーキ、直径30cmはあったんだよ？！

それを5分で間食って…美佐さんはフードファイターですか！？

「ふう……よしっ」

ジュースを飲んで一息つくと、笑顔で立ち上がる美佐さん。

「願い事を書こうか！」

「えっ！？あの…美佐さん。プレゼントは…」

「あ、そうだね…後で貰うことにするよ。はい。短冊」

「あ、ありがとうございます」

そして、みんなにも短冊を配る美佐さん。

赤やら青やら黄色やら色とりどりの短冊がある。
ちなみにぼくの短冊は青です。

「ようし！みんなに渡ったか？」

『はい』

「じゃあ、決まった人から書いてくれ。みんなが書かないと晩ご飯は食べれないからな」

そう言って、スラスラと短冊にペンを走らせる美佐さん。
じゃ、ぼくも：

――5分後――

（屋上）

「よし！完璧だな」

笹に短冊を取り付け、満足そうな笑顔を浮かべる美佐さん。
他のみんなも書き終えたみたいで、次々と笹に短冊を取り付けていく。

じゃあ、とりあえず、みんなの願い事を紹介します。

【160キロ！！ 中山高広】

【もっと強くなる！ 谷口亮平】

【みんな笑顔でありますように 高橋紗香】

【猫が欲しい 宇佐美麗香】

うんうん。これが七夕だね。
ちなみに、七夕らしくないのはこちら。

【セクシーさをアタシに： エル】

【はじめちゃんに： シュバーレ・ウエザー・ゴッド】

【ケーキ！ 谷本美佐】

【萌え！！ 前田晃寛】

はい。なんだこれ。

前田のなんかすでに願い事ですらないよ！
ていうか、シュバーレさんはぼくに何を望んでるんですか！？

「ねえはじめちゃん」

「うわっ！な、なんですか？」

突然背後から現れたシュバーレさん。

あゝびっくりしたあ：

「はじめちゃんは願い事なんて書いたの？」

「あ、えーっと：

「シュバーレ！はじめくん！早くバーベキューしようよー」

「あゝい。今行くー。じゃ、行こうか、はじめちゃん」

「はい！」

ぼくは急いで短冊をつけると、シュバーレさんと一緒にみんなのと

ころへ向かった。

みんなの願い、叶うといいな

第四十六章：七夕。後編（後書き）

どうも、リリースです！

七夕、終わりました：うん。

次回は：いや、やっぱりいいです。

今回も、本編、後書きともに読んで下さってありがとうございます！

また次回も読んでいただけると光栄です。

リリースでしたー

エピローグ（うえ）

肌に突き刺さらんとばかりに鋭い日差しがぼくたちを照り付けている。

「…で、あるからして、私、貴讃井忠文^{きさぬい ただふみ}は、みなさんには青い夏空の様な、一点の曇りのない、正しい生活を送っていただきたいと思っております。」

今日、7月18日は、清流高校の終業式です。

そして今は、終業式の定番。“校長先生の無駄に長い話”を聞いているのですが…

なんで校庭？ 今日のような日差しの強い日は、日射病を含む、熱中症になりやすいから、普通は体育館でやると思うんだけど…。そんなぼくの思いは届かず、まだまだ語り続ける校長先生。

「しかし！ 私、貴讃井忠文は…」

——20分後——

「以上で、終業式を閉会します。いちどう、礼！ …えーっ…では、この後各自教室に戻って、点呼を受けてください。点呼が終わったクラスから解散とさせていただきます」

やっと終わった…。

約40分間にわたって繰り広げられた校長先生の無駄に長い話は、結局まとめると、元気に過ごさないよ。ってひとこと言うのと同じような重さの内容だった。

ていうか、生徒のことを思うのなら、ひとこと言って終わってくれの方が一番いいと思うんだけど…。

まあ、終わったことはもういいや！ 早く教室に戻って点呼を受けよう。

「よし。全員いるね」

点呼を終えて、教室を見渡す真里子先生。

「みんな一学期ご苦労様！ わかっているとと思うけど、明日からは夏休みになります。体に気をつけて、元気に楽しい夏休みを過ごしてくださいね！ 先生からは以上です。では、きりーつ。礼！」

「ありがとうございます」

みんなが元気な返事を返した。

よく考えてみたら本当、ご苦労様って言うてもらいたくなるような一学期だったな…。

朝起きたらシュバーレさんに女の子にされちゃって、その上居候するし。

毎日のように騒がしいし。

もう、本当にご苦勞様。ぼく。

「なーに言ってんのはじめちゃん！ 本当に忙しいのはこれからだぜ？ みんなはじめちゃんのこと好きなんだからさ、ねっ」

「シュバーレさん……」

「ん？ どったのはじめちゃん」

「心……読みましたね？」

「ごめんなさい！ このとおりです！ はじめちゃんが元気なさそうだから、つい……」

土下座をして謝るシュバーレさん。

「あ、いいんですよ！ シュバーレさん、ぼくのこと心配してくれたんですよ？ ぼくこそ心配させてごめんなさい。さ、早く家に帰りましょうよ」

「そうだね、ありがとう。じゃ、帰るか」

「はい！」

明日から夏休み。さあて！ 忙しくなるぞー！

エピローグ（した）

キラキラと輝く天の川を見ながら、私はひたすら集中していた。私こと、モスト・スカイ・ゴッドは、神様である。

今日は七夕で、日本中の願い事が私のもとを訪れる日だ。

「…来たか…」

私は手に持っていた1枚の短冊を床に置いた。

すると、置かれた短冊はキラキラと輝きながら宙に浮く。

パン！

1枚の短冊が、何枚もの短冊に分裂していく。

「今年はこんなもんか…」

私はその、分裂した短冊を1枚1枚集める。

短冊には、ひとつひとつに願い事が書いてあり、私はその願い事を読んでいく。

「えー…なになに…お母さんが元気になってほしい…か…よしよし、元気になってもらいましょう！」

すると、その願い事が書いてある短冊は、光を放ちながら消えていく。

そしてその光は、天の川の光のなかに吸い込まれていく。これで、この短冊の子のお母さんは元気になっただろう。

そしてその後も、残りの短冊も読んでいく。

とうとう最後の1枚だ。

私は気合いを入れて、最後の1枚に手を伸ばす。

「みんなと一緒にいれるといいな…か、友達思いのいい子だね…でも、これは私にはどうしようもできないなあ…。そのかわりに、この短冊を友達みんなに届けてあげよう。君の思いが友達に届くことを祈って…」

パァン！

そして短冊は、何枚かに分裂して、友達のところへと消えていく。

「本当にいい娘なんだな…この娘は…」

願いが叶えられずに残った1枚を拾った私は、もう一度短冊を読んだ。

『みんなと一緒にいれるといいな 春崎一』

エピローグ（した）（後書き）

どうも、リリースです！

終わりました！『今日から私?!』今まで読んで下さった皆さま、最近読み始めた皆さま、どうもありがとうございました！

それでは、次は『今日から私?! 2』で会いましょう！

本当にありがとうございました！

リリースでしたー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3957a/>

今日から私？！

2010年10月10日19時56分発行